

中央自動車道長野線 埋蔵文化財発掘調査報告書13

—更埴市内・長野市内その1—

とり ばやし 遺 跡
鳥 林 遺 跡
こ きか にし 遺 跡
小 坂 西 遺 跡
つる はぎ なひろ いわかげ
鶴 萩 七 尋 岩 陰 遺 跡
あか ざわ 城 跡
赤 沢 城 跡
しお ぎま じよう みやま とりで
塩 崎 城 見 山 砦 遺 跡
ぢ の め 遺 跡
地 之 目 遺 跡
いつ ちよう だ 遺 跡
一 丁 田 遺 跡

1994

日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会
働長野県埋蔵文化財センター

中央自動車道長野線 埋蔵文化財発掘調査報告書13

—更埴市内・長野市内その1—

とり	ばやし	遺	跡
鳥	林		
こ	さか	にし	遺
小	坂	西	跡
つる	はぎ	なひろ	いわかけ
鶴	萩	七	岩陰
あか	ざわ	城	跡
赤	沢		
し	おぎ	きじょう	みやま
塩	崎	城	見山
ち	の	め	遺
地	之	目	跡
いつ	ちよう	だ	遺
一	丁	田	跡

1994

日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会
助長野県埋蔵文化財センター



鳥林遺跡全景（南から）



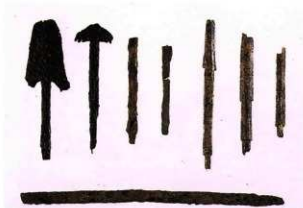
小坂西遺跡出土中世陶磁器



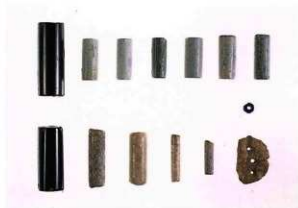
鶴萩七尋岩除遺跡全景（北東から）



同 SK01出土弥生土器



同 鉄器・骨鉄・鈍（1：3）



同 玉類・滑石製品（1：2）



塩崎城見山岩遺跡全景（西上空から）



同 主郭部全景（西から）

序

勤長野県埋蔵文化財センターによる善光寺平の調査は、昭和62年度にはじまり、当初の長野自動車道関連の調査から、上信越自動車道、北陸新幹線関連を加え、現在に至るまで実施され続けています。本書で報告する鳥林遺跡をはじめとした更埴市・長野市内の6遺跡の調査は、昭和63年に着手し、平成3年に終了しました。

今回調査した遺跡は善光寺平南部の、筑摩山地から平野部に展開する山麓部に位置しています。長野自動車道のルートと重ね合わせますと、「田毎の月」で有名な名勝姨捨山から、右手に千曲川が緩やかに北流する善光寺平を眺望しながら、緩やかにカーブを描いて再びトンネルに入り、平地の水田地帯に抜けます。調査地点はその山麓部にあたります。

周囲の丘陵部には、前期古墳として有名な川柳將軍塚古墳・中郷神社古墳があり、眼下に広がる千曲川の自然堤防上には塩崎遺跡群・篠ノ井遺跡群が展開しています。一方対岸には屋代遺跡群、森將軍塚古墳を望むことができ、一帯が肥沃な地帯で古くから開発が進み、古代において信濃の政治の拠点として重要な位置を占めていたことがわかります。

調査の内容につきましては、すでに当センター発行の「長野県埋蔵文化財ニュース」・「年報」、現地説明会、遺物展示会等でその一端を紹介してまいりましたが、整理作業を進める中で新たな知見を得て、本書に収録することができました。

時代的には、旧石器時代から中・近世に至るまで途切れない生活の痕跡を認めることができます。いくつか特徴をあげますと、善光寺平では珍しい縄文時代早期集落の鳥林・小坂西遺跡、墓下では稀な弥生・古墳時代の岩陰遺跡である鶴萩七尋岩陰遺跡、センターとしてはじめて調査した山城である塩崎城見山岩遺跡・赤沢城跡など、いずれも中・小規模な遺跡ですが内容はきわめて豊富です。

また、整理作業中の平成5年3月には長野自動車道が豊科ICから須坂・長野東ICまで開通しました。今日、長野県の南北を結ぶ交通の大動脈として、調査した遺跡の上を多数の車両が通行している姿を目にしますと、感慨もひとしおです。

最後になりましたが、発掘調査を開始する段階から本報告書の刊行にいたるまで、深い御理解と御協力をいただいた、日本道路公団名古屋建設局、同長野工事事務所、長野県高速道局、同長野高速道事務所、地元更埴市、長野市、同教育委員会、篠ノ井農業協同組合、地区用地被買収組合（者）等関係機関および地元協力者の方々、発掘・整理作業に従事協力された多くの方々、発掘から整理作業まで適切な御指導・御助言をいただいた長野県教育委員会文化課と、本書の刊行までこぎつけた当センター職員の努力に対し、心から敬意と感謝を表す次第であります。

平成6年3月31日

財団法人 長野県埋蔵文化財センター

理事長 佐藤善成

例 言

- 1 本書は、中央自動車道長野線建設工事にかかわる、長野県東埴市烏林遺跡・小坂西遺跡・跡之目遺跡・一丁田遺跡、長野市鶴萩七尋岩陰遺跡・赤沢城跡・塩崎城見山砦遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 上記遺跡の概要については、すでに当センター発行の『長野県埋蔵文化財センター年報』5・6・8、『長野県埋蔵文化財ニュース』No.29で紹介しているが、本書の記述をもって最終報告とする。
- 3 本書で使用した地図は、日本道路公団作成の中央自動車道長野線平面図（1：1,000）をもとに作成したほか、建設省国土地理院発行の地形図（1：50,000）を使用した。
- 4 写真図版PL1・2の航空写真（版権国土地理院）は日本地図センターより提供を受けたものである。
- 5 巻首図版および写真図版掲載の航空写真は㈱共同測量社・㈱写真測図研究所・新日本航業株式会社に撮影を委託したものである。
- 6 本報告書には次の方々から玉稿を賜り、付章に掲載した。記して謝意を表する。（順不同）
炭化材の樹種同定・・・金沢大学教養学部 鈴木三男氏、農水省森林総合研究所 能城修一氏
人骨・動物骨鑑定・・・・・・・・・・獨協医科大学第一解剖学教室 茂原信生氏、芹澤雅夫氏
リン・カルシウム分析および¹⁴C年代測定・・・バリノ・サーヴェイ株式会社
- 7 執筆分担は次のとおりである。（五十音順）
大竹憲昭 第7章第4節1
河西克造 第6章のうち第1節2・3以外、第7章のうち第4節以外
関 全寿 第2章第1節、第3・4・5章の各第2節1、第6・7章第2節の一部
原 明芳 第3章第4節3・第4章第4節4・5、第6章第4節、第7章第4節2・3、第8章
綿田弘実 上記以外
- 8 遺構番号は、時代にかかわらず種別ごとに付けたが、原則として発掘調査時の番号を変更しなかったため欠番がある。遺物番号は、縄文土器・石器は通し番号、古代土器は遺構ごとの通し番号、中世以降の遺物は種別ごとの通し番号とした。この番号は挿図・挿表・写真図版のいずれにも符号する。
- 9 註・参考文献は各章あるいは節の末にまとめたが、執筆者ごとに適宜挿入した部分がある。
- 10 本書の編集・校正は綿田が行い、樋口昇一が全体を校閲した。なお、付章は原則として原稿のままとした。
- 11 本書で報告した各遺跡の記録および出土遺物は、㈱長野県埋蔵文化財センターが保管している。
- 12 発掘調査・報告書作成にあたり、下記の諸氏・諸機関にご指導・ご援助頂いた。記して謝意を表する次第である。（敬称略、五十音順）
会田 進 青木和明 赤羽義洋 阿部芳郎 飯島哲也 石井 寛 磯部幸雄 伊藤正人 大沢 哲
大塚真弘 奥 義次 奥川弘成 小野正文 金子直行 神村 透 木村有作 小林康男 小松 学
小山丈夫 近藤尚義 櫻井真貴 佐藤信之 重松和男 島田哲男 下平博行 新谷和孝 杉浦 知
関根慎二 竹原 学 田口一郎 谷口康浩 谷藤保彦 田村陽一 千野 浩 塚本師也 時枝 務
中井 均 中沢道彦 中村由克 新津 健 西沢寿晃 萩原三雄 保坂裕史 宮井英一 村田修三
望月幹夫 百瀬忠幸 守矢昌文 矢口忠良 矢島宏雄 八巻與志夫 山口 明 山路恭之助 山田
猛 山田昌久 吉岡弘樹 領家正浩 知多市歴史民俗資料館 名古屋博物館 南山大学人類学博
物館 横須賀市立人文博物館

凡 例

- 1 本書に掲載した実測図の縮尺は原則として下記のとおりで、該当箇所のスケールの上に記してある。ただし地形図・調査区全体図・遺構分布図などは任意である。

1) 主な遺構実測図

竪穴住居址・掘立柱建物址 1:60 住居址内施設 1:30 土坑・集石 1:40

2) 主な遺物実測図

縄文土器 1:4 縄文土器拓本 1:2 石屑・剥片・石鏃・刃器・石錐 1:1

石匙 2:3 原石・石核・打製石斧・磨製石斧 1:2 磨石・凹石・敲石 1:3

古代・中世土器・陶磁器 1:4 土製品・鉄製品・石製品 1:2 石臼等 1:6

銭貨 2:3

- 2 本書に掲載した主な遺物写真の縮尺は、下記のとおりである。

図上復原した縄文土器 1:3 拓本図化した縄文土器 1:2 石器 実測図と同一

古代・中世土器・陶磁器(杯・碗・皿・小型甕等) 1:2.5 古代・中世土器・陶器(甕) 1:3

銭貨 1:1 その他の古代・中世遺物 実測図と同一

- 3 遺物の出土地点の表記は、適宜実測図表題に続けるか、実測図中あるいは遺物番号のわきに表記し、一部は一覧表によった。また遺物写真中には実測図中の遺物番号をつけた。

- 4 実測図中のスクリーン等々は、下記のように用いた。これら以外の場合は、当該項目の中で説明するか、図中に凡例を示した。

1) 遺構実測図



焼土・火床



礫の断面



炭化物



攪乱

2) 遺物実測図

①古代土器

実測図の断面は、黒色土器・土師器は白ヌキ、須恵器は黒ヌリ、灰釉陶器は網点とし、黒色処理・赤彩部分は網点で表現した。

②中世以降の土器・陶磁器

実測図の断面は、土器は白ヌキ、国産陶器は黒ヌリ、輸入陶磁器は網点とし、釉の種類は鉄釉は濃い網点、鎔釉は砂目で表現した。

- 5 古代土器の器種分類は、⑧長野県埋蔵文化財センター1990『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 松本平総論編』に準拠した。

本文目次

巻首図版

序

例言

凡例

目次

第 1 章 序 説	1
第 1 節 調査の契約	1
1 発掘調査委託契約	1
2 契約業務の経過	1
(1) 昭和63年度	2
(2) 平成元年度	2
(3) 平成3年度	3
(4) 平成4年度	3
3 調査に参加した補助員	4
第 2 節 調査の方法	5
1 発掘調査の方法	5
(1) 遺跡名称と記号	5
(2) 調査区設定の原則	5
(3) 遺跡調査の手順	6
(4) 遺構記号	6
(5) 遺構の調査方法	7
(6) 測 量	7
(7) 写 真	7
2 整理作業の方法	7
(1) 発掘記録の整理	7
(2) 遺物の整理	8
(3) 報告書の記述と編集	8
第 2 章 遺跡群の立地と環境	9
第 1 節 長野盆地南西部の地理的環境	9
1 位置と地形	9
2 地 質	10
3 気 候	14
第 2 節 歴史的環境と周辺の遺跡	16
第 3 章 鳥 林 遺 跡	27
第 1 節 遺跡の概観と調査の概要	27

1	遺跡の概観	27
2	調査の概要	28
3	調査の経過	29
第2節	地形と基本層序	30
1	地形	30
2	基本層序と遺構	31
第3節	遺構	31
1	縄文時代の遺構	31
(1)	竪穴住居址	31
	SB01 <31> SB03 <32>	
(2)	土坑	33
	SK01・02・05・06・10・11	
2	弥生時代の遺構	34
(1)	土坑	34
	SK07・08	
3	平安時代の遺構	35
(1)	竪穴住居址	35
	SB05 <35> SB07 <35>	
第4節	遺物	36
1	縄文時代の遺物	36
(1)	土器	36
	① 土器分類の概要 <36> ② 土器の分布と出土量 <36> ③ 遺構出土の土器 <36>	
	④ 遺構外出土の土器 <40> ⑤ 第Ⅰ群土器の編年の位置付け <49>	
(2)	石器	49
	① 概観 <49> ② 原石・石核 <53> ③ 剥片・砕片 <55> ④ 石鏃 <57>	
	⑤ 石槍 <59> ⑥ 石錐 <59> ⑦ 石匙 <61> ⑧ 刃器 <61> ⑨ 大形刃器 <62>	
	⑩ 鎌器 <61> ⑪ 打製石斧 <64> ⑫ 磨製石斧 <64> ⑬ 石錘 <65>	
	⑭ 台石 <67> ⑮ 磨石類 <67> ⑯ 特殊磨石 <72> ⑰ スタンプ形石器 <74>	
	⑱ 砥石 <74>	
2	弥生・古墳時代の遺物	74
(1)	土器	74
3	古代・中世の遺物	75
(1)	土器	75
第5節	小結	76
第4章	小坂西遺跡	79
第1節	遺跡の概観と調査の概要	79
1	遺跡の概観	79
2	調査の概要	79
3	調査の経過	81

第2節 地形と基本層序	83
1 地形	83
2 基本層序と遺構	84
第3節 遺構	85
1 縄文時代の遺構	85
(1) 竪穴住居址	85
SB11 <85> SB12 <85> SB12B <85> SB13 <87> SB14 <87>	
(2) 遺物集中	88
SQ01・02	
(3) 土坑	88
SK03～07	
2 弥生時代の遺構	89
(1) 土坑	89
SK60・61・34	
3 古墳時代の遺構	90
(1) 住居址	90
SB06 <90> SB10 <90>	
4 奈良・平安時代の遺構	91
(1) 住居址	91
SB08 <91> SB05 <91> SB03 <95>	
(2) 土坑	93
SK05	
(3) 遺物集中	93
SQ03	
5 中世の遺構	94
(1) 竪穴建物址	94
SB07 <94> SB09 <95> ST03 <95> SB01 <97> SB02 <98> SB04 <98>	
(2) 竪立柱建物址	99
ST01 <99> ST02 <99>	
(3) 土坑	99
SK01・02	
第4節 遺物	100
1 縄文時代の遺物	100
(1) 土器	100
① 土器分類の概要 <100> ② 土器の分布と出土量 <100> ③ 遺構出土の土器 <101>	
④ 遺構外出土の土器 <101>	
(2) 石器	111
① 標識 <111> ② 原石・石核 <115> ③ 剥片・砕片 <115> ④ 石錐 <116>	
⑤ 石槍 <119> ⑥ 石鏃 <119> ⑦ 石匙 <119> ⑧ 刃器 <121>	
⑨ 大形刃器 <121> ⑩ 礫器 <124> ⑪ 打製石斧 <124> ⑫ 磨製石斧 <124>	

	⑬ 磨石類 <120>	⑭ 特殊磨石・スタンプ形石器 <127>	⑮ 石錘 <127>
	⑯ 砥石 <127>	⑰ 玉 <127>	
2	弥生時代の遺物	128	
(1)	土器	128	
3	古墳時代の遺物	130	
(1)	土器	130	
4	奈良・平安時代の遺物	130	
(1)	土器・陶磁器	130	
(2)	鉄製品	132	
5	中世の遺物	133	
(1)	土器・陶磁器	133	
(2)	金属製品	134	
(3)	銭貨	134	
(4)	石製品	134	
第5節	小 結	135	
第 5 章	鶴萩七尋岩陰遺跡	137	
第1節	遺跡の概観と調査の概要	137	
1	遺跡の概観	137	
2	調査の概要	137	
3	調査の経過	139	
第2節	地形と基本層序	141	
1	地 形	141	
2	基本層序	141	
第3節	遺 構	141	
1	岩上部の遺構	141	
2	岩陰部の遺構	142	
(1)	土 坑	142	
	SK01 <142> SK02 <143> SK03 <145>		
(2)	岩陰部の遺物分布状態	146	
3	七尋薬師堂にかかわる遺構	150	
(1)	石 垣	150	
(2)	土 台	150	
第4節	遺 物	150	
1	縄文時代の遺物	150	
(1)	土 器	150	
(2)	石 器	151	
2	弥生時代の遺物	151	
(1)	土 器	151	
(2)	石 器	151	

3	古墳時代の遺物	153
(1)	土器	153
(2)	鉄製品	156
(3)	骨製品	157
(4)	石製品	158
4	古代以降の遺物	158
(1)	土器・陶磁器	158
(2)	鉄製品	159
(3)	銭貨	159
(4)	五輪塔	159
第5節	小 結	159
第 6 章	赤 沢 城 跡	163
第1節	遺跡の概観と調査の概要	163
1	遺跡の概観	163
2	調査の概要	163
3	調査の経過	165
第2節	地形と基本層序	166
第3節	遺 構	167
1	中世の遺構	167
(1)	堀	167
(2)	土 塁	167
2	中世以降の施設	169
(1)	テラス状の平坦部	169
第4節	遺 物	170
1	土器・陶磁器	170
2	石製品	170
第5節	成果と課題	171
1	赤沢城の縄張りと築城主体者について	171
第6節	小 結	173
第 7 章	塩崎城見山砦遺跡	175
第1節	遺跡の概観と調査の概要	175
1	遺跡の概観	175
2	調査の概要	177
(1)	発掘調査に至るまでの経過	177
(2)	発掘調査の概要	177
3	調査の経過	180
第2節	地形と基本層序	181
第3節	遺 構	182

1	中世の施設と遺構	182
(1)	主郭	182
	① 主郭の概要 (182) ② 土塁 (185) ③ 出入口部 (188) ④ 土橋 (190)	
	⑤ 掘立柱建物址 (192) ⑥ 集石・土坑 (195)	
(2)	副郭	195
	① 副郭の概要 (195) ② 土塁 (195) ③ 堀 (196)	
(3)	帯郭	197
	① 帯郭の概要 (197) ② 虎口 (198) ③ ビット群 (198) ④ 溝状遺構 (198)	
	⑤ 土坑 (201)	
(4)	付属郭・段郭	201
	① 付属郭・段郭の概要 (201) ② 土坑 (202)	
(5)	堀	203
	① 堀の概要 (203) ② 堀 (204) ③ ビット列 (204)	
(6)	城郭施設以外の遺構	207
	① 遺構の概要 (207) ② 土坑 (207) ③ ビット群 (208)	
2	その他の遺構	209
(1)	縄文時代の遺構	210
	① 土坑	
(2)	弥生時代の遺構	212
	① 土器棺墓	
(3)	古墳時代の遺構	214
	① 土坑 (214) ② 土器集中 (214)	
第4節	遺物	217
1	旧石器・縄文時代の遺物	217
(1)	遺物出土状態	217
(2)	石器	217
	① 槍先形尖頭器 (217) ② 掻器 (217) ③ 打製石斧 (220) ④ 磨製石斧 (220)	
	⑤ 石鏃 (220) ⑥ 石核 (220) ⑦ 削器 (220) ⑧ 磨石 (220)	
(3)	石器群の位置付け	220
2	弥生・古墳時代の遺物	223
(1)	土器	223
3	古代・中世の遺物	225
(1)	土器・陶磁器	225
(2)	鉄釘	225
(3)	金属製品・銭貨	228
第5節	成果と課題	229
1	塩崎城見山砦の変遷	229
(1)	城郭施設の変遷	229
(2)	各時期の様相	230
(3)	各時期の年代と築城主体者について	232

2	塩崎城見山砦の城郭施設と遺構について	233
(1)	城郭施設の構造	233
(2)	遺構の解釈	237
3	塩崎城見山砦と周辺の城郭について	237
(1)	周辺の城郭	237
(2)	最終段階の塩崎城見山砦と塩崎城の関係	238
4	城郭構築以前の様相	239
第6節	小 結	242
第 8 章	地之目遺跡・一丁田遺跡	255
第1節	遺跡の概観と調査の概要	255
1	遺跡の概観	255
2	調査の概要と経過	257
(1)	概 要	257
(2)	経 過	257
3	基本層序	257
第2節	遺構と遺物	258
1	古 代	258
(1)	竪穴住居址	258
	SB01 (288) SB02 (289) SB03 (287)	
(2)	遺構外出土遺物	260
2	中世以降・その他	261
(1)	溝	261
	SD01・02・03・04・05	
(2)	土 坑	262
	SK01・02・03・04・05・06	
第3節	小 結	264
第 9 章	結 語	265
付 章	自然科学的分析	267
第1節	小坂西遺跡出土の中世火葬骨	269
第2節	小坂西遺跡出土炭化材の樹種	272
第3節	鶴萩七尋岩陰遺跡出土の人骨および動物骨	274
第4節	鶴萩七尋岩陰遺跡出土の骨織	286
第5節	塩崎城見山砦遺跡出土炭化材の樹種	287
第6節	塩崎城見山砦遺跡の土坑の内容物推定および ¹⁴ C年代測定	290

挿 図 目 次

- 序 説**
- 第1図 大・中・小地区割付図
- 遺跡群の環境**
- 第2図 筑北・長野盆地位置図
第3図 筑北・長野盆地切断面図
第4図 長野盆地南西部の地質図
第5図 長野市篠ノ井塩崎付近地質図
第6図 長野盆地南西部の遺跡分布図
- 鳥林遺跡**
- 第7図 調査区全体図
第8図 配点・トレンチ設定図
第9図 遺構分布図
第10図 土層図
第11図 SB01実測図・遺物分布図
第12図 SB03実測図
第13図 SK01・02・05・06・10・11実測図
第14図 SK07・08実測図
第15図 SB05実測図
第16図 SB07実測図
第17図 縄文土器拓本図(1)
第18図 縄文土器拓本図(2)
第19図 縄文土器拓本図(3)
第20図 縄文土器拓本図(4)
第21図 縄文土器拓本図(5)
第22図 縄文土器拓本図(6)
第23図 縄文土器拓本図(7)
第24図 遺構出土石器実測図(1)
第25図 遺構出土石器実測図(2)
第26図 遺構出土石器実測図(3)
第27図 原石・石核法量相關図
第28図 原石・石核実測図
第29図 剥片実測図
第30図 剥片A類法量相關圖
第31図 剥片B類法量相關圖
第32図 石鏃実測図
第33図 石鏃法量相關圖(1)
第34図 石鏃法量相關圖(2)
第35図 石槍・石鏃・石匙・刃器実測図
第36図 刃器1類法量相關圖
第37図 刃器2類法量相關圖
第38図 大形刃器実測図
第39図 大形刃器法量相關圖
第40図 礫器実測図
第41図 石鏃法量相關圖
第42図 打製石斧・磨製石斧実測図
第43図 石鏃実測図
第44図 磨石類実測図(1)
第45図 磨石類実測図(2)
第46図 磨石類(3)・特殊磨石実測図
第47図 磨石類法量相關圖
第48図 特殊磨石・スタンプ形石器法量相關圖
第49図 スタンプ形石器・砥石実測図
第50図 弥生・古墳時代土器実測・拓本図
第51図 古代・中世土器実測図
- 小坂西遺跡**
- 第52図 調査区全体図
第53図 東区遺構分布図
第54図 西区遺構分布図
第55図 土層図
第56図 SB11実測図
第57図 SB12・12B実測図
第58図 SB13実測図
第59図 SB14実測図
第60図 SQ02実測図
第61図 SK02・03・04・05・06・07実測図
第62図 SK60・61実測図
第63図 SB06実測図
第64図 SB10実測図
第65図 SB08実測図
第66図 SB05・カマド・遺物分布実測図
第67図 SB03実測図
第68図 SB07実測図
第69図 SB09実測図

第70図 ST03 (SD01・SK73~150) 実測図
第71図 SB01実測図
第72図 SB02実測図
第73図 SB04実測図
第74図 ST01実測図
第75図 ST02実測図
第76図 SK01・02実測図
第77図 縄文土器拓本図(1)
第78図 縄文土器拓本図(2)
第79図 縄文土器拓本図(3)
第80図 縄文土器拓本図(4)
第81図 縄文土器拓本図(5)
第82図 縄文土器拓本図(6)
第83図 縄文土器拓本図(7)
第84図 縄文土器拓本図(8)
第85図 西区出土石器実測図
第86図 遺構出土石器実測図(1)
第87図 遺構出土石器実測図(2)
第88図 石杖・剥片(1)実測図
第89図 剥片(2)・玉実測図
第90図 石鏃実測図
第91図 石鏃法量相関図
第92図 石槍・石鏃・石匙・刃器(1)実測図
第93図 石匙法量相関図
第94図 刃器(2)実測図
第95図 刃器法量相関図
第96図 大形刃器法量相関図
第97図 大形刃器実測図
第98図 打製石斧・磨製石斧・礮器実測図
第99図 磨石類実測図(1)
第100図 磨石類実測図(2)
第101図 磨石類法量相関図
第102図 特殊磨石・スタンプ形石器法量相関図
第103図 特殊磨石・石鏃・砥石実測図
第104図 弥生・古墳時代土器実測・拓本図
第105図 古代土器実測図
第106図 中世土器・陶磁器実測図(1)
第107図 中世土器・陶磁器実測図(2)
第108図 古代・中世鉄・銅製品実測図
第109図 銭貨拓本図

鶴萩七尋岩陰遺跡

第110図 地形図
第111図 全体図
第112図 岩上部実測図
第113図 岩上部遺物分布図
第114図 SK01実測図
第115図 SK02実測図
第116図 SK03実測図
第117図 岩陰部・石垣下遺物分布図(1)
第118図 岩陰部・石垣下遺物分布図(2)
第119図 岩陰部・石垣下遺物分布図(3)
第120図 岩陰部・石垣下遺物分布図(4)
第121図 岩陰部・土台・石垣実測図
第122図 弥生土器実測図
第123図 古墳時代土器実測図
第124図 縄文・弥生・古代土器拓本図
第125図 縄文・弥生時代石器実測図
第126図 古墳時代・近世鉄製品実測図
第127図 古墳時代骨鏃実測図
第128図 古墳時代石製品実測図
第129図 中・近世土器・陶磁器実測図
第130図 銭貨拓本図
第131図 五輪塔実測図

赤沢城跡

第132図 地形・調査範囲図
第133図 調査区全体図
第134図 A地区 (03トレンチ) 土層図
第135図 C地区遺構・土層図
第136図 SD01・竪土塁実測図
第137図 土器・陶磁器・石製品実測図
第138図 赤沢城縄張り図

塩崎城見山暫遺跡

第139図 地形・調査範囲図
第140図 調査地周辺の小字
第141図 トレンチ設定・表土剥ぎ範囲図
第142図 現況実測図
第143図 地区割図および郭名称
第144図 地質図

- 第145図 01トレンチ土層図
- 第146図 主郭・副郭遺構分布図および地山立面図
- 第147図 主郭土塁断面実測位置および土量計算図
- 第148図 主郭土塁断面図
- 第149図 SD101ビット・土器分布図
- 第150図 土塁頂部礫分布図
- 第151図 主郭概念図
- 第152図 出入口部断面図
- 第153図 SX01実測図
- 第154図 土橋実測図および変遷
- 第155図 主郭掘立柱建物址・付属施設実測図
- 第156図 SK03礫重量分布図
- 第157図 主郭土坑・集石実測図
- 第158図 副郭概念図
- 第159図 副郭土塁実測図
- 第160図 SD02断面図
- 第161図 帯郭概念図
- 第162図 虎口実測図
- 第163図 帯郭ビット群実測図
- 第164図 帯郭溝状遺構実測図
- 第165図 付属郭・段郭概念図
- 第166図 付属郭断面図
- 第167図 SK74・86・87実測図
- 第168図 SK01実測図
- 第169図 堀概念図
- 第170図 堀実測図
- 第171図 城郭施設以外の中世遺構実測図(1)
- 第172図 城郭施設以外の中世遺構実測図(2)
- 第173図 中世以前遺構分布図
- 第174図 縄文時代遺構実測図
- 第175図 弥生時代遺構実測図
- 第176図 古墳時代遺構実測図
- 第177図 石器分布図
- 第178図 石器実測図(1)
- 第179図 石器実測図(2)
- 第180図 石器実測図(3)
- 第181図 弥生・古墳時代・中世土器・陶器実測図
- 第182図 中世鉄釘分布図
- 第183図 中世鉄釘実測図
- 第184図 塩崎城見山砦主郭部城郭施設の変遷
- 第185図 長野盆地南西部の中世城郭分布図
- 第186図 戦国期の塩崎城と塩崎城見山砦
- 第187図 塩崎城見山砦縄張り図
- 第188図 塩崎城縄張り図
- 第189図 全体図
- 第190図 遺構測付図
- 第191図 遺構実測図(1)
- 第192図 遺構実測図(2)
- 第193図 遺構実測図(3)
- 第194図 遺構実測図(4)
- 第195図 遺構実測図(5)
- 第196図 遺構実測図(6)
- 第197図 遺構実測図(7)
- 地之日遺跡・一丁田遺跡**
- 第198図 調査範囲周辺図
- 第199図 発掘区域図
- 第200図 遺構分布図
- 第201図 基本土層図
- 第202図 SB01実測図
- 第203図 SB02実測図
- 第204図 SB03実測図
- 第205図 古代土器実測図
- 第206図 溝断面図
- 第207図 土坑断面図
- 第208図 中世土器・陶磁器実測図
- 付 図1 塩崎城見山砦遺跡主郭平面図
- 付 図2 塩崎城見山砦遺跡主郭土層図

挿 表 目 次

遺跡群の環境

第1表 長野盆地南西部の地質層序区分

- 第2表 更埴・長野地区遺跡地名表(1)
 第3表 更埴・長野地区遺跡地名表(2)
 第4表 更埴・長野地区遺跡地名表(3)
 第5表 更埴・長野地区遺跡地名表(4)

鳥林遺跡

- 第6表 縄文土器出土点数一覧表
 第7表 石器組成表
 第8表 石屑集計表
 第9表 石核属性表
 第10表 剥片A類属性表
 第11表 剥片B類属性表
 第12表 石鏃属性表
 第13表 刃器属性表
 第14表 大形刃器・礫器属性表
 第15表 石錘属性表
 第16表 磨石類属性表
 第17表 特殊磨石・スタンプ形石器属性表

小坂西遺跡

- 第18表 石器組成表
 第19表 石屑集計表
 第20表 石鏃属性表
 第21表 刃器属性表
 第22表 磨石類属性表
 第23表 特殊磨石・スタンプ形石器属性表
 第24表 銭貨一覧表

鶴萩七尋岩陰遺跡

- 第25表 古墳時代骨鏃出土遺跡地名表

塩崎城見山砦遺跡

- 第26表 SK03出土礫計測表
 第27表 土坑集計表
 第28表 鉄釘の出土地点
 第29表 鉄釘の長さ分布
 第30表 城郭施設の変遷過程

写真図版目次

巻首図版1 鳥林遺跡全景、小坂西遺跡出土中世陶磁器

巻首図版2 鶴萩七尋岩陰遺跡全景、同出土弥生土器・鉄鏃・骨鏃・施・玉類・滑石製品

巻首図版3 塩崎城見山砦遺跡全景、同主郭部全景

- | | |
|--|-----------------------------------|
| PL1 長野盆地南西部全景 | PL9 縄文土器(2) |
| PL2 鶴萩七尋岩陰遺跡・赤沢城跡・塩崎城見山砦遺跡航空写真、鳥林遺跡・小坂西遺跡航空写真 | PL10 縄文土器(3) |
| | PL11 縄文土器(4) |
| | PL12 縄文土器(5) |
| | PL13 石器(1) (SB01・02) |
| | PL14 石器(2) (SK01・02・11、原石・石核、剥片A) |
| | PL15 石器(3) (石鏃、石槍・石錐・刃器・石匙) |
| | PL16 石器(4) (大形刃器・打製石斧・磨製石斧、礫器) |
| | PL17 石器(5) (石錘・磨石類) |
| | PL18 石器(6) (磨石類・特殊磨石・スタンプ形石器・礫石) |
| | PL19 古代・中世土器 (SK05・SB07) |
| PL3 遺跡全景(南から、東から)、34・36T区全景(南から) | |
| PL4 空撮全景(南から、東から) | |
| PL5 SB01・遺物出土状態、SB05 | |
| PL6 SB03・礫出土状態、SB07遺物出土状態 | |
| PL7 SK01、SK02、SK05、SK06、SK10、SK11、SK07・08、作業風景、03トレンチ土層断面、01トレンチ土層断面 | |
| PL8 縄文土器(1) (SB01・03、SK01・11) | |

小坂西遺跡

- PL20 遺跡遠景、遺跡全景（南東から、北西から）
- PL21 西区全景（北西から）、東区全景（西から、南西から）
- PL22 東区上段・部分、東区中段・部分、東区下段礫層・部分
- PL23 西区中世遺構群、SB01、SB02、SK01・02
- PL24 SB03、SB04、SK05、SK04・06・07、SB11・12・12B・13
- PL25 SB14、SB06、SK60、SK61、SB10、SK34、SB08、SB09
- PL26 SB05、SB06
- PL27 SB05・カマド、SB07北西隅・北壁・西壁石組、ST03、SK26遺物出土状態、SK73
- PL28 縄文土器(1)
- PL29 縄文土器(2)
- PL30 縄文土器(3)
- PL31 縄文土器(4)
- PL32 縄文土器(5)
- PL33 石器(1) (SB12・12B・13・14)
- PL34 石器(2) (西区、石核・剥片、石鏃)
- PL35 石器(3) (剥片A・玉・石槍・石鏃・石匙・刃器)
- PL36 石器(4) (大形刃器・打製石斧・磨製石斧・礫器)
- PL37 石器(5) (磨石類・特殊磨石・石鏃・砥石)
- PL38 弥生・古墳時代・古代土器
- PL39 中世土器・陶磁器 (貿易陶磁、瀬戸美濃系陶器・常滑焼、土器皿)、金属製品、銭貨

鶴萩七尋岩陰遺跡

- PL40 遺跡遠景、七尋薬師堂、鶴萩七尋石全景
- PL41 空撮全景、同近景（石垣撤去後）
- PL42 空撮全景（垂直、北東から）

- PL43 石垣正面、薬師堂土台、岩上部遺物出土状態(1)・(2)、岩陰部遺物出土状態、SK02遺物出土状態、SK01土器・人骨出土状態
- PL44 SK01土器出土状態(1)・(2)、同人骨出土状態(1)・(2)、SK03遺物出土状態(1)・(2)、-1R3~0R3礫出土状態、石垣撤去後の状態、岩陰部地山、記念撮影
- PL45 弥生土器、古墳時代土器
- PL46 古墳時代・近世遺物（鉄製品、骨鏃、石製品、銭貨）

赤沢城跡

- PL47 空撮全景（北から、西から、東から）
- PL48 調査後全景（北から）、主郭、主郭虎口
- PL49 調査前全景（西から）、C区、B区
- PL50 塹堀、塩崎城見山砦をのぞむ、B区
- PL51 C区、テラス施設設(1)・(2)
- PL52 A区、テラス施設断面、採石場、SD01・断面

塩崎城見山砦遺跡

- PL53 空撮遠景（南東から）、調査前全景（北東から、南東から）
- PL54 主郭（西から、東から）、南側出入口部、東側出入口部、東斜面帯郭全景
- PL55 主郭・帯郭空撮全景（北東から、東から）
- PL56 主郭全景（鳥坂峠から、同部分、垂直空撮）
- PL57 赤沢城をのぞむ、塩崎城をのぞむ、伐採風景、作業風景(1)・(2)
- PL58 主郭空撮全景（南西から、東から）
- PL59 主郭土塁断面（A地点、B地点、D地点、E地点、F地点）、SD101・SK27・44・49、SH02礫出土状態
- PL60 SD101炭化物出土状態・断面、SQ06遺物出土状態、SX01・P₁断面、東側出入口部断面（西から、東から）、南側出入口部断面
- PL61 土橋全景、SK24、ST01・03、ST03P₁

- 断面、SX02・P₁・P₂工具痕
- PL62 ST02、SK02、SK03礎出土状態、SK04
礎出土状態、主郭鉄釘出土状態、副郭鉄
砲玉・銭貨出土状態
- PL63 副郭土塁・堀（北から、南から、全景）、
副郭土塁礎出土状態、SD02（南西から、
北西から）
- PL64 帯郭・虎口（東から）、虎口断面、帯郭
ピット群、SK25遺物出土状態、SB01、
SB02
- PL65 SB03、SB02・03、SB04、SB05・SK71・
72、SB06、SD03、付属郭断面、SK01
- PL66 SK86・87、SK85遺物出土状態、SD01礎
出土状態、SA101・102、堀内郭縁辺部
礎出土状態、SD04、SK09、SK50、SK
48・56・59、SK76遺物出土状態
- PL67 SK79・同焼土・炭化物出土状態、SK75、
SK80、SK02・遺物出土状態、SK14遺
物出土状態、SQ02遺物出土状態、SQ03
遺物出土状態、SQ101遺物出土状態
- PL68 主郭からの眺望（南、東、北）、現地説明
会風景
- PL69 石器(1)
- PL70 石器(2)
- PL71 中世金属製品、中世土器・陶器
- PL72 中世鉄釘
- 地之目・一丁田遺跡**
- PL73 遺跡全景、調査区全景、遺構全景
- PL74 SB01、SB02、SB03、上層

第1章 序 説

第1節 調査の契約

1 発掘調査委託契約

財団法人長野県埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という）の業務運営規定によれば、埋蔵文化財の調査および研究に関して、埋文センターは長野県および国または国の機関が実施する公共開発事業について、事業のため調査を行う必要があるものの委託を受けて、埋蔵文化財の調査を行うほか、埋蔵文化財の保護のための必要な調査および研究を行うこととされている。また、埋文センターが委託を受けて行う調査は、あらかじめ長野県教育委員会が行政上の調整をすませたうえ、埋文センターにおいて受託して行うことが適当であると認めたものについて行われる。

高速自動車道用地内にある埋蔵文化財の発掘調査については、「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」に準じて実施されている。それによれば、日本道路公団（以下「公団」という）は事業施工前に県教育委員会（以下「県教委」という）の意見を聴取のうえ、文化庁との間で協議し、その結果、記録保存と決定し発掘調査が必要となった場合、公団は県教委に委託して調査を実施することが決定されている。長野県の場合、県独自の調査体制や機関が設置されていないので、公団と県教委との契約後、あらかじめ埋文センターに県教委が再委託する方式がとられている。

中央自動車道長野線（以下「長野線」という）は、昭和57年3月の起工式から岡谷市で本格的な工事が開始された。そこで県教委も同年4月から長野線の事業に対応すべく埋文センターを発足させた。この結果、公団→県教委→埋文センターという委託契約の図式ができあがり、以降の調査が実施されることとなった。この際取り交わされた契約書および計画書の書式は、「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書1—岡谷市内—」に掲載してあるので省略し、以下に公団長野工事事務所管内の更埴市・長野市関係分の遺跡のうち、本書で報告する年度別の遺跡と調査契約面積および調査実施面積を掲げておく。

(年 度)	(遺 跡)	(調査契約面積)	(調査実施面積)
昭和63年度	長野市 赤沢城跡	5,950㎡	5,950㎡
平成元年度	更埴市 烏林遺跡	4,000㎡	4,000㎡
	同 小坂西遺跡	4,000㎡	4,000㎡
	長野市 鶴萩七尋岩陰遺跡	250㎡	250㎡
平成3年度	更埴市 地之日・一丁田遺跡	2,000㎡	2,000㎡
	長野市 塩崎城見山砦遺跡	14,000㎡	14,000㎡

2 契約業務の経過

前項に、年度別の調査実施面積を示したので、以下に年度を追って調査体制と遺跡別の調査期間および担当者名を掲げる。発掘調査経過の詳細は、個々の遺跡の報告に譲ることとする。この間、発掘調査から整理作業、報告書刊行に至るすべての業務は、長野調査事務所が管轄した。

(1) 昭和63年度

- 調査体制 事務局長兼総務部長（兼長野調査事務所庶務部長）半田順計
同 調査部長（同 調査部長）笹沢 浩
同 技術参与 佐藤今雄
長野調査事務所長 塚原隆明

○遺跡と調査期間・担当者

- ・赤沢城跡 9月12日～10月14日
調査研究員 ◎寺内隆夫、越川長治、竹内 稔

調査地点は山城の西側斜面および谷部に当たり、堀の一部を検出できたほか、後世の擾乱を被り、遺構は確認できなかった。上記の調査期間以外は坂北村・長野市塩崎地区の遺跡の調査に従事し、平成元年1月以降、遺物洗浄、図面・写真点検、所見整理などの基礎的な整理を行った。

(2) 平成元年度

- 調査体制 事務局長兼総務部長（兼長野調査事務所庶務部長）半田順計
同 調査部長（同 調査部長）笹沢 浩
同 技術参与 佐藤今雄
長野調査事務所長 塚原隆明

- 同 庶務部長補佐 松本忠巳
同 調査課長 白田武正
同 総 括 宮下健司

○遺跡と調査期間・担当者

- ・鳥林遺跡 4月10日～6月9日
調査研究員 ◎土屋 積、稲場 隆、河西克造、斎藤 武
・小坂西遺跡 9月14日～11月4日
調査研究員 ◎綿田弘実、百瀬長秀（指導）
・鶴萩七尋岩陰遺跡 9月11日～11月2日
調査研究員 ◎下島章裕、飯島明孝

3遺跡とも山麓斜面立地の中・小規模遺跡と思われたが、継続期間が長く、意外に豊富な遺物が出土する結果となった。上記の期間以外は坂北村、長野市松代・若穂地区の遺跡調査に従事した。

鳥林遺跡では6月4日に現地説明会を行い、88名の見学者が訪れた。調査終了後、平成2年2月18日～25日の間、長野市立博物館を会場に「信濃路を掘る」をテーマとして速報展を開催し、1,500名を超える見学者が訪れた。平成2年1月以降、図面・写真点検、所見整理など基礎的な整理を行ったが、遺物整理については一部の洗浄以外ほとんどできなかった。



鳥林遺跡現地説明会（平成元年6月）

(3) 平成3年度

○調査・	事務局長	塚原隆明
整理体制	同 総務部長 (兼長野調査事務所庶務部長)	塚田次夫
	同 調査部長 (同 調査部長)	小林秀夫
	同 総務部長補佐 (同 庶務部長補佐)	山崎今朝寛
	長野調査事務所長	峯村忠司
	同 調査課長	百瀬長秀
	同 整理課長代理	原 明芳
	同 調査研究員	綿田弘実、町田勝則、河西克造、白沢勝彦

○遺跡と調査期間・担当者

- ・地之日・一丁田遺跡 4月4日～5月31日
調査研究員 ◎大竹憲昭、伊藤友久
- ・塩崎城見山砦遺跡 6月12日～10月30日
調査研究員 ◎河西克造、大久保邦彦、松岡昭彦、松岡忠一郎、宮脇正実、柳澤 亮

更埴市・長野市内の遺跡調査を終了した6月以降、坂北村向六工・十二遺跡、麻績村野口・古司・子尾入遺跡の5遺跡と共に、鳥林・小坂西・赤沢城跡・鶴萩七尋岩陰・塩崎城見山砦・地之日・一丁田の7遺跡の、報告書刊行に向けた整理に着手した。本年度は遺構カードの完備と遺構実測図のトレース用版下作成、遺跡・遺構写真の選定・レイアウト、遺物の洗浄・注記、土器の接合・石膏復原と分類・計量・実測・採拓、金属器の仮保存処理を行った。

(4) 平成4年度

○整理体制	事務局長	峯村忠司
	同 参 事	樋口昇一
	同 総務部長	神林幹生
	同 調査部長	小林秀夫
	同 総務部長補佐 (兼長野調査事務所庶務課長)	山崎今朝寛
	同 総務係長 (同 庶務係長)	羽生田博行
	長野調査事務所長	岡田正彦
	同 整理課長	原 明芳
	同 調査研究員	綿田弘実、西嶋 力、町田勝則

本年度は遺跡全体図類・遺構実測図のトレース、石器・金属製品などの実測、遺物実測図の版組み・トレース、遺物写真撮影、原稿執筆と編集などを行った。

発掘調査報告書の印刷・製本および校正にかかわる業務は平成5年度に行った。



土器接合作業 (平成3年8月)

3 調査に参加した補助員

本書で報告する、昭和63年度から平成3年度にわたる更埤市・長野市内所在の6遺跡の発掘調査および平成3・4年度の整理作業には、作業従事員として参加された多くの方々のご協力があった。ここにお名前のみ記して、感謝の意にかえさせていただく。このほかに、平成元年度の鶴萩七尋岩陰遺跡の発掘調査には、鶴前遺跡の作業従事員の方々のご協力を得た（敬称略・順不同）。

○**発掘調査** 富沢三男、堀内ます子、親松恒人、永井権次、北島かず子、酒井しず子、小林久子、原みつ江、飯島なみ子、近藤多嘉登、親松静子、加賀野井幸平、祿津萬男、北村茂茂、海野八重子、中沢智恵子、中村節子、松浦幸子、水出しの子、町田美枝子、宮崎米雄、小松 壮、石原運平、西沢拾太郎、青木貞代、荒井よしの、五十嵐美津子、池内なつ子、石川 勝、岩崎鷹雄、内山すま子、岡部つる子、唐沢富江、北沢由雄、小林すい、神戸恒秋、高橋てる子、高野直代、竹内今朝人、竹内貞雄、竹内高子、塚口敬太郎、塚口隆司、塚口延子、西沢幸子、町田栄司、丸山吉治郎、柳沢悦子、柳沢郁子、小玉きみ江、熊道まさえ、小山とも、堀内睦夫、小松よね、山岸つや子、唐沢基徳、北川原いせ子、竹内倭子、青木哲夫、石井喜久子、岩淵花子、岩淵 守、太田喜代人、太田好子、倉下静子、田口教男、西沢淑子、丸茂松江、宮下きみ、町井市子、宮下幸夫、宮下愛子、滝沢広幸、滝沢シゲ子、佐藤たけ子、中島清子、戸谷志ず可、高春保子、峰村甲子美、前川ふみ、桐山みとし、石坂 計、小根山貞子、北島康子、小林とも子、中沢 幸、新村雅仁、西村甲子郎、長谷川教子、宮沢幸子、吉原たけ子、吉原俊子、吉原十美枝、吉原さつき、北沢節子、田中克人、中條武良、渡辺年治、岸田久男、青木けさ江、池田 勇、池田すわ、市川しず江、石坂けさみ、内山光男、太田正俊、太田けさい、太田里子、大矢信雄、笠井重義、唐木寅雄、小林修一、小林幸雄、高野幸子、立川貴美子、高野 明、中村美智子、日詰貞子、藤島とみ子、松峯芳子、村田章雄、柳沢松江、山崎敬子、山崎清江

○**整理作業** 小山丈夫、名取さつき、山岸隆男、小林由香、橋本信子、岡島光枝、高沼千恵子、小林喜美子、青木明美、近藤朋子、立岩洋子、半田純子、西村はるみ、古平道子、宮下孝一、西田君子、西村美登子、北島康子、小出紀彦、原田美峰子



塩崎城見山新遺跡発掘調査団



平成3年度北村・更埤・長野市遺跡整理班

第2節 調査の方法

1 発掘調査の方法

当地文センターの受託事業は広範囲を対象とし、継続的な調査となることが予想された。このためセンター発当初より、調査に当たっては一定の方針に従い、共通した方法をとる必要があるとの認識が強く、昭和57～59年に実施した岡谷地区調査の経験に基づき「遺跡調査の方針と手順」を作成し、以後これに沿った発掘調査が行われてきている。しかし、さまざまな遺跡の内容、調査状況に照らして必ずしも十分なものとはいえず、実際の調査を通して検討が重ねられている。ここに報告する7遺跡も、基本的にこの「方針と手順」に沿って調査を行った。本項では、調査報告をまとめるに当たって必要な事項についてのみ、概述する。

(1) 遺跡名称と記号

遺跡名は長野県教育委員会作成の遺跡台帳に記載されている名称とした。また、記録の便宜を図るために、大文字アルファベット3文字で表記される遺跡記号を与えた。3文字の1番目は長野県内を9地区に分けた地区記号で、A：北信地区、B：長野地区、C：上小地区、D：佐久地区、E：松本地区、F：大北地区、G：諏訪地区、H：上伊那地区、I：飯伊地区、J：木曾地区、(K：予備)と区分している。2・3番目は遺跡名をローマ字表記した場合の2文字で、遺跡記号が重複しないように調整している。

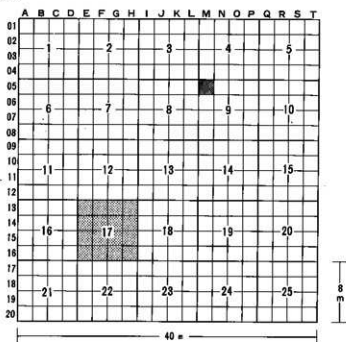
ここに報告する更埴市・長野市は長野地区に属し、地区記号Bが冠される。鳥林遺跡はTÖRIBAYA SHIでBTO、小坂西遺跡はKÖSAKANISHIでBKO、赤沢城跡はÅKASAWA-JOUSEKIでBAK、鶴萩七尋岩陰遺跡はTÜRÜHAGINANAHIROIWAKAGEでBTH、塩崎城見山砦遺跡はŠHIOŽAKIJOU-MIYA MATORIDEでBSZ、地之目遺跡はJİNOMEでBJN、一丁田遺跡はĪTTYOUDAでBITを、それぞれ遺跡記号とした。この記号は当該遺跡に関する図面、写真、遺物およびその整理箱等のすべての資料に注記され、今後の情報処理にも用いられるものである。

(2) 調査区設定の原則

調査区(グリッド)の設定は、国土座標のメッシュに従うことを原則とした。測量基準点は国土地理院の平面直角座標系の原点(長野県は第Ⅲ系、X=0,0000、Y=0,0000)を基点に200の倍数値を選んで調査範囲内の1点に設け、測量基準線はX軸・Y軸とした。

グリッドはこの基準点をもとに設定し、大々地区・大地区・中地区・小地区の4段階に区分した(第1図)。

まず調査範囲が最小限にかかる200×200mの区画を設定し、これを大々地区とした。大々地区の呼称は、原則として北西から南東に向かって、I・II・III・・・のローマ数字とした。



(例) この大地区がG区の場合 は中地区G17 は小地区G M05

第1図 大・中・小地区劃分図

大々地区を40×40mの25区画に分割し、大地区とした。大地区の呼称は、北西から南東へA・B・C・
・・・Yの大文字アルファベットとした。

大地区を8×8mの25区画に分割し、中地区とした。中地区の呼称は、北西から南東へ1・2・3・
・・・25のアラビア数字とした。

大地区を2×2mに分割し、これを小地区とした。小地区は、大地区の北西隅を起点とし、X軸上に西
から東へA・B・C・・・・Tのアルファベット、Y軸上の北から南へ01・02・03・・・・20の数字を付して
400区画し、両者を併せて「A02」のように小地区名とした。

これらの呼称を組み合わせて、例えば塩崎城見山岩遺跡の大々地区「II区」のうち、大地区「G区」の中
の中地区「17区」は、「BSZII G17」と表記される。また、大地区「G区」を小地区に分割した「M05」
の場合は、「BSZII GM05」と表記される（第1図）。ただし、小坂西遺跡の東区と鶴萩七尋岩除遺跡は、
必ずしもこの原則に従っていないため、それぞれの調査概要の項目の中で調査区設定の方法について断つ
てある。

現場における調査区およびベンチマークの設定は、公園設置の照原点または座標値の明らかな工事用杭
を利用した。調査用の基準杭は中地区（8×8m）を基本とし、業者委託によって設定したが、一部は調
査研究員が設定した。

(3) 遺跡調査の手順

更埴市・長野市ではもともと考古学的な調査は数多く行われてきたが、古墳を除けば山地の遺跡の発掘
調査は意外に少なく、調査対象となった遺跡も既知の情報は乏しかった。また鶴萩七尋岩除遺跡と塩崎城
見山岩遺跡は新発見の遺跡である。このため範囲や内容は不詳であり、いずれの遺跡も試掘調査あるいは
それに準ずる方法で着手することとなった。

試掘は用地買収の条件や地目、上物のあり方に応じて、人力によるテストピット・トレンチ、重機による
トレンチ掘削の方法をとり、遺構・遺物の分布状態、土層の堆積状態の把握を試みた。

面的調査は試掘の成果をもとに、重機（油圧式シャベル）で表土を除去した後、前項のとおりグリッド
を設定し、人力で遺構検出を行った。この際に出土した遺物は小グリッドあるいは中グリッド単位で取り
上げた。遺構面が2面以上の部分は重機・人力の作業を繰り返すか、遺物包含層の場合は2mグリッド単
位で掘り下げながら遺構検出につとめた。

なお、発掘現場から室内の作業に至るまで、埋文センターの「発掘調査に関する安全基準」を遵守し、
危険防止につとめた。

(4) 遺構記号

遺構名称は記録・注記等の便宜を図るため記号を用い、遺構番号は時代等にかかわらず種類ごと、検出
順に付した。遺構記号は基本的に検出時に決定するため、主として平面的な形態や分布の特徴を指標とし、
必ずしも個々の遺構の性格を示すものではない。混乱を避けるため原則として遺構記号の変更は行わず、
最終的な遺構名称の決定は整理作業の段階で行われる。本書で用いた遺構記号には、次の種類がある。

- ・ SB：2m以上の大きさ方形、円形、楕円形の掘り込み。竪穴住居址、竪穴状遺構。
- ・ SK：単独もしくは他の掘り込みと関係が認められない、SBより小さな掘り込み。土坑（溝）、陥し
穴、貯蔵穴、井戸等。
- ・ SA：SBより小さな落ち込みや石が、列として配置されるもの。柵、築地。
- ・ ST：SBより小さな落ち込みや石が一定間隔で方形、円形に配置されるもの。これ以外の落ち込み

と関係が認められるものがある。掘立柱建物址、礎石を利用した建物址。

- ・ SF：単独で存在し、火を焚いたあとが面的に広がるもの。火床、炉址。
 - ・ SH：石が面的に集中するもの。集石、焼石炉。
 - ・ SQ：遺物が面的に集中するもの。ごみ捨て場、祭祀址等。
 - ・ SX：以上の遺構記号およびSD（溝等）、SL（水田・畑址）、SC（道路）、SM（古墳・墳墓）、SE（井戸）の諸記号に該当しない、不明遺構。
- SB・ST内の掘り込み（柱穴等）にはPを付した。

(5) 遺構の調査方法

検出された遺構の調査については、竪穴住居址を例にとる。まず、おおよその平面形を確認した後、主軸や付属施設を考慮しながら先行トレンチをあけて埋土や床・壁を確認する。そして土層観察のために、埋土を十字形のベルトに残して掘り下げる。その際、埋土内から出土する遺物の取り上げの便宜を考えて、北東を1区、南東を2区、南西を3区、北西を4区と呼んだ。ベルトは断面記録後除去し、遺物は先の区割りと土層単位に取り上げたが、完形およびそれに準ずるものや床面密着遺物は原位置を記録したものである。この後床面精査を行って炉・カマド・柱穴などを検出する。これらの施設も必要に応じて先行トレンチをあけるか半割して記録しながら掘り下げた。その他の遺構もこれに準じて調査し、住居址より規模の小さい土坑・小ピットなどは半割して埋土や柱痕を確認して掘り下げた。なお、土層観察の際、土色の記録は原則として『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）による。

(6) 測 量

遺構の測量は簡易造り方測量により、調査研究員およびその指導のもとに作業従事員が行った。この場合中地区の8m杭を基準とし、必要に応じてこの間を2mに区切ってメッシュを設定した。住居址や一部の大形土坑、集石などは個別遺構図として実測し、その他の遺構は中地区単位に区切った割付図として実測した。地形測量は鳥林・小坂西遺跡を除いて業者委託の測量による。

遺構測量の縮尺は、個別遺構図と割付図が1：20、住居址の付属施設（カマドなど）や遺物分布図、集石などは必要に応じて1：10とした。

(7) 写 真

遺跡の景観や遺構などの撮影には、マミヤRB6×7とニコンFM2を併用し、ともにモノクロプリント（ネオパン）とカラーリバーサル（フジクローム）で撮影した。35mmの場合はすべての遺構についてモノクロプリントとカラーリバーサルで撮影した。6×7のモノクロプリントもほぼこれに準じ、カラーリバーサルは特に必要と思われる場合に限った。撮影はすべて調査研究員が行い、撮影後の現像とペタ焼きは業者委託とした。航空写真は小坂西遺跡以外の各遺跡で撮影した。

2 整理作業の方法

(1) 発掘記録の整理

発掘調査終了後の冬の整理作業では、現場で作製された図面類と写真の整理を最優先した。図面類は、記載事項（遺跡名、遺構名、地区名、実測担当者、実測年月日、標高、縮尺など）の点検を行い、住居址など主な遺構については平面図、断面図、部分図などを相互に照合・補筆し、第2原図を作成した。あわせて

調査経過、遺構の構造所見等を「遺構所見整理カード」へ記載し、第2原因等とともに「遺構カード」へ貼り込んだ。この作業は遺構の調査担当者が行った。写真の整理は、モノクロプリントについては撮影順にアルバムへ、カラーリバーサルは当面は撮影順にスライドファイルへ収納し、記録簿と照合して必要事項の注記をすませた。時間的な制約から、発掘と同年度内の整理はここまでを最低目標とし、発掘現場での遺物洗浄・注記作業を除いて遺物の整理、遺構・分布図との照合などは報告書作成に向けた整理にゆだねることとした。

報告書作成にかかわる作業は整理課が担当し、その内容は第1節2の末尾に記した。版組み・原稿執筆等を経て、遺跡全体および遺構実測図・遺物実測図・遺構カード・写真は永年保存資料として台帳に登録し、将来的な収納に備えた。

(2) 遺物の整理

出土遺物への注記は、遺跡記号、遺構記号・番号、または地区名、取り上げ番号を記し、石鏃など小形石器、金属製品には観察・保存処理の支障とならないよう、直接注記しなかった。土器、石器は分類・選別の後、接合・石膏復原を経て実測・採拓を行った。石器の実測には業者委託によるスリット写真を用い（㈱シン技術コンサル）、その他は手測によった。また金属製品は実測・撮影に耐えるよう、埋文センター保存処理室で応急保存処理を施した（担当調査研究員：白沢勝彦）。遺物の写真撮影は埋文センター写真室が担当し、カメラはマミヤRB6×7、フィルムはTMAX100を用い、現像・焼き付けまで行った（担当調査研究員：西嶋 力）。これらの作業を経た遺物は台帳登録し、テンパコへ仮収納した。理化学的な分析・鑑定は整理期間中に委託し、本書の「付章」に報告した。

(3) 報告書の記述と編集

遺跡の掲載順序は、原則として高速道路線の南から北とした。個々の遺跡の報告は遺構・遺物に節を分け、それぞれ時代別・種類別に項目を分けた。遺構の記述については調査担当者の所見にもとづいて整理担当者が行い、住居址は位置、検出、埋土、規模・形態（主軸方位・床面積）、床・壁、柱穴、炉・カマド、諸施設、遺物分布の諸項目の順序で記述し、他の遺構もこれに準じた。床面積はプランメーターで計測し、3回の平均値をとった。遺物分布図については、掲載された遺構の深さが浅い場合には、垂直分布図を省略してもっぱら文章記述によった。なお、時期・性格の不明な土坑やピット（遺構記号SKを付した）は全体図に分布を示すのみとし、記述は省略した。

遺物については例言にある分担執筆者が整理から担当し、各項目で必要に応じて考察を行った。遺物分類や記述の観点については、それぞれの項目を参照されたい。なお、報告に当たっては例言に記した指導者と分担執筆者のほかに、長野調査事務所内外の多くの調査研究員から、整理担当者に指導・援助があった。特に鳥林遺跡の石器分類・計測作業には町田勝則、鳥林・小坂西遺跡の縄文前期土器分類には賢田明、小坂西遺跡の縄文晩期土器分類には百瀬長秀、鳥林・小坂西・鶴萩七尋岩陰遺跡の弥生・古墳時代土器分類には白居直之、鶴萩七尋薬師堂の記述には伊藤友久、塩崎城見山岩陰遺跡の弥生～中世土器・陶器については青木一男・市川隆之の指導・援助を得た。また、鳥林・小坂西・鶴萩七尋岩陰遺跡出土の石器の石質鑑定は関全寿・市川桂子・山崎まゆみに依頼した。

第2章 遺跡群の立地と環境

第1節 長野盆地南西部の地理的環境

1 位置と地形

長野盆地南西部は、本州中央部やや北寄りの千曲川流域に当たり、JR篠ノ井線が冠着トンネルを出て大きく迂回しながら、盆地に向かって下る傾斜地および盆地南端部に位置する。坂城広谷から長野盆地に連続した谷底平野が広がり、千曲川が北西流から大きく北東流に屈曲する付近の、長野盆地南端部およびその西部に広がる筑摩山地の地域である。千曲川左岸の更埴市八幡・稲荷山地域を中心として、大岡村・戸倉町・信更町・長野市篠ノ井など市町村の一部が含まれる。

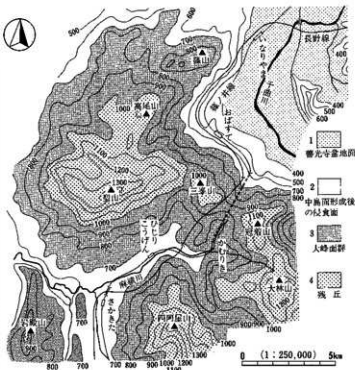
盆地部は谷底平野で、千曲川氾濫原がかなりの面積を占めており、氾濫原の微地形は、自然堤防と旧河道の砂堆や中州の微高地と、旧河道や後背湿地などの微低地とから構成されている。かつて、北信の商都として栄えた稲荷山や、千曲川曲流部の水神を祭った鳥居前町の八幡および北国西街道に沿う集落は、この自然堤防上に立地しており、自然堤防は果樹や野菜栽培が盛んである。一方、自然堤防の背後は、石川・四野宮・稲荷山など比較的規模の大きい低湿地となっており、古くから水田化が進んで先進文化圏の一部となり、周辺には更埴市森將軍塚古墳に對峙する川柳將軍塚古墳をはじめ、幾つかの古墳が見られる。

山麓には、後背部から雄沢川・更級川・佐野川・壘川など幾つかの小河川が北東流して、規模の異なる扇状地群や地すべり性の崖錐地形を形成している。この地域一帯は排水など自然条件が良く、有数の果樹栽培地帯となっている。また、佐野川扇状地は、扇尖から扇端にかけて佐野川の水を用いて水田が開かれている。この水は鉱毒水で酸性のため、水田に沈殿池を造るなど鉱毒対策をなされていたが、水量も乏しく、今では千曲川からポンプアップして、酸性 (PH2.5) の緩和と増水を図り耕作が進められている。

山地は、姨捨土石流などの傾斜地から、一気に標高を500mほど高め、急峻さを示す。冠着山—三峰山



第2図 筑北・長野盆地位置図



第3図 筑北・長野盆地南西部切妻面図

一類山の東西山列から北方へ次第に標高を低め、高尾山(1,166.4m)、篠山(907.7m)の山塊が中心で、北西に傾く。そのため北西斜面は緩く、南東または東斜面は急傾斜をなしており、北西側へ流れる小河川が数多く発達している。したがって、聖川や佐野川支流などの河川が流れる北東方向は、地質構造に強く支配されていることを示唆している。また、狭捨地域を中心とした更埦市八幡～戸倉町羽尾にかけては、三峰山山体の地すべり性崩壊がもたらした狭捨土石流の典型的な押し出し地形が形成され、狭捨土石流の開析が進んだ谷では、標高700mの奥まで溜池による水田化が行われている。狭捨付近の押し出し地形は10°～15°の傾斜で標高550mの狭捨駅付近の平地地までおよんでおり、階段状に並んだ大小さまざまな棚田が開かれて、「田毎の月」で有名である。

聖山の北斜面、狭ヶ番場峠付近、その東に接する三峰山の北東斜面、冠着山の北東斜面などには、尾根に近い部分にやや平坦な地形面が見られる。高尾山山腹や篠山にも緩斜面が発達している。これらの緩斜面はいずれも標高600～1,000mの間にあり、大峰面群(小林・平林1955、仁科1972)に対比されるもので、中期更新世の平坦面である。千曲高原一帯の開発地は、この平坦面に属しており、ゴルフ場別荘地などに開発されている。

2 地 質

長野盆地は、北東—南西方向に雁行する盆地西縁および東縁の断層群によって、中期更新世に盆地部が落ち込んだ構造盆地である。西縁断層群は、西上がり東落ちの性質(加藤・赤羽1986)をもち、これよ

って階段状に盆地側が沈み、その傾向は現在も保たれて、過去に善光寺地震など内陸直下型地震として多く発生している。沈んだ盆地部には千曲川などの河川が多量の土砂を運び込み、現在は千曲川氾濫原がかなりの面積を占め、規模の大きい自然堤防や後背湿地が発達している。試錐資料によると、沖積層は86m、第四系の堆積物は400m前後(花岡・赤羽1988)と推定されている。

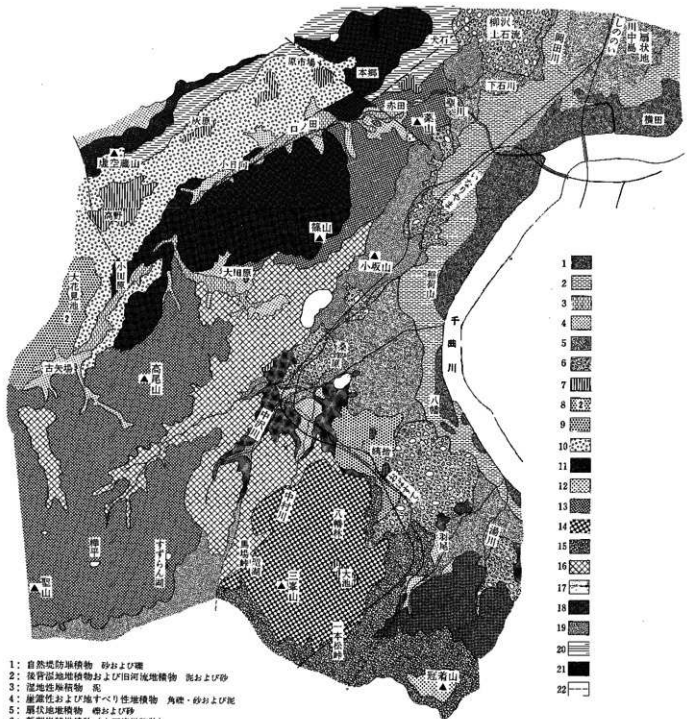
この地域の基盤岩類は、北部フォッサ・マグナに分布する。西部の山地は、後期中新統の裾花凝灰岩・鮮新統の桑原火山岩・冠着凝灰角礫岩・聖山火山岩・三峰山火山岩・鮮新統末の篠山火山岩が分布している。また山腹には、中期更新統の古期土石流堆積物や完新統の新期土石流堆積物、扇状地堆積物・崖崖など押し出し堆積物が見られる。

A 新第三系

① 裾花凝灰岩層：川柳將軍塚付近、四野宮～長谷～小坂山～荏沢川にわたる地域、佐野川不動滝より下流域、八幡部・峰・狭捨、戸倉町羽尾など、長野道通過地の大部分の地域に断続して分布する。岩質は流紋岩～石英安山岩質の凝灰岩を主体として、同質の火山礫凝灰岩・凝灰角礫岩・火

第1表 長野盆地西部の地質層序区分

地質時代		地 層 名	岩 相		
新 第三系	第 四 紀	完新世	現河床堆積物 後背湿地・自然堤防堆積物 新期扇状地堆積物 扇状地 段丘地堆積物	礫・砂 礫・砂・シルト・シルト質泥炭 安山岩凝灰角礫岩・砂・粘土 礫・砂・泥 礫・砂・泥	
		中 新 世	後期	古期砂礫七石流堆積物	安山岩角礫・砂・粘土
			前期		
		第 三 紀	新 鮮 世	篠山火山岩	カンラン石輝石安山岩溶岩・凝灰角礫岩
	聖山火山岩			紫蘇輝石普通輝石安山岩溶岩および火山角礫岩	
	白 垩 世		冠着凝灰角礫岩層	凝灰角礫岩・凝灰岩	
			桑原火山岩	安山岩溶岩および火山角礫岩 熱水実質作用を受ける	
	中 生 代	小川層	裾花凝灰岩層	流紋岩溶岩・凝灰岩・凝灰角礫岩	
		青木層			



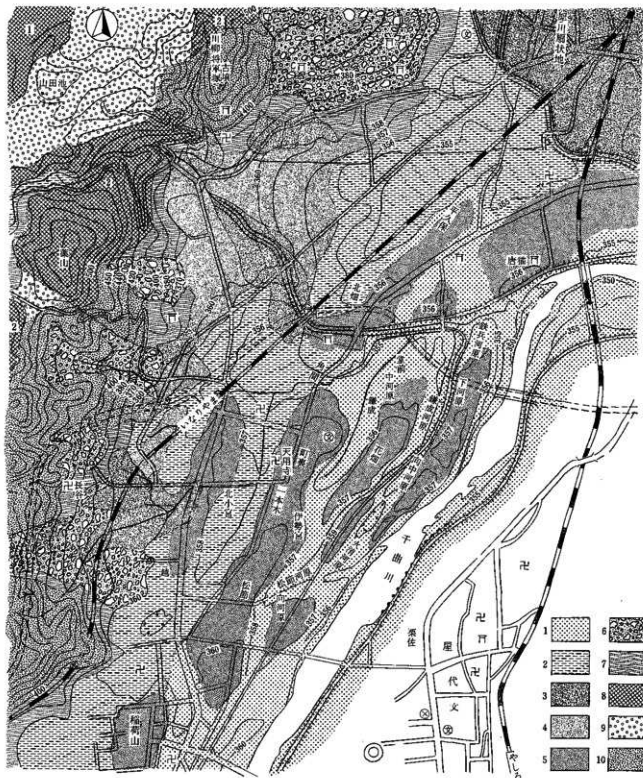
- 1: 自然地形堆積物 砂および礫
- 2: 後背盆地堆積物および田河泥堆積物 泥および砂
- 3: 窪地性堆積物 泥
- 4: 崖線性および地すべり性堆積物 角礫・砂および泥
- 5: 扇状地堆積物 礫および砂
- 6: 前期扇状地堆積物 (土石流堆積物)
- 7: 高野層(更新世後期) 礫および泥
- 8: 大岡土石流堆積物(更新世中期)
 - 安山岩角礫・火山灰および泥
- 9: 古湖湖相土石流堆積物()
 - 安山岩角礫・砂・泥
- 10: 灰原層(更新世前期)
 - 礫岩・砂岩・泥岩および凝灰岩
- 11: 礫山火山岩(更新世～更新世前期)
 - 安山岩角礫および凝灰角礫岩

- 12: 冠岩火山岩(更新世) 輝石安山岩
- 13: 埴山安山岩() 安山岩角礫・火山岩角礫岩
- 14: 三峰山火山岩()
- 15: 近衛層() 凝灰角礫岩・下部礫岩を含む
- 16: 桑原火山岩上部(中新世後期)
 - 安山岩角礫および火山岩角礫岩
- 17: 丹岩

- 18: 桑原火山岩下部(中新世後期) 安山岩角礫および火山岩角礫岩
- 19: 堀花凝灰岩=小川層(中新世後期)
 - 凝灰岩角礫岩・凝灰岩および凝灰角礫岩
- 20: 赤田層(更新世) 礫岩・砂岩およびシルト岩
- 21: 久米路火砕岩(層岩) 安山岩火山岩角礫および凝灰角礫岩
- 22: 断層

0 1000 2000m

第4図 長野盆地南西部の地質図



- 1: 砂(河川性堆積物—洪水時のもの) 2: 泥およびシルト(建築遺地堆積物) 3: 砂および礫(新期扇状地堆積物) 4: 泥・砂および礫(古期扇状地堆積物)
 5: 砂および礫(自然埋没堆積物) 6: 角礫および砂・泥(上石炭地層物および地すべり性堆積物) 7: 角礫・砂および泥(造産性堆積物)
 8の1: 安山岩溶岩および凝灰角礫岩(蘇山火山岩) 8の2: 安山岩溶岩および火山角礫岩(聖山安山岩) 9: 礫岩・砂岩およびシルト岩(群新世末赤川層)
 10: 凝灰岩溶岩・凝灰岩および凝灰角礫岩(中新世後期小川層—紀花凝灰岩)

第5図 長野市篠ノ井塩崎付近地質図

山角礫岩からなり、一部に薄い溶岩や砂岩・泥岩・礫岩を挟む。凝灰岩は、灰色～灰白色の軽石凝灰岩やガラス質凝灰岩からなり、隣接する筑北地域の高桑凝灰岩の全岩K-Ar年代は、610万±40万年の年代値〔加藤1983〕が報告されている。なお、鶴前遺跡を流れる小渓流には、本層からの流紋質岩の転石に、金雲母が相当量含まれているのが見いだされている。

② 桑原火山岩：田原坂を中心に篠山や高尾山の南東山麓、聖高原北斜面の佐野川・中沢川・中村川下流域などに分布している。緑黑色緻密なガラス質輝石安山岩の溶岩からなり、全体的に熱水変質を受け、白色化・粘土化・黄鉄鉱染化が進み、暗灰色の岩石に変化している。八輪の梵天山鉱床は、ろう石鉱床が桑原火山岩中に胚胎したもので、下部は粘土化作用が、上部は珪化作用が顕著である。

なお、小坂西遺跡付近では、局所的な崩積土に埋もれて鮮紅色をした赤玉（碧玉・鉄石英）の小塊が産出している。崩壊層のため岩層中での産状を知ることはできない。赤玉は、ガラス質輝石安山岩溶岩が流出した後、下から上がってきた鉄を含んだ熱水溶液が隙間を通過して溶岩中に染み込み、そこから二酸化珪素を溶かし込んで、成分を変えて移動した。赤玉になる部分は、二酸化珪素と酸化鉄が多くなった。二酸化珪素や酸化鉄に富んだ熱水溶液が割れ目に入り、それが沈澱して赤玉となったものと思われる。赤色チャートは、赤石と呼ばれているが、堆積岩なので赤玉と区別される。

③ 冠着凝灰角礫岩：冠着山西方の鳥居平～一本松峠～戸倉町御籠にかけて分布する。凝灰角礫岩～凝灰岩からなり、火山角礫岩や軽石凝灰岩を挟む。これは特異な凝灰角礫岩で、異質の安山岩角礫を石英安山岩質の凝灰岩～軽石凝灰岩が膠結している。礫径は5～30cmが一般で、最大1mにも達する。

④ 聖山火山岩：聖山を中心に北方へ延びる尾根、高尾山山塊、篠山の南東斜面から鳥坂峠・栗山にかけて分布し、下位の桑原火山岩や裾花凝灰岩層を不整合に覆う。高尾山では層厚約300m、他の地域では100～200m、一般に溶岩を主体にして凝灰角礫岩を挟む。下部は黒色緻密で輝石や斜長石を含む玄武岩質安山岩、上部は「鉄平石型」の板状節理が発達した複輝石安山岩溶岩が目立つ。聖山山塊の最下部付近に分布する溶岩は、K-Ar年代で540万±30万年〔加藤1983〕の年代値を示しており、鮮新世前期の活動を示唆している。

⑤ 三峰山火山岩：三峰山周辺に分布し、黒色の輝石安山岩溶岩および同質の凝灰角礫岩からなり、火山礫凝灰岩や凝灰岩・中粒砂岩・シルト岩を挟む。聖湖の南東では、シルト岩の水底土石流様堆積物と安山岩角礫を含む砂岩層があり、一部で湖沼性の堆積をしたことを示している。

⑥ 篠山火山岩：篠山の北西斜面を中心に高尾山の北西斜面に分布し、下位の聖山火山岩を不整合に覆う。輝石安山岩の溶岩と同質の凝灰角礫岩・火山角礫岩からなり、岩質は変化に富む黒色粒緻密な玄武岩質安山岩の分布が中心である。千曲川斜面には転石もほとんどおよんでいない。



篠山山系（概捨から）

B 第四系

① 古期焼捨土石流堆積物：これは従来、焼捨泥流（八木1943）、押し出し堆積物（斉藤1982）などと分類されていた。三峰火山岩や桑原火山岩の不ぞろいの角礫を多く含み、基質が泥からなる土石流堆積物である。この堆積物の分布域は、地すべりが多発し各所で二次移動している。八幡郡地籍から南に延びた尾根と焼捨の間の斜面に分布し、下方は佐野川扇状地に接しており、南東方は新期焼捨土石流堆積物に覆われている。斉藤〔1982〕によると、地下35.5mでの堆積物から採取した木片の¹⁴C年代は、13,550±460年前の年代値を示すという。

② 新期焼捨土石流堆積物：この堆積物は、千曲高原を開析した谷頭を頂点として崩壊し、焼捨駅付近の南東～東斜面を千曲川氾濫原と接する辻・上町・代・三島にかけて扇形に分布する。不ぞろいの安山岩歪角礫を多量に含む砂泥土を基質とした土石流である。従来、八木〔1943〕によって三峰火山の爆発に伴う泥流とされていたが、飯島・斉藤〔1963〕によって、三峰山体の地すべり性崩壊によって生じた土石流と改められ、さらに斉藤〔1982〕は、千曲高原面をつくる旧層積土（約10万年前）の再移動による形成を指摘している。地すべり頻発地で、天明年間には焼捨大池の環境が崩壊するなど大災害をもたらしている。採取された木片の¹⁴C年代は、3,250±260年前（斉藤1982）の年代値を示している。

その他佐野付近、小坂西付近、長谷寺付近、四野宮付近などに分布する比較的規模の大きい地すべり堆積物や土石流堆積物および崖錐などは、いずれも新期焼捨土石流堆積物と同時期のものと推定され、一部を除いて完新世の形成と考える。

③ 扇状地堆積物：この地域には、更新世～完新世にかけて形成された小規模な扇状地が、小河川に沿って山麓に張り付いた状態で見られる。なかでも形が美しく、規模の大きいのは佐野川扇状地である。いずれも、背後の山地から供給された粗粒の堆積物からなり、後背地の岩石を反映している。佐野川扇状地では、後背地が次第に隆起したので、佐野川・中沢川・中村川の古い扇状地を侵食して、その前方に一段低く、三川合流地付近を扇頂とする佐野川扇状地が形成されている。一般に扇状地は、扇頂部ほど粗粒、扇端部は細粒な堆積物となり、扇端部は後背湿地に連続移化して、一部で境界の明確さを欠いている。

④ 盆地堆積物：これは、千曲川左岸の氾濫原に分布する自然堤防堆積物と後背湿地堆積物に分ける。

自然堤防は、洪水によって氾濫原の微地形が形成され、周りよりやや高い微高地や旧河川の中州・砂堆である。一般的に砂および砂質シルトが主体を占め、場所によっては多少の差異が見られる。八幡～稲荷山～塩崎にかけて規模の大きい自然堤防が分布しており、この中にはたびたびの洪水に流れを変えた河道跡が見られる。水利に恵まれなため、一部を除いて畑や果樹園に利用され、集落は水害を受けにくい条件を生かして、古くから自然堤防上に発達している。

また、後背湿地は微低地で、稲荷山～塩崎を結ぶ自然堤防の西側に発達している。特に稲荷山駅付近から石川・二ツ柳におよぶ後背湿地は規模が大きい。何層かの粘土・シルト・砂など細粒堆積物から構成されており、複雑に後背地系や千曲川系を反映している。時には沼沢性の湿地となり、腐植物を多量に含み、泥炭質または泥炭層となっている。また、山麓近くでは、周辺の扇状地堆積物と指状の堆積も見られる。水利に恵まれているので水田として利用されており、弥生時代の古くから開発が進んでいた。

3 気 候

春の遅い信濃も4月の声を聞くと共に春めいてきて、JR焼捨駅からの眺望は、千曲川を挟んで山から里へと春にさきかけて、アンズ・モモの花が咲き乱れ、花の雲のように自然のパノラマをくりひろげている。

理科年表によると、長野でのウメの平均開花期は3月23日、サクラの染井吉野は4月13日といわれ、関東では2月上旬に始まって3月下旬の約2か月間におよぶのに対し、たった20日ほどの間にウメ・アンズ・モモ・サクラ・ナシ・リンゴなどが一気に咲き誇る。「花の命は短くて……」とか、花を楽しんでいるのはわずかな期間であるのが特徴である。この地域は日本海へは60kmほどと近い位置にあるが、地形の複雑さが大きく影響して、年降水量・夏季降水量とも少なく、年較差・日較差など気温較差の大きい内陸性気候の特色を持つ。

1月の平均降水量は長野気象台の資料によると、篠ノ井40mm、長野59mm、中野74mm、飯山232mmの数値を示す。更埴では41mmで北信濃の豪雪とはほど遠く、日本海岸型気候の影響は、積雪を減ずるが雪のちらつく長野付近までと思われ、比較的陽光に恵まれた地域といえる。しかし、聖山山塊・篠山など山地は季節風の吹き上げの影響によって様子は一変して雲に覆われる日が多い。

また、年平均降水量は1,000mmを割り、上田盆地と共に本州一の寡雨地帯を形成し、降水の季節変化型は太平洋岸型に含まれる。特にこの地域の年平均降水量は、959mmと寡少で、春から夏にかけて少ない。塩崎の長谷寺では、毎年8月9日に33個の提灯を釣った舟型の大竿を奉納する「雨乞い祭り」が、元禄年間から行われているほどである。

一方気温は、最暖月と最寒月の較差も東京に比べ、平均気温で4℃前後大きく、最高最低平均気温では5℃以上の開きがあり、内陸性気候の特性を遺憾なく発揮している。1月の最低平均気温は1926～1960年間の月別累年平均値（長野気象台）によると、地形差も影響するが、更埴-5.3℃、篠ノ井-5.9℃、長野-5.9℃を測る。一般に冬季は12月から2月の3月間をいうが、この地域の低地では11月中旬に始まって3月末までおよび、周辺山地は高度差に応じて11月から4月半ばまでの約半年である。また、千曲川の霧の発生は有名であるが、その通り道や霧の通り道は、地形の出入りに関係して複雑である。

8月の最高平均気温は前記資料によると、更埴30.8℃、篠ノ井30.5℃、長野30.8℃を測り、東京の30.7℃とほとんど変わりなく、夜間の最低平均気温になると20℃前後で、東京の23.2℃に対し3℃強の開きをもち、湿度の低いことと相まって体感的気温を緩和させている。この夏の日中の高温と夜間の涼しさ、そして標高の低い低地である環境が稲作に関係して、生育期間を短縮させる。したがって、この地域一帯の田植えは、松本盆地に約1カ月遅れの6月中旬から下旬が最盛期となり、田植え期の遅い地域となっている。

参考文献

- | | |
|--------------|---|
| 赤羽貞幸 | 1980「長野盆地西縁部における後期新生代の構造運動」〔鳥弧変動〕2) |
| 飯島南海夫・斉藤 豊 | 1986「更級埴科地方誌自然誌」更級埴科地方誌刊行会 |
| 活断層研究会編 | 1980「日本の活断層—分布図と資料—」 |
| 加藤碩一・赤羽貞幸 | 1986「長野地域の地質」〔地域地質研究報告「野図輯」〕 |
| 斉藤 豊 | 1970「長野盆地形成史の再検討に関する問題」〔第四紀〕15) |
| 斉藤 豊 | 1982「長野県の焼粘土石炭堆積物の成因とその形成期」〔地すべり〕vol.19-2) |
| 下平真樹 | 1989「麻績村の地形と地質」〔麻績村誌〕 |
| 千曲川工事事務所編 | 1980「千曲川・犀川三十年のあゆみ—千曲川・犀川の自然—」 |
| 豊野層圏研究グループ | 1977「長野盆地西縁部の第四系—長野盆地の形成史に関する研究—」〔地質学論集〕16 |
| 長野県埋蔵文化財センター | 1988「長野県埋蔵文化財センター年報」5 |
| 長野県埋蔵文化財センター | 1989「長野県埋蔵文化財センター年報」6 |
| 長野県埋蔵文化財センター | 1991「長野県埋蔵文化財センター年報」8 |
| 藤井紀之 | 1967「長野県梵天山ろう石鉱床の産とその形成過程に関する考察」〔鉱山地質〕vol.17) |
| 八木貞助 | 1943「更埴地質誌」更埴教育会 |

第2節 歴史的環境と周辺の遺跡

今回調査の対象となった6遺跡が分布する長野盆地南西部は、旧更級・埴科郡に属し、ほぼその中央部に当たる。調査遺跡周辺の遺跡分布を示す第6図には、長野市西南部・更級市西部・戸倉町西部と麻績村・信州新町の一部の、2市2町1村がかかるといえる。前節のとおり、地形的には盆地部の千曲川氾濫原と、扇状地・崖錐地形などからなる山麓、標高600m前後以上の山地に分かれ、特に山麓から盆地部は弥生時代以降には県内でも有数の、水田址を含む遺跡密集地帯となるほか、山地の前期古墳にも著名なものがある。以下に時代をおいて遺跡群の動向を概観したいが、盆地部に比べて今回報告するような山地・山麓の遺跡は調査の手がつかっていない。特に本報告の大半を占める縄文時代遺跡については調査例が少ないため、多少とも詳述を心がける。弥生時代以降については、石川糸里遺跡周辺の遺跡群について総合的に記述した文献がいくつかあるため（長野市教育委員会1989・1991・1992、宮下健司1985）、詳細はそれらに譲ることにする。なお、遺跡数は地名表（1）～（4）に記載された遺跡を対象とする。

旧石器時代 これまで6遺跡が知られるが発掘されたことはない。中村遺跡（第6図23、以下図中の番号のみ）と三島遺跡群（43）は尖頭器と剥片、下辺遺跡（250）はナイフ形石器、佐野山遺跡（254）はナイフ形石器・彫刻器・石刃、上和沢遺跡（236）は神子柴型尖頭器と石刃、猪ノ平遺跡（238）は神子柴型石刃が採集されている。また当センターが調査した鶴前遺跡（5）ではナイフ形石器1点、塩崎城見山磐遺跡（6）では古墳時代以降の擾乱層から神子柴型石刃・搔器・槍先形尖頭器や剥片が多少まとまって出土した。これらはいずれも旧石器時代後半期から終末期に位置付くものである。

縄文時代 草創期の遺跡は知られていない。早期には19遺跡を数えるが、12遺跡で押型土器が確認され、大部分は楕円押型文である。高地の湿地や小沼のある台地、斜面の小テラスなどに立地し、鳥林（1）・小坂西遺跡（2）で住居址・土坑を検出したほかに遺構は不明で、池尻遺跡（153）が前期以降まで断続的なほかはほとんど継続性がないらしい。鳥林・古屋敷B遺跡（65）は格子目押型文がまとまっており、注目される。小坂西・佐野山A（65）・篠山遺跡（157）では条痕文系土器が出土している。石器は特殊磨石と不定形の刃器が特徴的である。

前期には16遺跡前後が知られ、池尻・猪ノ平遺跡など数型式にわたって継続する遺跡が増える。神ノ木・有尾式と諸磯b式が目立ち、幅田遺跡（42）では中道・有尾・諸磯b式の各時期、小坂西・鶴前遺跡では神ノ木～有尾式期の住居址各1軒が検出された。盆地部の石川糸里遺跡（7）では初頭段階の住居址3軒・土坑27基を検出し、篠ノ井遺跡群（8）でも関山式が出土した。塩崎城見山磐遺跡では山腹で陥し穴5基を検出し、前期と考えられている。

中期は20遺跡を上回る。初頭段階では樺葉遺跡（31）でピットを検出したほか、池尻・猪ノ平・宮下遺跡（319）などが知られ、中葉段階も少数である。後葉の加曾利EⅢ式前後は全県下で遺跡が急増する。扇状地に展開する幅田遺跡群では敷石住居主体の住居址20軒以上と列石・集石などを検出した。屋代遺跡群では地表下4mで50軒近い住居址と掘立柱建物址などからなる集落を調査し、



鳥林遺跡の立地

古環境復原や柄鏡形敷石住居址の出現期、在地的な土器様相などについて多くの成果が得られたほか、地下6m以上で初頭段階の集落跡が確認された。一方、西山のいわゆる犀川横谷地帯には、中程度の集落・小規模の前遺基地的な遺跡・石斧などしか出土しない生産址的な散布地の三者が見られ、信更町の大峯遺跡(283)は加曾利EⅡ・Ⅲ式土器少量と打製石斧多数、家の入(270)・釜土(281)・カジカ沢(285)・東沢(287)・鍋割(293)・塩山(300)・梨の木(301)・山田屋敷(304)などは打製石斧のみを出土する遺跡である。

後期は10遺跡程度が知られる。幅田遺跡群では堀之内・加曾利B式期の住居址6軒、後半段階の配石墓7基、集石などを検出した。湧水に接した大清水遺跡(271)は後期後葉を主体に称名寺式から佐野Ⅱ式までを出土し、獣骨を含む灰層が検出された。大池南・屋代清水遺跡(228)もほぼ同時期の土器群を出土した。芝平・山の神(70)・池尻・いちご遺跡(159)などは堀之内式の出土が知られる。

晩期は11遺跡を数えるが、前半期は少数である。幅田遺跡群では大洞BC式期の住居址1軒・土器集積址1カ所、氷式期を含む配石墓8基を検出した。更埴条里遺跡(230)では掘立柱状のビット群・焼土址・土坑がある程度広い範囲に分布する。後半期にはわずかに遺跡が増加し、屋代清水遺跡で掘立柱建物址2棟・土坑10基、篠ノ井遺跡群では長野道地点で土坑墓1基・土坑8基・溝4条、体育館地点で土器棺墓1基が調査されている。小坂西・鶴前・五輪堂(219)・猪ノ平・塩崎遺跡群(255)でも氷式および後続する土器の出土が知られる。

弥生時代 千曲川自然堤防上の遺跡群を上流から列挙すると、左岸では八幡遺跡群(108以下)・塩崎遺跡群(255)・篠ノ井遺跡群(8)・横田遺跡群、右岸では栗佐遺跡群(213以下)・屋代遺跡群(231以下)の集落遺跡が連なる。これらの後背湿地には、右岸の更埴条里遺跡(230)と左岸の石川条里遺跡(7)の生産遺跡が展開する。篠ノ井・塩崎遺跡群では、伊勢宮式土器出土地点に近い私道松節小田井神社線で弥生中期前半の住居址18軒・木棺墓31基を検出した。聖川堤防地点にも同時期の住居址が1軒ある。中期後半の住居址は塩崎小学校地点・聖川堤防地点で検出され、後期には集落が拡大し、広範に遺構が検出される。塩崎小学校地点では中期後半の方形周溝墓、聖川堤防地点では箱清水氷式期の方形・円形・前方後方形の周溝墓・壺棺墓を検出した。松節遺跡では広鋒銅利器と石製模造品が出土した。水田遺構は栗林Ⅱ式期と思われるものが部分的に確認され、箱清水氷式期にはかなり拡大している。氾濫原を取り巻いて山麓に帯状に広がる遺跡群には、長谷鶴前遺跡群(241)・石川方田遺跡群(316)がある。更埴市域には八幡遺跡群・桑原遺跡群(145以下)・横沢遺跡群(76~91など)がある。これらの遺跡群は自然堤防上の集落ほど密集せず、主たる時代は古墳時代以降といわれる。

古墳時代 塩崎地区周辺の前・中期古墳には前方後円墳の川柳將軍塚(323)・中郷古墳(256-1)、前方後方墳の姫塚(324)・田野口大塚古墳(290-1)、円墳の飯綱社(321)・四野宮將軍山(280)・八幡宮(6)・越將軍塚(239)・赤田大塚古墳(305-1)がある。これらを盟主として柳沢古墳群(321)・石川古墳群(317・320・327など)・四野宮古墳群(312~314など)・越古墳群(240・247・253など)・大塚古墳群(290-2~5)などの後期古墳が形成される。更埴



中期古墳と周辺遺跡遠景

市域では内容が明らかな古墳は少ないが、山腹に立地する30m級の円墳、宝殿ノ塚(151)・検見塚(166)・遠見塚古墳(167)などは5世紀を下らないであろう。

集落遺跡は意外にまとまった調査例が少なく、前期は聖川堤防地点・大規模自転車道地点、後期は塩崎小学校地点が知られ、市道松節小田井神社線地点では各時期が検出されている。篠ノ井遺跡群の



石川条里・篠ノ井・塩崎遺跡群周辺(東上空から)

長野道地点では多量の土器を伴う土坑群を囲む大溝区画遺構が検出され、4世紀後半から5世紀前半の豪族居館址の可能性も指摘されている。また柗下遺跡(254)では同時期の祭祀を伴う居住域の遺構を検出した。松の山窟跡(289)はTK47型式期の須恵器窯として注目される。水田遺構は前期初頭ころに建築材を含む木材を多用した大畦畔や溝が現れ、ひとつの画期が見出せる。

古代 当地方は古代には更級郡に属し、その境域は犀川以南の川中島から南は現東筑摩郡の本城村におよんだ。集落は山地へも拡大し、調査例が多い。奈良時代では、塩崎小学校地点で掘立柱建物址が検出されたほかに、「専司」の刻書がある須恵器杯が出土し、官衙址の性格を考えられている。更級郡衙比定説もある更城市八幡郡に近い社官司遺跡(110)では掘立柱建物址9棟、三彩陶器・木製品が出土し、北稻付遺跡(122)の帯金具・木簡、青木遺跡(117)の瓦とともに注目される。平安時代では横沢遺跡群上ノ田(78)・平田遺跡(79)で火葬墓を検出した。寺院址には奈良時代後半の瓦を出土し、定額安養寺に比定される上石川廃寺(318)があり、矢先山(143)・長谷寺経塚(251)は平安時代の経塚である。また窯跡も多く、信田丘陵では長者池(275)・大上(276)・日向(282)・鍋割(293)・鹿ノ入窯跡(299)が窯跡群を形成するほか、上日向窯跡群(162)・湯の入窯跡(325)などがある。石川条里遺跡の条里区画水田の成立時期は奈良時代後半までさかのぼれそうで、仁和4年(888)の大洪水に比定される厚い砂層に覆われた水田址が、後背湿地のほぼ全面に埋没している。

当地方の中世の政治的動向と城館跡の分布については第7章第5節でふれているので、参照されたい。

引用・参考文献(五十音順)

- 磯崎正彦 1959 「長野県篠ノ井市伊勢宮遺跡の古式弥生式土器」〔信濃〕Ⅲ-11-6)
- 岩崎長思 1934 「鶴森古墳」〔集史報告〕16
- 岡川勇夫 1971 「先作山経塚の発見」〔長野〕36
- 岡川勇夫 1980 「千曲川沿岸における珠洲地の分布(その二)」〔長野〕94
- 岡田正彦 1969 「長野県更城市荒井遺跡採集の一括資料」〔信濃〕Ⅲ-21-11)
- 岡田正彦 1970 「長野県更城市屋代大家遺跡調査報告」〔信濃〕Ⅲ-22-4)
- 岡田正彦 1971 「長野県更城市屋代馬口遺跡調査報告」〔信濃〕Ⅲ-23-5)

- 8 岡田正彦・竹内三千六 1972 「更埴市大字八幡青木遺跡発掘調査報告」(『長野県考古学会誌』14)
- 9 金子尚昌・米山一政他 1965 「長野県埴科郡戸倉町市田遺跡調査報告(2)」(『長野県考古学会誌』2)
- 10 瀧原宏行・高崎光他 1979 「善光寺平部における古墳の実測調査」(『信濃』III-31-12)
- 11 北武藏古代文化研究会他 1984 「第5回三島シンポジウム 古墳出現期の地域性」
- 12 柳原健 1966 「長野県更埴市瑞雲山遺跡の峰一本松古墳調査」(『信濃』III-18-9)
- 13 柳原健・松尾昌彦 1984 「長野県飯綱古墳の出土遺物」(『信濃』III-36-4)
- 14 更埴市教育委員会 1973 「長野県森野塚古墳」
- 15 更埴市教育委員会 1977 「長野県更埴市大字八幡青木遺跡発掘調査報告」
- 16 更埴市教育委員会 1978 「厩代馬口K-長野県更埴市厩代遺跡群馬口K遺跡緊急発掘調査報告書-1」
- 17 更埴市教育委員会 1981 「更埴市東谷遺跡群五輪堂遺跡-長野県厩代南高等学校地点試掘調査報告書-1」
- 18 更埴市教育委員会 1982 「更埴市東谷遺跡群五輪堂遺跡II-長野県厩代南高等学校地点発掘調査報告書-1」
- 19 更埴市教育委員会 1983 「長野県更埴市横沢遺跡群I-横沢地区は場整備に伴う発掘調査報告書-1」
- 20 更埴市教育委員会 1984 「長野県更埴市横沢遺跡群II-横沢地区は場整備に伴う発掘調査報告書-1」
- 21 更埴市教育委員会 1984 「長野県更埴市八幡遺跡群北窪付遺跡-西部内2塔整備に伴う発掘調査報告書-1」
- 22 更埴市教育委員会 1985 「長野県更埴市南沖遺跡II-長野県厩代南高等学校校舎に伴う発掘調査報告書-1」
- 23 更埴市教育委員会 1985 「長野県更埴市横沢遺跡群III-横沢地区は場整備に伴う発掘調査報告書-1」
- 24 更埴市教育委員会 1986 「長野県更埴市社宮司遺跡-西部沖原宮は場整備に伴う発掘調査報告書-1」
- 25 更埴市教育委員会 1986 「厩代遺跡群馬口遺跡-長野県厩代南高等学校校舎に伴う発掘調査報告書-1」
- 26 更埴市教育委員会 1987 「更埴市東谷遺跡群五輪堂遺跡IV-長野県厩代南高等学校特別教員棟建設に伴う発掘調査報告書-1」
- 27 更埴市教育委員会 1987 「厩代遺跡群馬口遺跡II-長野県厩代高等学校校体育館等建設に伴う発掘調査報告書-1」
- 28 更埴市教育委員会 1988 「長野県更埴市厩代遺跡群-更埴桑里水田址詳細分布調査報告書」
- 29 更埴市教育委員会 1988 「厩代遺跡群馬口遺跡II-長野県厩代高等学校プール等建設に伴う発掘調査報告書-1」
- 30 更埴市教育委員会 1989 「長野県更埴市厩代遺跡群馬口遺跡IV-長野県厩代高等学校合宿所建設に伴う発掘調査報告書-1」
- 31 更埴市教育委員会 1989 「長野県更埴市小高遺跡-都市計画道路建設前線工事に伴う発掘調査報告書-1」
- 32 更埴市教育委員会 1990 「更埴市東谷遺跡群五輪堂遺跡III-厩代南高等学校校舎に伴う発掘調査報告書-1」
- 33 更埴市桑里村誌編纂委員会 1967 「桑里村誌」
- 34 神津 猛 1932 「更級郡河村村の契陶址」(『信濃考古学会誌』3-1)
- 35 小林 重 義 1969 「更埴市一重山発見の須恵器」(『長野県考古学会誌』7)
- 36 坂詰 秀一 1964 「長野県八原及び若宮古窯跡の調査-千曲川流域古窯跡の調査(II)」(『日考協要旨』30)
- 37 笹沢 浩 1968 「善光寺における栗林式土器産出の土跡」(『信濃』III-20-4)
- 38 笹沢 浩 1971 「長野市藤ノ井掘内古墳出土の壁圖」(『長野』38)
- 39 笹沢浩・原田勝美 1974 「長野県下出土の須恵器(上)」(『信濃』III-26-9)
- 40 笹沢浩・原田勝美 1974 「長野県下出土の須恵器(下)」(『信濃』III-26-11)
- 41 笹沢浩・森嶋聡 1966 「長野県埴科郡戸倉町市田遺跡調査報告」(『信濃』III-18-6)
- 42 笹沢浩・森嶋聡他 1967 「長野県埴科郡戸倉町市田遺跡調査報告(3)」(『信濃』III-19-3)
- 43 佐藤 啓之 1987 「更埴市・大池南遺跡出土土器について」(『長野県考古学会誌』53)
- 44 更級郡役所 1914 「更級郡誌」
- 45 更級城科地方誌刊行会 1978 「更級城科地方誌 第二巻 原始古代中世編」
- 46 塩崎村史刊行会 1971 「塩崎村史」
- 47 塩崎文化財保存会編纂委員会 1988 「塩崎の石造文化財」
- 48 信濃史料刊行会 1956 「信濃史料 第1巻(上・下)」
- 49 信濃考古学研究会 1956 「信濃考古学叢書(上・下)」
- 50 下平 秀夫 1970 「長野県更埴市桑里地区瓦遺跡調査概報(2)」(『信濃』III-22-4)
- 51 信州新町教育委員会 1971 「信州新町文化財調査報告書No.3 信州新町城蔵文化財分考調査報告書」
- 52 信州新町教育委員会 1971 「宮古遺跡遺物図録」
- 53 岡 孝一 1966 「長野県埴科郡戸倉町藤原遺跡の調査」(『信濃』III-18-4)
- 54 岡 通 啓 1970 「長野県埴科郡戸倉町吉野出土の土師器」(『長野県考古学会誌』8)
- 55 戸倉町教育委員会 1990 「円光寺遺跡-長野県埴科郡戸倉町更級地区泉宮は場整備事業に伴う縄土遺跡群円光寺遺跡緊急発掘調査報告書-1」
- 56 戸倉町教育委員会 1990 「三島遺跡-長野県埴科郡戸倉町三島遺跡群三島平遺跡緊急発掘調査報告書-1」
- 57 長野県教育委員会 1968 「地下に発見された更埴市桑里遺構の研究」
- 58 長野県教育委員会 1974 「昭和48年度 中央自動車道長野緑地建設予定地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告書」
- 59 長野県教育委員会 1975 「昭和49年度 中央自動車道長野緑地建設予定地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告書 昭和49年度」
- 60 長野県教育委員会 1976 「北陸新幹線建設予定地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告書 昭和50年度」
- 61 長野県教育委員会 1983 「長野県の中世城郭跡 分布調査報告書」

- 62 長野県教育委員会 1990 『リゾート等開発地域内の埋蔵文化財分布調査報告書』
- 63 長野県史刊行会 1981 『長野県史 考古資料編 全1巻(1) 遺跡地名表』
- 64 長野県史刊行会 1982 『長野県史 考古資料編 全1巻(2) 主要遺跡(北・東信)』
- 65 前長野県埋蔵文化財センター 1989 『長野県埋蔵文化財センター 年報5』
- 66 前長野県埋蔵文化財センター 1990 『長野県埋蔵文化財センター 年報6』
- 67 前長野県埋蔵文化財センター 1991 『長野県埋蔵文化財センター 年報7』
- 68 前長野県埋蔵文化財センター 1992 『長野県埋蔵文化財センター 年報8』
- 69 長野市教育委員会 1978 『塩崎遺跡群—塩崎小学校地点遺跡の第1次調査報告—』
- 70 長野市教育委員会 1979 『塩崎遺跡群—塩崎小学校地点遺跡の第2次調査報告—』
- 71 長野市教育委員会 1980 『田ノ屋遺跡(1~3米)・徳間遺跡・塩崎遺跡群(第3次)』
- 72 長野市教育委員会 1980 『篠ノ井遺跡群—大規模自転車道地点遺跡の調査報告—』
- 73 長野市教育委員会 1981 『熊川水遺跡・大峯遺跡・大清水遺跡』
- 74 長野市教育委員会 1983 『浅川扇状地遺跡群遊田遺跡・川田象鼻の遺構・石川象鼻の遺構』
- 75 長野市教育委員会 1984 『石川象鼻の遺構・上野沢遺跡』
- 76 長野市教育委員会 1985 『石川象鼻の遺構(3)(付・上野沢遺跡)』
- 77 長野市教育委員会 1985 『長野市二ツ樽浸没水田址の調査』(『信濃』Ⅲ-37-9)
- 78 長野市教育委員会 1986 『塩崎遺跡群IV—市道松筋一小田井神社地点遺跡—』
- 79 長野市教育委員会 1987 『塩崎遺跡群V 殿尾敷遺跡—角間地区市道改良事業地点—』
- 80 長野市教育委員会 1989 『長野市塩崎南遺跡・塩崎城跡—中部電力北信坂輪線鉄塔地点に伴う発掘調査報告—』
- 81 長野市教育委員会 1989 『篠ノ井遺跡群II—市道山崎寄橋橋脚地点—』
- 82 長野市教育委員会 1989 『石川象鼻遺跡(4)』
- 83 長野市教育委員会 1990 『篠ノ井遺跡群III—中部電力北信坂輪線鉄塔地点・長野市宮崎町体育館地点—』
- 84 長野市教育委員会 1991 『塩崎遺跡群(6)・塩崎遺跡群市道篠ノ井南253号線地点・石川象鼻遺跡(4)・石川象鼻遺跡消防隊分署地点—』
- 85 長野市埋蔵文化財センター 1990 『長野市埋蔵文化財センター所報』1
- 86 中山省三郎 他 1929 『信濃若宮銅剣』(『考古学研究』3-1)
- 87 西野元 1973 『長野県塩崎中学校跡の土器』(『土器出土器集成本編』3)
- 88 埴科郡役所 1910 『埴科郡志』
- 89 林和男 1985 『久作山砦出土の経筒』(『長野』123)
- 90 原明 1978 『更紗市純松抄ノ木古墳発掘調査報告』(『長野県考古学会誌』31)
- 91 文化財保護委員会 1967 『全国遺跡地図 長野県』
- 92 松尾昌彦 1987 『長野県における古墳編年基礎資料(一)—中期古墳資料—』(『信濃』Ⅲ-39-3)
- 93 丸山敏一郎 1974 『善光寺平南縁の自然障壁上の遺跡について』(『信濃』Ⅲ-26-5)
- 94 丸山敏一郎 1976 『善光寺平南縁の古墳立地について』(『信濃』Ⅲ-28-4)
- 95 宮下健司 1979 『長野県川掛町塚塚古墳をめぐると古文書』(『信濃』Ⅲ-31-9)
- 96 宮本邦基 1934 『更紗郡篠ノ井町小金山須恵郡熊鷹の調査』(『信濃』1-3-5)
- 97 宮本邦基 1934 『長谷寺発掘金銅の経筒に就て』(『信濃』1-3-6)
- 98 森嶋 聡 1966 『銅剣および石製経筒』(『篠ノ井市指定文化財調査報告書』)
- 99 森嶋 聡 1967 『長野県長野市信田町上和沢出土の尖頭器』(『信濃』Ⅲ-19-4)
- 100 森嶋 聡 1976 『熊鷹状地形と尖頭器』(『長野県考古学会誌』26)
- 101 森嶋 聡 1981 『信濃経塚資料にみる二・三の課題—某科郡川崎町塚塚経塚資料を中心に—』(『信濃』Ⅲ-33-12)
- 102 森嶋 聡・米山一政 1964 『長野県更紗市赤原地区発掘調査報告(1)』(『上代文化』34)
- 103 森本六彌 1929 『川柳村将軍塚の研究』
- 104 矢口忠良 1968 『長野県更紗市赤原地区太田里山古墳址出土の須恵器について』(『信濃』Ⅲ-20-7)
- 105 矢口忠良 1979 『戸倉羽尾尾層山出土の須恵器小壺』(『長野県考古学会誌』33)
- 106 屋代高校地歴班 1964 『埴科郡山田遺跡第一次調査—特に立石を伴う配石址について』(『長野県考古学会誌』1)
- 107 矢中隆・山田昌久 1987 『長野市山田野大塚古墳の調査』(『信濃』Ⅲ-39-4)
- 108 (長野)協本第一責任編集 1980 『日本城跡大系 第8巻 長野・山梨』
- 109 米山一政 1966 『地の上の古墳』(『篠ノ井市指定文化財調査報告書』)
- 110 麻績村誌編纂会 1989 『麻績村誌 上巻(自然誌・歴史編)』
- 111 長野県史刊行会 1988 『長野県史 考古資料編 全1巻(4) 遺構遺物』
- 112 更紗市教育委員会 1992 『屋代清水遺跡』
- 113 長野市教育委員会 1992 『石川象鼻遺跡(6)』
- 114 宮下健司 1985 『長野市石川象鼻周辺における原始・古代の空間構造』(『信濃』Ⅲ-37-9)

第3表 更埴・長野地区遺跡地名表(2)

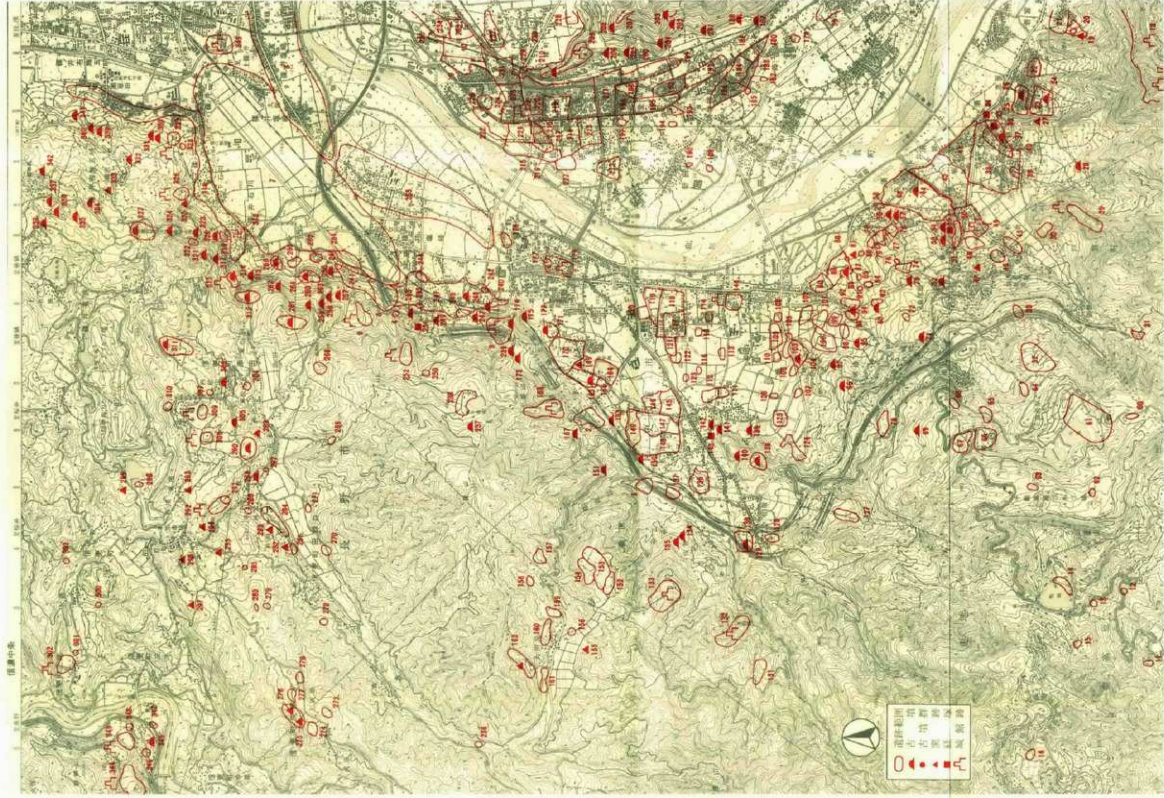
番 号	遺 跡 名	田 石	縄 文 層			弥 生 層			中 世	近 世	文 献
			早 稲	須 賀	不 明	不 明	不 明	不 明			
106	藤原遺跡										
107	柳下*										
	[八幡遺跡群]										
108	大仏寺遺跡										
109	成沢*										
110	杜宮寺*									24	
111	北谷のり石*										
112	田塚*										
113	中益*										
114	北原*										
115	御旗堂*										
116	藤行*										
117	青木*									8, 15	
118	横まくり*										
119	六反田*									45	
120	忠川*									45	
121	外くね*										
122	北穂作*									21	
123	真光寺*									45	
124	赤坂*										
125	石原A*										
126	石原B*										
127	上平沢*										
128	中原南*										
129	中旗吉廣										
130	堂林遺跡										
131	横手開拓地*									45	
132	佐野城跡									33, 46, 108	
133	鷹王*									33	
134	吹上塚東古墳										
135	吹上塚西*										
136	町張遺跡										
137	藤家*										
138-1	こがの墓1号古墳									45	
-2	こがの墓2号*										
-3	こがの墓3号*										
4	こがの墓4号*										
-5	こがの墓5号*										
139	藤家*										
140	山ノ神*										
141	矢先山下*									45	
142-1	矢先山1号*									45	
-2	矢先山2号*										
143	矢先山稲塚									3, 49	
144	八幡松遺跡群 [八幡遺跡群] [倉原遺跡群]									106	
145	湯屋遺跡										
146	駒沢水*										
147	張安*										
148	宮沖*										
149	返野*									37, 45	
150-1	塚ノ口1号古墳										
-2	塚ノ口2号*										

番 号	遺 跡 名	田 石	縄 文 層			弥 生 層			中 世	近 世	文 献
			早 稲	須 賀	不 明	不 明	不 明	不 明			
151	宝殿ノ塚古墳										
152	神遺跡									45	
153	滝沢*									45, 50, 102	
154	佐野山*									45	
155	向山遺跡									104	
156	大門遺跡									45	
157	藤山*									45	
158	大久保*									45	
159	いちごぼ*									45	
160	山崎*										
161	下月内*										
	[上日南遺跡群]										
162-1	上日南1号古墳										
-2	上日南2号*										
3	上日南3号*										
163	小坂塚古墳										
164	湯田遺跡群									45	
165	小坂東*										
166	滝見塚古墳										
167	滝見塚*										
168	小坂城跡									33	
169	光町地蔵跡										
170	瓦町遺跡									45	
171	塚ノ崎*										
172	一木松古墳									12, 45	
173	塚穴*									45	
174	東井*										
	[湯ノ塚古墳群]										
175-1	湯ノ塚1号古墳										
-2	湯ノ塚2号*										
176	稲妻山城跡									45, 108	
177	町屋敷遺跡										
178	野高塚*										
179	高河原*										
180	天木下*										
181	旗立寺*									45	
182	清水*										
183	舟山*										
184	新王子*									45	
185	花園*										
186	鎌倉跡										
	[坂御台遺跡群]										
187	坂御台古墳										
188	宮路C*										
189	赤光塚遺跡										
190	西上川原*										
191	中島*										
192	大沢*										
193	木引*										
194	欠口*										
195	土井合*										
196	塚田*										
197	西沖*										

第5表 更埴・長野地区遺跡地名表(4)

番 号	遺 跡 名	田 石	川			保 生	古 墳	香 草	中 世	文 明
			河 原	水 道	池 田					
276	大上遺跡								○	45
277	大上百遺跡								○	
278	大上A#								○	45
279	大上B#								○	45
280	大上C#								○	45
281	大上D#								○	
282	日向遺跡								○	45
283	大上E#								○	
284	大上F#								○	73
285	かじか沢#								○	
286	平林#								○	45
287	家沢(稲田)#								○	
288	松川遺跡								○	45
289	松の山遺跡								○	39, 40
290-1	長野口大塚古墳								○	45, 107
2	長野口大塚1号*								○	
-3	長野口大塚2号*								○	
4	長野口大塚3号*								○	
-5	長野口大塚4号*								○	
291	天神山遺跡								○	45
292	和田城跡								○	45, 108
293	納戸遺跡								○	
294	いりじやく#								○	45
295	城の堀#								○	45
296	池市場#								○	45
297	前浜#								○	45
298	西の入遺跡								○	45
299	東の入遺跡								○	45
300	塩山遺跡								○	
301	瓶の水#								○	
302	上尾城跡								○	45, 108
303	大崎遺跡								○	45
304	山田遺跡								○	45
305-1	赤田大塚1号古墳								○	45
-2	赤田大塚2号*								○	45
306	白山屋#								○	45
307	赤坂遺跡								○	
308	西の城跡								○	108
309	東の#								○	108
310	寺尾遺跡								○	
311-1	小山田遺跡古墳								○	
-2	藤原1号*								○	
-3	藤原2号*								○	
-4	藤原3号*								○	
-5	藤原4号*								○	
-6	藤原5号*								○	
312-1	藤原1号*								○	
-2	藤原2号*								○	
-3	藤原3号*								○	45
-4	藤原4号*								○	45
-5	藤原5号*								○	
-6	藤原6号*								○	
313-1	藤原平1号*								○	

番 号	遺 跡 名	田 石	川			保 生	古 墳	香 草	中 世	文 明
			河 原	水 道	池 田					
313-2	藤原平2号古墳									45
3	藤原平3号*								○	
314	城#								○	
315	石川城跡								○	45
316	石川方遺跡								○	
317-1	大田和1号古墳								○	
-2	大田和2号*								○	
-3	大田和3号*								○	
318	上石川城跡								○	45
319	宮下遺跡								○	45
320-1	宮下1号古墳								○	
-2	宮下2号*								○	
321	新橋社#								○	13
322	湯の入上遺跡								○	45
323	川崎町遺跡古墳								○	45, 95, 103
324	新井#								○	45, 95, 103
325	湯の入南跡								○	34, 45
326	湯の入西跡								○	
327-1	湯の入1号古墳								○	
-2	湯の入2号*								○	
-3	湯の入3号*								○	
4	湯の入4号*								○	
-5	湯の入5号*								○	
-6	湯の入6号*								○	
-7	湯の入7号*								○	
328	のぎのぼ遺跡								○	45
329	二ツ岡城跡								○	
330	藤原古墳								○	
331	山田新田#								○	
332-1	柳沢1号*								○	
-2	柳沢2号*								○	
-3	柳沢3号*								○	
333	小金山遺跡								○	45, 96
334	藤石津古墳								○	
335	藤原城#								○	
336	穴野原#								○	
337	舞石石#								○	
338	北石遺跡								○	
339-1	市屋敷1号*								○	10
-2	市屋敷2号*								○	10
340-1	大早1号*								○	
-2	大早2号*								○	
-3	大早3号*								○	
341	藤原北山#								○	
342-1	上大久保1号*								○	
2	上大久保2号*								○	
343	大塚城跡								○	45, 108
344	大塚平#								○	
345	原所市遺跡								○	
346	赤岩遺跡								○	45, 52
347	八百池#								○	
348	藤原#								○	
349	赤石城跡								○	



新庄川流域の地形分布図

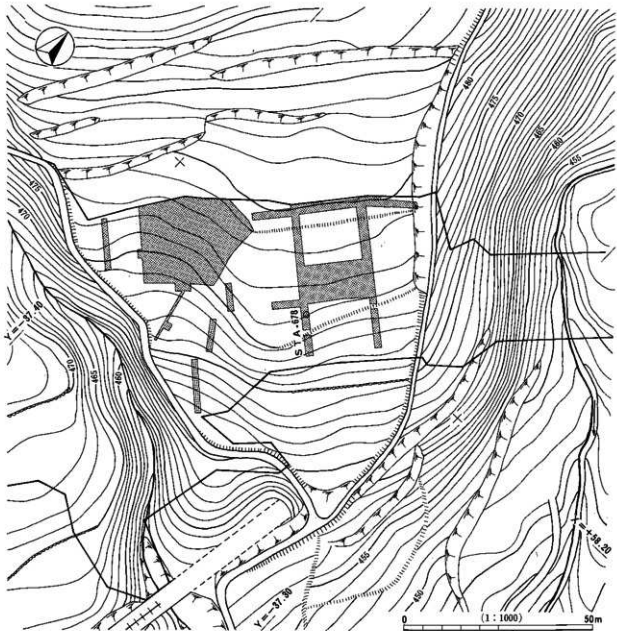
第3章 ^{とりばやし}鳥林遺跡

第1節 遺跡の概観と調査の概要

1 遺跡の概観

本遺跡は更埴市大字桑原字鳥林に所在し、JR篠ノ井線桑原信号場北側引き込み線のやや西に位置する。高速道路線としては、一本松トンネルを抜けて北西に進路をとり、狭捨サービスエリアを過ぎた高速道がJRと共に大きく方向を変えて北東を目指す地点で、調査範囲のほぼ中央に中心杭STA.678が位置する。

遺跡は南北を深く侵食された南東向きの尾根の小平坦地を占め、標高480m前後である。東には千曲川の曲流部を一望し、南には聖高原の山並みを望む、眺望のすぐれ傾斜地である。周囲一帯はかつて桑畑で、



第7図 調査区全体図

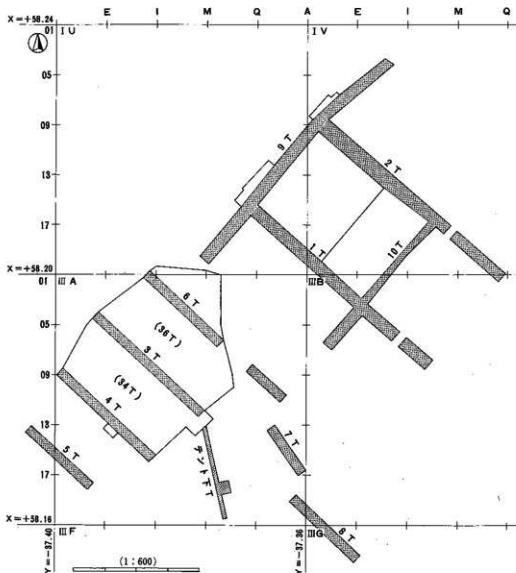
現在は果樹園として利用され、それによる地形の改変が見られる。

これまで精円押型文土器と石鏃・石匙・刃器・特殊磨石などかなりの石器が採集され、縄文早期の遺跡として周知されていたが、調査歴はない。

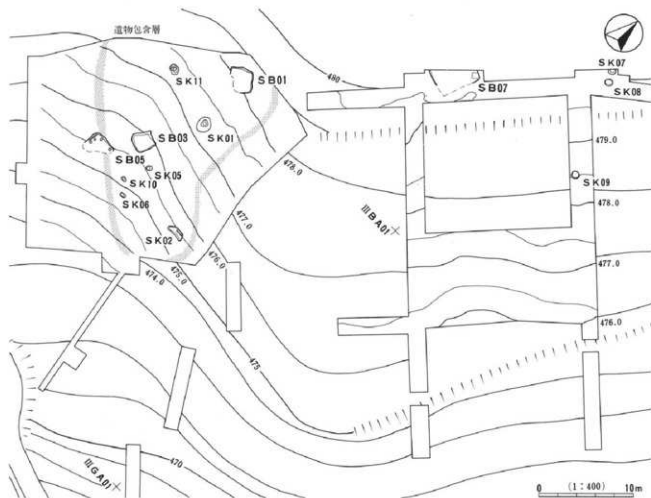
2 調査の概要

遺跡の範囲が不明瞭だったことから、本調査に先立って昭和63年12月22日、県教委文化課により、高速道用地内にテストビット7カ所をあける試掘調査が行われ、遺物包含層を確認した。

発掘調査は平成元年4月10日から開始した。小型重機でもJR篠ノ井線のガードを通過できないという悪条件のため、作業はすべて人力のみで行わざるをえなかった。当初4,000㎡を対象としていたが、トレンチ調査によって面的調査が必要な部分の確認に努めた。トレンチは等高線に直交する北西—南東方向に、10~20m間隔で9本（1~8 T・テント下）、北東—南西方向に2本（9・10 T）設定した（第7・8図）。これを掘り下げたところ、3・4・6 Tがかかる南側緩傾斜面の20×30mほどの範囲に縄文早期の遺物が集中し、縄文・平安時代の住居址、土坑などの遺構が確認された。このほかの大部分の地点では、縄文時代から近世までの遺物が混在してわずかに出土し、遺構がかかった9 Tの一部を拡張するとどめた。こ



第8図 配点・トレンチ設定図



第9図 遺構分布図

の結果、南側の地点を面的に掘り下げるとこととし、包含層の遺物はトレンチで取り上げるほか、3T・4Tの間を34T、3T・6Tの間を36Tと呼称して取り上げた。最終的に検出した遺構は縄文早期の住居址2軒・土坑6基、弥生～古墳時代の土坑2基、平安時代の住居址2軒となった。

遺構検出面までは掘り下げた時点で測量基準杭を設定し、第1章第2節の原則に沿って($X=+58.20$, $Y=-37.40$)を大地区IIIA区、($X=+58.20$, $Y=-37.36$)をIIIB区の基準点とし、それぞれの北側に接する地区をIU・IV区とした。遺構測量に適宜2m方眼を設定して手測した。

検出した遺構がほぼ完掘となった5月末に空撮を行い、6月4日には現地説明会を実施し、6月9日に調査を終了した。

3 調査の経過

平成元年度

- 4月10日 発掘開始式。1T掘り下げ。縄文・弥生・平安・近世の遺物混在。
- 13日 3～6T設定、掘り下げ。東北部で遺物多。
- 17日 3・6Tで縄文住居址2軒確認。この地点を面的に調査する予定。
- 20日 36Tをほぼ検出面まで掘り下げる。
- 25日 4～6Tの間には押型文包含層広がる。



作業風景 (平成元年4月)

- 26日 平安時代住居址を検出。
 28日 ほば検出終了。遺構らしいものは縄文早期住居址5・土坑10、平安住居址1など。
 5月1日 業者によりB、M設定。遺構掘り下げ。
 10日 9T延長、平安遺構かかるか。縄文住居址に遺構ではないものが判明。
 17日 1・2T間は黒色土厚く、遺構残存するか。
 19日 9Tで平安住居址、弥生土坑検出。10Tから押型文・石器出土するも遺構なし。
 神村透理事、現地指導。
 24日 遺構掘り下げ終了に近づく。
 29日 遺構掘り下げ、実測。空撮。
 6月4日 現地説明会開催。見学者90名。
 6日 撤収開始。川田糸里遺跡へ機材搬入。
 8日 地形図作成。調査終了。



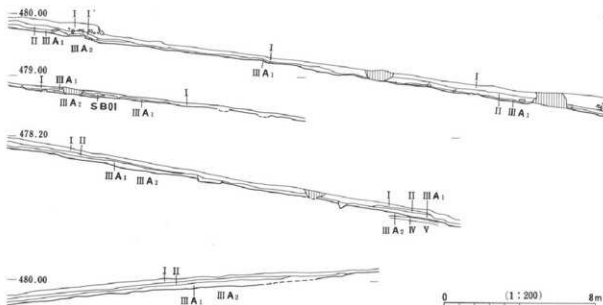
作業風景 (平成元年6月)

第2節 地形と基本層序

1 地 形

本遺跡は、標高800m内外を占める大峰面群の大田原平坦面から東に延びる小さな尾根筋が、低地に沈む標高500m内外の小さい傾斜地に位置し、佐野川扇状地・千曲川曲流部を眼下に置く。

ここは、長野盆地西縁推定断層群（仮称）によって、山麓線がその方向性を保って大きく湾入した山懐に分布する。後期更新世末、後背地からの押し出し堆積物または崩積土によって堆積が進み、その後この地域の隆起に伴い北側の荏沢川、南側の柳沢川が下刻して先端部を削られ、両川に挟まれた小規模な傾斜地として形成を見た地域である。堆積物は、後背地の岩石を反映しており、砂泥土を基質とした不ぞろいの安山岩歪角礫層で、扇状地堆積物・土石流堆積物・崖錐いずれかの区別は難しい。前方には、佐野川・荏沢川の新期扇状地が、八幡～稻荷山におよび後背湿地を埋めている。



第10図 土層図

遺跡の立地としては、山を北西に背負い、前方に開けた、南東向きの安定した傾斜地の長所をもつ。しかし、背後の山地は急斜面で、谷は受水域が狭く水量が乏しい。また、冬季の季節風が吹き上げて寒気にさらされることが多いなどの短所をもつ。

2 基本層序と遺構

本遺跡の基本層序について、最も良好な遺物包含層を検出した南側傾斜地の中央を通る3Tを標準土層として説明する(第10図、PL7)。

I 層：10YR 3 / 3 暗褐色土。耕作土。

II 層：10YR 2 / 2 黒色細粒砂。径0.5mmの風化礫が散在し粘性に欠ける。角礫の混入がある。

III A₁ 層：10YR 3 / 2 暗褐色細粒砂。径2～5mmの風化礫が中～下部を中心に散在し、上部には礫の混入が多い。粒子が細かく火山灰起源の可能性がある。III A₁層が腐植した部分を本層とした。

III A₂ 層：10YR 4 / 4 黄褐色細粒砂。土質はIII A₁層と基本的に同じだが、風化礫の混入は少ない。

IV 層：10YR 4 / 4 黄褐色ローム層。本層の上部と下部に風化礫を含む。若干粘性があり、しまりのあるシルト質。径0.5～1mmの風化礫が全体に散在する。

V 層：風化岩盤層。

上記の層序と遺構・遺物との関係は次のとおりである。I層から中・近世の陶器が出土した。II層から土師器・須恵器・灰釉陶器が出土し、下部からは押型文土器が出土した。平安時代の遺構は、本層から掘り込まれていると思われる。III A₁層は縄文早期立野式を主体とする遺物包含層で、該期の遺構は本層で検出されたが、遺構埋土と似通っている。

第3節 遺構

1 縄文時代の遺構

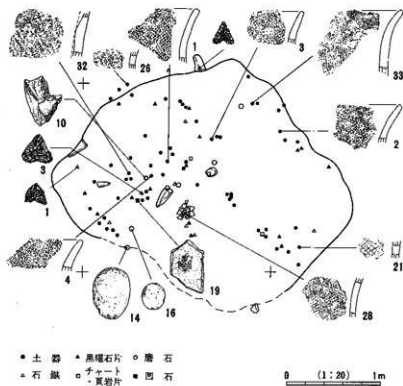
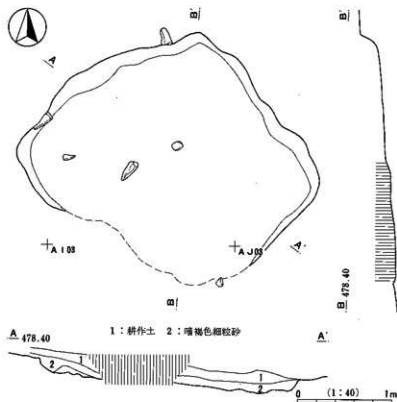
(1) 竪穴住居址

SB01 (第11図、PL5)

位置：III A03にある。検出：トレンチ6TでIII A₁層を検出した際、同一個体と思われる土器片が集中して出土した。この付近を拡張して範囲をとらえ、サブトレンチの断面観察によって、III A₁層からの西北側の落ち込みが明瞭に確認できた。埋土：III A₁層と共通の暗褐色細粒砂(2層)である。これを耕作土(1層)が被覆している。規模・形態：南向きの斜面にあるため、南壁は確認できない。北西—南東・北東—南東とも2.6mの不整な隅丸方形。推定面積は検出面の輪郭では5.31㎡、掘り込まれた床面では4.63㎡を測る。床・壁：掘り込んだIII A₂層を床面とするが、南側へ5度前後傾斜している。全体に径3～5mmほどの炭が散在する。山側の北壁高は20cmを測る。炉・柱穴は認められない。遺物分布：土器・石器とも多量である。土器(第17図1～36)は押型文のみで、内訳は格子目文37、山形文2、楕円文2に燃糸文5、縄文6が伴い、格子目文と同じ胎土の文様不明破片60がある。このうち、格子目文は同一個体と思われるものがかなりあり、住居址中央に集中していたが、接合は不可能であった。石器(第24図1～21)の内訳は、石鏃13、石錐1、刃器4、大形刃器4、打製石斧2、石錘2、磨石類13、特殊磨石2、台石1、剥片17、碎片121である。これらは、土器がほとんど単純であることから、立野式期には限定されるものと考えられる。

SB03 (第12図、PL6)

位置：III A07にある。検出：トレンチ3 Tの断面に落ち込みが観察され、床面が達しているIII A₂層と暗褐色の埋土とは明瞭に識別できた。遺物が多出したためトレンチをIII A₁層で拡張してプランをとらえ、サブトレンチで壁を確認した。埋土：2分層できた。上層(2層)は暗褐色細粒砂である。下層(3層)は黄褐色細粒砂で、多数の大礫を交えブロック状をなしている。したがって、住居廃絶後に礫と共に3層が埋積したと考えられる。規模・形態：南北2.1m・東西1.8mの不整な隅丸方形。面積は検出面の輪郭で3.76㎡、床面で2.95㎡を測る。床・壁：掘り込んだIII A₂層を床面とし、ほぼ平坦である。山側の北壁高は約30cmを測り、緩やかに立ち上がる。南壁はトレンチ掘り下げの際削平してしまった。北東側の壁と床面には地山の礫が顔を出している。炉・柱穴は認められない。遺物分布：少数の土器と多数の石器が出土したが、3 T拡張の際に取り上げられたものが多い。土器(第18図37~52)は押型文を主体とし、格子目文8、山形文2、楕円文4、ネガティブ楕円文? 1、撫糸文1、格子目文と同じ胎土の文様不明破片23、貝殻沈線文? 1、有尾式2である。石器(第25図23~40)の内訳は、石鏃19、刃器8、大形刃器25、磨製石斧、磨石類8、特殊磨石5、原石・



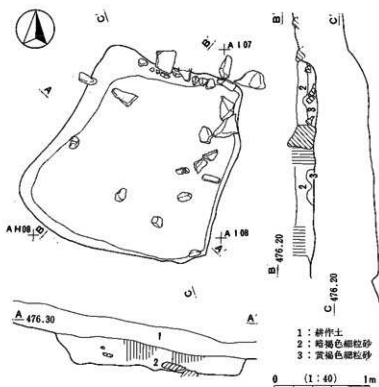
第11図 SB01実測図・遺物分布図

石核3、剥片20、碎片246を数え、剥片・碎片に黒曜石の占有率が著しい。土器は多少混在しているが、主体は立野式期と思われる。

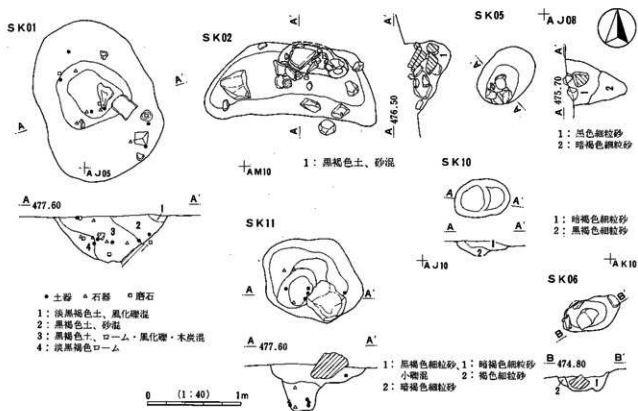
(2) 土坑

縄文時代に属する土坑はSK01・02・05・06・10・11の6基があり、いずれも3Tから6Tの範囲に分布し、押型文土器の分布と重なっている。大形のSK01・02・11は他の遺構から5～10mほど離れて散在し、小形のSK05・06・10は2m前後の間隔で集中している。

SK01 (第13図、PL7) : IIIA03にある。土色の違いと黒曜石片の集中から検出できた。南北に長軸をとり、1.72×1.24mの楕円形を呈する。深さ0.42mを測り、擋鉢状に立ち上がる。埋土は黒褐色土で、土色の差と風化礫の量から4分



第12図 SB03発掘図



第13図 SK01・02・05・06・10・11発掘図

層できた。遺物は2層下部から3層に集中する。土器(第18図55~61)は格子目文2、ネガ楕円文1、楕円文1の押型文、縄文1、不明3、貝殻沈線文系1、有尾式1、晚期1が出土し、混在している。石器(第26図41~46)は石鏃2、大形刃器3、磨石類1、特殊磨石1、台石1、剝片4、砕片53がある。

SK02(第13図、PL7)：ⅢA14にある。縄文早期遺物包含層の精査中、ⅢA2層上面で集石状の礫を検出し、その周辺から黒褐色土の落ち込みを認めた。東西に長軸をとり、 $1.84 \times 0.65\text{m}$ の半円形を呈する。深さは北側で50cmを測るが、南側ほど浅く鍋底状になる。埋土は地山のブロック、礫を多く含み、分層はできない。遺物は少量の土器片と石鏃2、磨石類1、台石破片5、剝片1、砕片18(第26図48~52)がある。

SK05(第13図、PL7)：ⅢA08にある。ⅢA₂層で黒色土の落ち込みを認めた。平面形は $0.7 \times 0.5\text{m}$ の楕円形、断面形は深さ0.7mの円錐形を呈する。埋土はⅢA層を基調とする下層(2層)と、大礫を含む上層(1層)に2分層でき、2層から縄文土器片少量と砕片9が出土した。

SK06(第13図、PL7)：ⅢA13にある。ⅢA₂層上面で土色の差から検出できた。 $0.62 \times 0.34\text{m}$ の楕円形、深さ20cmを測る。埋土は2分層でき、押型文土器と砕片4点が出土した。

SK10(第13図、PL7)：ⅢA13にあり、SK06の1.2m北西に位置する。 $0.58 \times 0.4\text{m}$ の楕円形、深さ15cmを測る。埋土は2分層でき、押型文土器少量が出土した。

SK11(第13図、PL7)：ⅢA02にある。ⅢA₁層で土色の差から検出できた。 $1.11 \times 0.91\text{m}$ の不整な楕円形を呈し、底面は中央が一段深く、検出面から0.5mを測る。埋土はこの段差で2分層でき、上層(1層)には大礫1個があった。遺物は下層(2層)に多く、格子目文1と同じ胎土の文様不明5、楕円文2の押型文土器、石匙1、刃器1、大形刃器1、剝片3、砕片43の石器がある。

これら6基の土坑には時期の異なる土器が多少混在しているが、遺跡全体の土器の中でも押型文土器以外はきわめて少量で、検出面に若干の差があるが、埋土は共通のため、2軒の住居址とほぼ同時期の縄文早期押型文期と考えられる。また、SK01・02は風倒木痕の可能性もある。

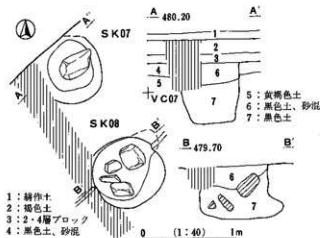
2 弥生時代の遺構

(1) 土 坑

トレンチ9Tの北東端付近のV層上面で黒色土の落ち込み(SK08)を認め、その部分を用地境まで拡張し、隣接するSK07を検出した。位置はIVA06である。断面観察では両者ともIV層上面から掘り込まれ、深さは0.65m以上ある。畑灌パイプがSK07・08の西壁の一部破壊している。

SK07(第14図、PL7)：口径0.7m・底径0.5mの円形で、検出面からの深さは0.5mを測る。埋土は2分層でき、平坦な底面から0.3mに大礫1個があった。遺物は赤彩の高杯と櫛描文の甕破片があり(第50図1・2・6・7)、2はSK08と接合している。

SK08(第14図、PL7)：口径0.8m・底径0.6~0.7mの円形で、検出面からの深さは0.5mを測る。底面は平坦で壁は一部オーバーハングし、埋土中位に拳大から人頭大の円礫4個があった。遺物は櫛描文の甕破片がある(第50図7・8)。



第14図 SK07・08実測図

3 平安時代の遺構

(1) 竪穴住居址

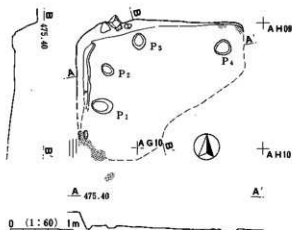
SB05 (第15図、PL5)

位置：ⅢA12にある。検出：ⅢA層でおおよそ方形の黒色土の落ち込みをとらえた。埋土：Ⅱ層を基調とする黒色土の単層で、径5cmほどの礫が散在する。規模・形態：谷側の東・南壁は遺存しない。現存長は南北2.2m・東西2.7mを測る。壁線は方位と一致している。壁・床：北壁高は最高40cmを測り、やや外傾して立ち上がる。遺存する床面は平坦である。西壁に沿って幅15cm、深さ30cmの周溝がある。柱穴：壁の手前にP₁～P₄の4個があり、径は20～30cmを測るが、深さは2～3cmと浅い。カマド：南西隅に痕跡があり、径80cmほどの焼土の広がり、炭化物が認められた。径10～15cm大の礫が多数見られたが、カマドに伴うものではない。北東隅にも焼土と炭化物が散在するが、カマドではない。遺物分布：全体に遺物量は少ない。カマド付近に黒色土器A杯A(第51図1～3)、土師器小形甕(同5)が破片の状態で集中し、埋土から光ヶ丘1号竈式の灰陶陶器椀A(同4)が出土した。

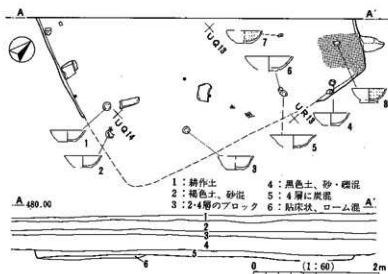
SB07 (第16図、PL6)

位置：IU15・19・20にある。検

出：9T掘り下げの際、Ⅲ層下部で完形の土師器杯数個を検出し、一部で壁・床を認めた。北端でカマドの焼土を検出するにいたって住居址とした。南・北の壁線が平行にならないことから当初切り合いを予想したが、結果的に1軒となった。埋土：9T断面にかかるため6分層したが、上部の1～4層は畑の造成などの影響を受けている。本来の埋土は下部の10cm前後で、Ⅳ層に似る。規模・形態：南北4.5mは確認できるが、用地界にかかるため西側半分程度は不明で、東西は3.3m以上である。主軸はN15°E。壁・床：床面は平坦ながら、地山の礫が顔を出しやや凹凸がある。南側には厚さ5cm程度のロームブロックを含む硬い貼床が見られる。南壁高は10cm程度で、東壁はほとんど遺存しない。カマド：北東隅の焼土がカマドの痕跡である。壁外の大礫は構築材の一部らしい。遺物分布：壁に沿うように、床面から完形に近い土師器杯・椀が出土した(第51図1～8)。8はカマドの焼土内にあった。このほか、土師器小形甕(9)がある。



第15図 SB05実測図



第16図 SB07実測図

第4節 遺物

1 縄文時代の遺物

(1) 土器

① 土器分類の概要

今回の調査で出土した縄文土器には、早期の押型文土器を主体に、晩期末葉までがあり、次のように分類した。

第I群 押型文系土器

第1類 押型文が施される土器

第2類 捺糸文が施される土器

第3類 縄文が施される土器

第4類 不明・無文の土器

第II群 貝殻沈線文系土器

第III群 条痕文系土器

第IV群 前期の土器

第V群 中期の土器

第VI群 後期の土器

第VII群 晩期の土器

以上のうち、出土土器の約90%を占める第I群土器については、小破片のため器形や施文法、全体の文様構成をうかがえるものがないため、文様種別から第1類をa種：格子目文、b種：ネガティブ楕円文、c種：山形文、d種：楕円文の4種に分類した。また、器面の摩滅・剥落により文様不明のものが約半数に上るため、第4類：不明・無文としてまとめ、胎土が第1類のa・b種と共通するものをA、c・d種と共通するものをBとした。第3類にも胎土にA・Bがあり、第7表では区別しなかったが、本文中では形態的特徴を加味して、それぞれa種、b種とした。

第II・III・IV・VII群は、それぞれ2・3の型式にわたるが、少数のため本文中でふれることとする。第V・VI類は1・2点の出土にすぎない。

② 土器の分布と出土量

前述のとおり、出土土器は全般に遺存状態が悪い。特に第I群第1類のa種格子目文土器はきわめて脆弱で、洗浄の際には水に入れただけで表面が剥落する状態のため、当初は水洗いせずにナイフなどで土を削り落としていたほどである。このため、全体の3割程度に上る指頭大以下の破片は洗浄から除外し、識別が可能だった土器を前項に沿って分類した。したがって、出土量が多い割には凶化に耐えるものが少なく、図示できたものは第1類c・d種や、第II群以下の土器が相対的に多くなる結果となった。このような理由から、第I群土器には不正確を承知のうえで胎土を指標に第4類不明・無文A・Bの項をあえて設け、多少とも出土土器の全体像の復原に供するため、定量的な検討の参考とした。集計は、大小にかかわらず破片を1点とし、同一個体と思われる場合でも破片数で示した。これをまとめたのが第7表である。

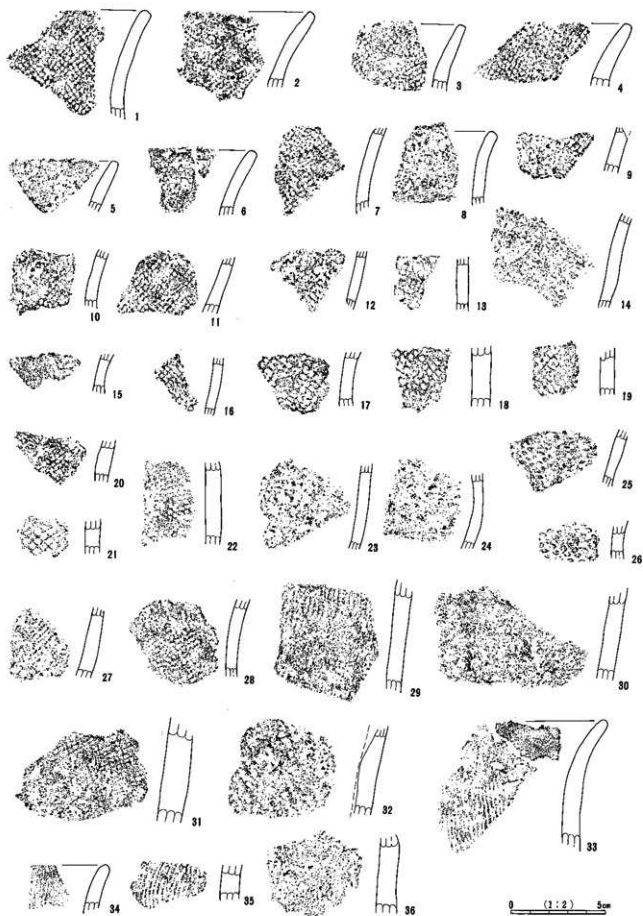
分類が可能な土器は1,189点を数え、内訳は第I群90.6%、第II群4.2%、第III群0.8%、第IV群1.6%、第V・VI群0.2%、第VII群2.6%で、早期が全体の95.6%となる。第6表では、縄文時代に属する住居址2・

土坑6を遺構とした。トレンチ3・4・6・8Tを設定し、34T・36Tとして拡張して面的調査を行った、遺構の分布する南向き斜面を仮に西区とした。またトレンチ1・2・9・10Tを設定した南東向き斜面を仮に東区と呼称し、それぞれに小計を設けた。この3大別出土地区と土器の群別の分布については、いずれもきわめて少数の第Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ群が東区に見かけられず、第Ⅶ群が東区に比較的多いこと以外、差異が指摘できない。

次に出土土器の圧倒的多数を占める第Ⅰ群にしばって概観してみる。遺構出土土器については、その65%に当たるSB01を代表させる。総数113点の32.7%を第Ⅰ類a種格子目押型文が占め、胎土の共通性から第4類Aを加算すると85.8%、c・d種山形・楕円押型文に第4類Bを加算すると4.4%、その他が第Ⅰ類a種と共通の胎土の第2類捺糸文となる。したがって、SB01は第Ⅰ類a種のほぼ単純相を示す遺構と見られる。第Ⅰ群の68%を占める西区は、第Ⅰ類ではa種42.2%、b種2%、c種33.5%、d種22.3%となり、一見、かなり偏した比率を示す。しかし、a・b種に第4類Aを加算し、c・d類に同Bを加算すると前者が70.1%を占めることになる。また、第2類捺糸文が第Ⅰ類a・b種と胎土が共通なことから、この差はさらに広がる。しかし、第3類縄文の胎土にはA・B両者があるうえ、第Ⅳ群などと識別できなかったものを含むおそれもあるが、遺構出土土器と比較した第3類の多さは、第Ⅰ類c・d種の混在率の高さを反映していると思われる。このことは東区でも同じであろう。第Ⅰ群全体について同様に第Ⅰ類に第4類A・Bを加算する操作を行うと、a・b種73%：c・d種27%となり、第2・3類をひとまずおい

第5表 縄文土器出土点数一覧表

出土地区	分類	Ⅰ 押型文系							Ⅱ 貝殻沈積文系	Ⅲ 条痕文系	Ⅳ 前期	Ⅴ 中期	Ⅵ 後期	Ⅶ 晩期	備考		
		1 押型文		2 捺糸文	3 縄文	4・不明無文		小計									
		格子目文	ネガ楕円山形文			楕円文	A									B	
SB01		37	0	2	2	5	6	69	1	113	0	0	0	0	0		
SB03		8	1	2	3	1	1	23	0	39	1	0	2	0	0		
SK01		2	1	0	1	0	1	3	0	8	2	0	1	0	0		
SK02		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	土器片出土の所見あり	
SK05		0	0	0	0	0	0	3	0	3	0	0	0	0	0	縄文土器小破片約10個出土の所見	
SK06		0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	押型文土器出土の所見あり	
SK10		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	押型文土器出土の所見あり	
SK11		1	0	0	2	0	0	4	4	11	0	0	0	0	0		
遺構小計		48	2	4	8	6	8	94	5	175	3	3	0	0	0		
04 T		2	0	1	1	0	4	11	3	22	0	0	1	0	1	0	
34 T		27	2	16	11	5	4	63	2	130	3	4	2	0	0	3	
03 T		6	0	3	10	4	7	30	4	54	4	1	0	1	0	6	
36 T		69	3	62	34	14	28	244	43	497	33	3	5	0	0	2	
06 T		1	0	0	0	0	0	1	1	3	0	0	2	0	0	0	
08・テント下T		1	0	2	0	1	0	10	1	15	0	0	0	0	0	1	
西区小計		106	5	84	56	24	43	359	54	731	40	8	10	1	1	12	
01 T		1	1	1	2	0	0	8	3	16	0	0	0	0	0	1	
02 T		2	0	3	3	0	1	33	12	54	3	0	0	0	0	2	
09 T		1	0	2	2	0	1	10	6	22	1	1	2	0	1	15	
10 T		6	1	1	5	0	8	29	8	58	3	0	3	0	0	1	
東区小計		10	2	7	12	0	10	80	29	150	7	0	5	0	0	19	
表面採集		4	0	3	4	0	0	10	0	21	0	0	1	0	0	0	
合計		168	9	98	80	30	61	543	88	1,077	50	9	19	1	2	31	分類総点数1,189点



第17図 縄文土器拓本図(1) (S B01)

でもa・b種の優越性は明瞭に示される。第1類の各種は立野式・樋沢式・細久保式に比定される特徴を備えるが、それぞれの種別の中にもバリエーションがあり、本文中でふれることにする。

第I群の最も良好な遺物包含層は、遺構が分布する西区に20×25m程度の範囲にわたって堆積し、北西の用地外へも広がっていると推定される。土層と遺物との対応関係は第2節で述べたが、Ⅱ・ⅢA層から主体的に出土している。前述のように、第1類土器は3型式を含む可能性があるため、一部の分層して取り上げてある遺物の内容を検討してみたが、第1類の各種別と土層の上下関係は指摘できそうにない。

③ 遺構出土の土器

SB01 (第17図1~36, PL8)

すべて第I群に属す。1~22は第1類a種である。胎土は暗褐色で雲母・石英・長石の粗粒を含む。器壁は5~10mmの範囲にあり、頸部がやや厚くなる。1~8は緩く外反する口縁部で、端部は面取りしてやや平らになる。1は口唇端部に施文している。格子目文は21が大きな菱形、17~19が不ぞろいの長方形のほか、2~3mmの細かな正方形で、大部分が同一個体と思われる。器面に土が残るか剥落のため、原体や施文方向は観察しにくい。23・24は文様がわからないが、同じ個体の胴下部らしい。25・26はd種である。25は赤褐色で凹部を広く彫り込む。26は暗褐色で平面的な楕円文である。

33~36は第2類、27~32は第3類a種で、胎土はいずれも第1類a種と同じく、やや橙褐色を帯びる。33は外反する口縁部に無文部を残し、34は口唇端部以下から施文される。いずれも細い燃糸を軸棒に密に巻いている。第3類は、32が太めのほか、細い原体を用いている。燃りは観察しにくく、28・29はLRのようで、29は縄文が縦走る。31は胴下部と思われるが、器厚1.5cmと分厚い。前項で述べたとおり、本址出土土器は25・26を除けば一括と考えて差し支えないと思われるが、個体数は少ないようである。

SB03 (第18図37~52, PL8)

53・54が第IV群のほかは第I群に属す。37~50は第1類で、37・38・40・41・43~45はa種である。37~38はわずかに外反する口縁部で、口唇端部は薄い。格子目文は、43が最も大きな菱形、38・44は細かい菱形、37・41は中間の大きさの菱形、40は多角形で第2類との中間的なものである。45は施文が浅く不明瞭である。39はb種である。これらは密接施文されるらしい。46・47はc種で、横位帯状施文である。48はd種でやや大きな楕円文である。49・50はd種らしいが摩滅が著しい。

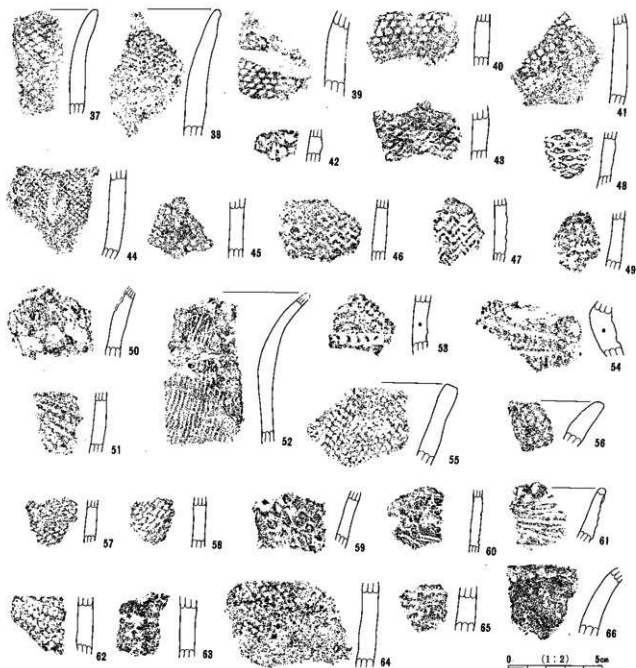
52は第2類で、外反する口縁部から密に巻いた細い燃糸文が縦走る。51は第3類b種で、RL縄文を施される。粗粒の石英が目立ち、47に近い胎土である。53・54は縄文地文に半截竹管による横走る爪形文を施し、第IV群の有尾式である。本址の土器はやや混在しているが、不明・無文Aの多さを考えれば第1類a種の時期の遺構としてよからう。

SK01 (第18図55~62, PL8)

55~59は第I群第1類である。55・57・58はa種、56はb種で、55・56の口唇端部は面取りされる。格子目文は55が正方形、57が細かい菱形、58が長方形である。56は凸部の広い円形である。59はd種で、斜位の粗大な楕円文のようである。60・61は第II群で、器壁が薄く黄褐色の胎土である。61は口唇部に刻みが施され、斜位沈線の狭い間隙に貝殻腹線文を施す。60は斜位沈線の間隔が広く、大ぶりな貝殻腹線文を施す。62は第IV群で、RL・LRの原体を用いて横位の羽状縄文を施す。胎土に繊維を含まない。

SK11 (第18図63~66, PL8)

いずれも第I群である。63は第1類d種で浅い施文のため、粒が不明瞭である。64~66はa種と同じ胎土である。64は第3類で原体はRLである。65は摩滅し、66はナデを施されているらしく、燃糸文か縄文か判然としない。



第18図 縄文土器拓本図(2) (37-52: S B02, 55-61: S K01, 62-66: S K11)

④ 遺構外出土の土器

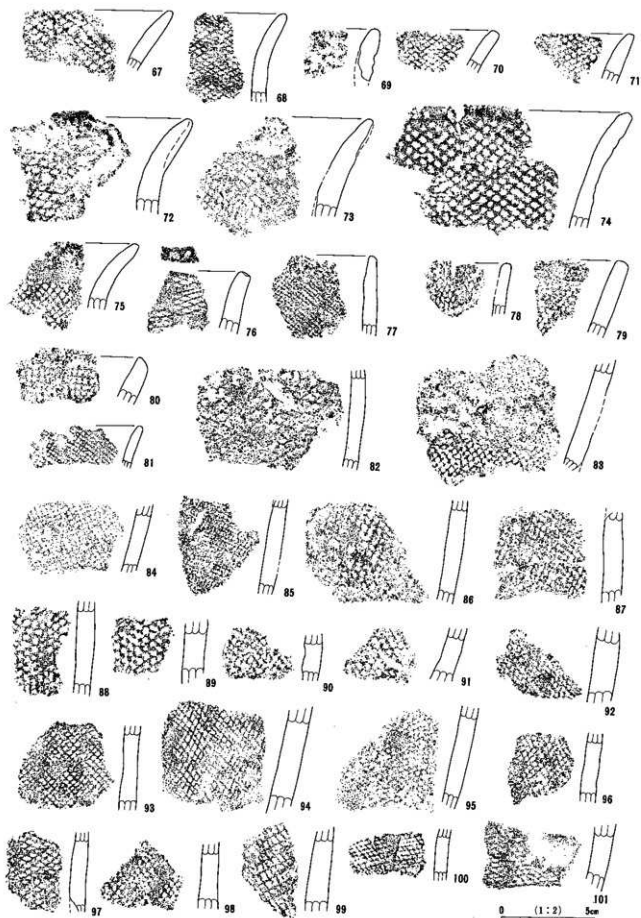
第1群 (第19図～第22図, PL 9～11)

第1類 (第19図67～第21図183, PL 9・10)

a種 (第19図67～96, 98～第20図107・111, PL 9)

胎土には雲母・石英・長石の粗粒を多く含んでザラザラした感触があり、暗褐色から暗赤褐色を呈する。c・d種と比較して厚手で脆弱である。器壁は6～12mmと幅が大きい、8～10mm程度が多い。

67～81は緩く外反する口縁部破片である。76～81は外反が弱い。口唇部は、面取りされてやや平らになる70・71・74・76・78・79・80と、わずかに薄くなるか円頭状の67～69・72・73・77・81・82がある。80は外そぎ気味である。76は口唇端部に押圧が施されている。格子目文は口唇部直下から施されるが、75・107は口縁部を無文部としている。施文方向は観察にいが、大部分は縦位密接である。100は間隔をあ



第19圖 縄文土器拓本圖(3)

けて施文している。73・76・81・87・94・95・97・98・100・102～104は施文後、縦位に磨り消して幅の狭い無文部を作っている。

菱形文を構成する彫刻のバリエーションには、菱形(67・68・70・73・75・76・83・86・87・94・96・100・101・107)、粗大な菱形(72・82)、正方形(69・69・80・81・84・93・105・111)、きわめて細かい正方形(77・85)、長方形(102)、円形(71・74・88～92・95・103・104)、乱れたもの(70～80・106)などがある。107は頸部の無文部に、原体端による刺突文が巡る。106は器壁が薄く黄褐色土の胎土で、c・d種の特徴に通ずる。74・88・89・103・106などはネガティブ楕円形や市松文との中間的な特徴をもつ。

b種(第19図97・第20図108～110・112, PL9)

97・110はa種と同じ胎土で器壁は厚く、暗赤褐色を呈する。器面に対してネガティブ楕円文の粒が横長に並ぶ。108・109は器壁が薄く、橙褐色を呈する。108は器面に対して粒が縦長、109は横長に並ぶ。いずれも楕円文の粒は細かい。

112はa～d群のいずれとも異なり、II群以下に比定できるものもない。後述のように編年の位置が近いと思われるため、便宜的にここで説明する。胎土は石英・長石を含むが、雲母が見られない点でa種とはやや異なる。外面にはふい黄褐色、内面は橙褐色を呈し、器壁は6mm前後である。上端がわずかに外反するため、頸部破片と思われる。器面に対して斜めに、大きな刺突文を3列以上施している。1点のみである。

c種(第20図113～147, PL9・10)

113はa種と同じ胎土・色調を呈して器壁は厚い。凸部の広い山形文が縦位に浅く施される。このタイプは1点のみである。

ほかは胎土に細かい白色粒子や少量の石英粗粒を含み、雲母は見られない。橙褐色あるいはふい黄褐色を呈し、a類ほど脆弱ではない。器壁は5～8mmの範囲に納まる。

114～125は口縁部で、直立的にわずかに外反する。口唇部は119・120・122が丸みを帯びるほか、面取りされて角頭状である。124は口唇外面に刻みが施される。口縁部では125が斜位施文のほか、すべて横位施文され、114～116・120は1・2条の帯状施文である。胴部破片では、126・127が直交帯状?施文、128～130・134・135が横位帯状施文、132・133・139～147が横位密接施文、136～138が縦位密接施文のようであるが、小破片のためはっきりしない。126・128は器壁4mmと薄く雲母が目立つ胎土で、一見してほかとは異なっている。黒褐色を呈し、黒鉛を含む可能性がある。

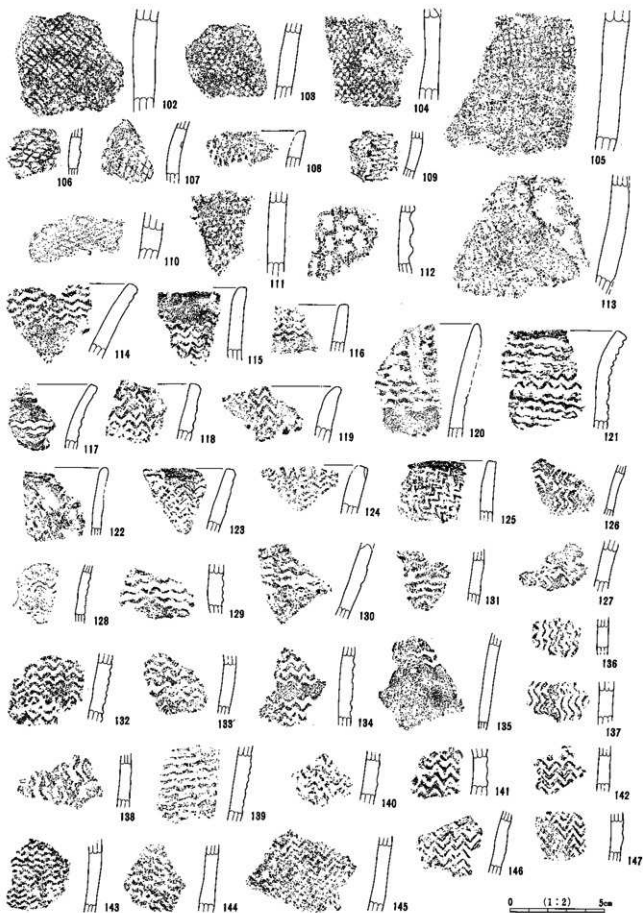
文様のバリエーションには、彫刻が浅く凸部の広いもの(126・128)、山形の起伏が小さく波状に近いもの(117・121・129～131・139)、丸みのある山形(137)、ピッチが短いもの(116・143・144)などがあるが、全体として小ぶりな角がはっきりした山形文である。

d種(第21図148～183, PL10)

胎土はc種と似ており、細かい白色粒子や石英を含み、やや粗い。橙褐色を呈するものが多い。器壁は6～10mmで、c種より多少厚い傾向がある。

148～155は口縁部で、直立的にわずかに外反する。口唇部は149・151・152が丸みを帯びるほか、端面が面取りされている。口縁部では149が直交施文のほか横位施文で、148・155は帯状施文である。154は縦位の棒状貼付文があり、この上にも施文されている。胴部破片では、156が直交施文、157～161・163は横位帯状施文である。159は無文部に浅い円形刺突文、163は縦位沈線文が施される。164・165・168は縦位施文、162・166・167・169～172は斜位施文、173～183は横位施文で、無文部が見られないため密接施文が多いと思われる。162は暗褐色で、雲母・石英が目立つa種に似た胎土である。

文様のバリエーションには、楕円の粒が大きいもの(150・159・164)、細かいもの(148・166・172・182・



第20圖 縄文土器拓本圖(4)

183)、凹部が広いもの(158)、粒が横位に連続するもの(178)、粒の頂部が丸みをもつものと平坦なものなどがある。

第2類 (第22図202~207、PL11)

いずれも第1類a種と同じ胎土・色調を呈する、器壁の厚いものである。204は口唇部にわずかに無文部を残し、密接する捺糸文が縦位に施される。207は胴下部と思われ、204と同様な捺糸文である。202・203・205・206は斜位施文である。202・205は密接、206はわずかに間隔をあげた原体、203はまばらな施文である。

第3類 (第21図184~第22図200、PL11)

胎土と器壁の厚さ、口唇部形態の違いから2種に分類できる。

a種は第1類a種と同じ胎土・色調を呈し器壁の厚いもので、184~197が該当する。口縁部破片184~187は緩く外反し口唇部は面取りされてやや平らになり、第1類a種と共通する。いずれも口唇部下から施文され、原体は184・185・187がLR、186がRLのようである。186は同じ原体で方向を変えて重複施文され、口縁部内面にも1条横位施文されている。胴部破片は、190がRL、その他はLRの原体のようで、188・191・193・194は縦位の狭い無文部がある。187・189・195は細文が不明瞭で、これらは施文後ナデが施されている可能性がある。第2類とさほど違わない細い原体である。

b種は第1類c種と同じ胎土・色調を呈し器壁の薄いもので、198~200が該当する。いずれも外反する口縁部破片で、口唇部は面取りされて角頭状を呈し、第1類c種と共通する。3点ともLRの横位施文である。

第4類 (第22図209、PL11)

確実に無文と断定できるものはなく、209も有文土器の一部か、摩滅のため文様が観察できない可能性がある。第1類a種と同じ胎土・色調・外反口縁を呈する。

底部 (第22図228~230、PL11)

228は第1類a種と同じ胎土で、粘土帯の接合部分から剥離している。摩滅のため文様は不明である。229は器壁5mmの薄い底部で無文である。230はいわゆる乳房状尖底で、山形押型文が施されている。229・230は第1類c種の底部と思われる。

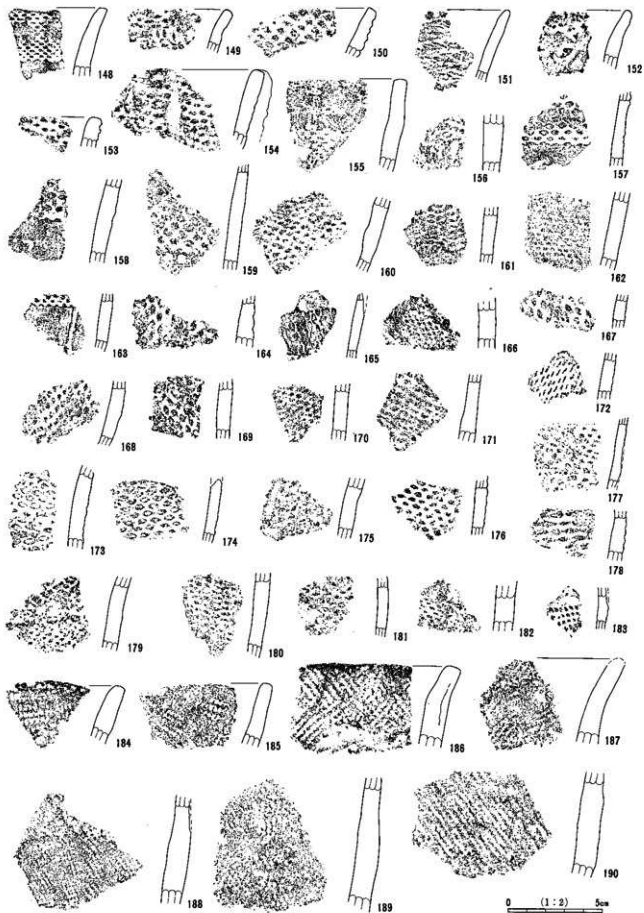
第II群 (第22図210~223、PL11)

胎土は細かい白色粒子や石英粗粒を含み、第I群第1類c・d種と似る。器壁は6~8mmと比較的薄手にそろう。色調は210・211・220・223が橙褐色、その他はにぶい黄褐色である。

210~212・214・215は沈線文を施されるものである。211は縦位区画線を残して細沈線を格子状に充填する。210は口縁部に太めの平行沈線文を施し、口唇部外面を縦位に刻む。214は斜位に平行沈線を描く。215は条痕を施され、三角形状に平行沈線文を描くらしい。212は先の鋭い工具で一本ずつ鋸歯状に細沈線文を施す。間隔が不ぞろいでやや粗雑である。

213・216~220は幅の狭い沈線文間に貝殻腹縁文を施す。217が斜位と思われるほか、多段の横位平行沈線である。219はやや太めの沈線、その他は細く鋭い沈線である。213は外反する口縁部で、文様帯下端を区画して鋸歯状に沈線文を重ねて描き、この間隔に1条おきに貝殻腹縁文を充填する。219は平行沈線間に無文部において貝殻腹縁文を密にして充填する。220は薄い口縁部と思われ、同様な施文である。216~218はやや間隔をあげて貝殻腹縁文を施す。

221・222は貝殻腹縁文のみで、いずれも斜位に重複施文される。沈線間に充填される貝殻腹縁文が器面に対して原体を寝かせて施文され、細かい傾向があるのに対して、本例と216・217は垂直に施文され、大



第21圖 縄文土器拓本圖(5)

柄である。223はベン先状工具による刺突文が連続的に施されている。

211は三戸式、210は田戸下層式に比定される。その他はおおむね戸田上層式期ごろと思われるが、長野県内ではきわめて資料の乏しい時期だけに、検討を要する。

第III群 (第22図201・224~227, PL11)

224は胎土に繊維を含み、低い隆帯がめぐる。摩滅が著しい。早期木葉、あるいは前期初頭に下るかと思われる。225・226は外反ぎみの器形で、横位に3条以上の絡条体圧痕文が施される。暗赤褐色で石英・長石を含み、繊維は見られない。227は直立の薄い口縁部で、断面三角形の斜行する隆帯をもつ。本例は神之木台式の可能性が。201は太いLR縄文を施され、内面は横位の条痕が見られる。

第IV群 (第23図233~249, PL12)

胎土は細かい白色粒子や石英を含む。235・246・247・248は繊維を含むが、少量である。

233は口縁部に突起があり、わずかに肥厚するらしい。234~236は並列の連続爪形文がめぐる。234は口縁部で、口唇は角頭状を呈する。237は刺突文が三角形を描くらしい。238は棒状工具によるやや斜行した沈線の間に刺突文を充填し、あるいは第II群かもしれない。239はC字形の列点状刺突文が3条以上並列する。240・242は半載竹管による集合沈線文が施され、242は縄文地文である。241は口唇部に刻みか施され、細い竹管文が描かれる。243~249は縄文のみである。243~246は羽状縄文で、245はループ文が見られる。

233はいわゆる中道式、234~242は有尾式に比定され、243~249もこれら前期前半の踏型式に属すと見られる。

第V群 (第23図250, PL12)

細い縦位沈線で画された磨消縄文である。加曾利EIV式に比定される。1点のみ。

第VI群 (第23図251, PL12)

磨消縄文で渦巻文を描くと推定される。堀之内I式に比定される。2点のみ。

第VII群 (第23図252~264, PL12)

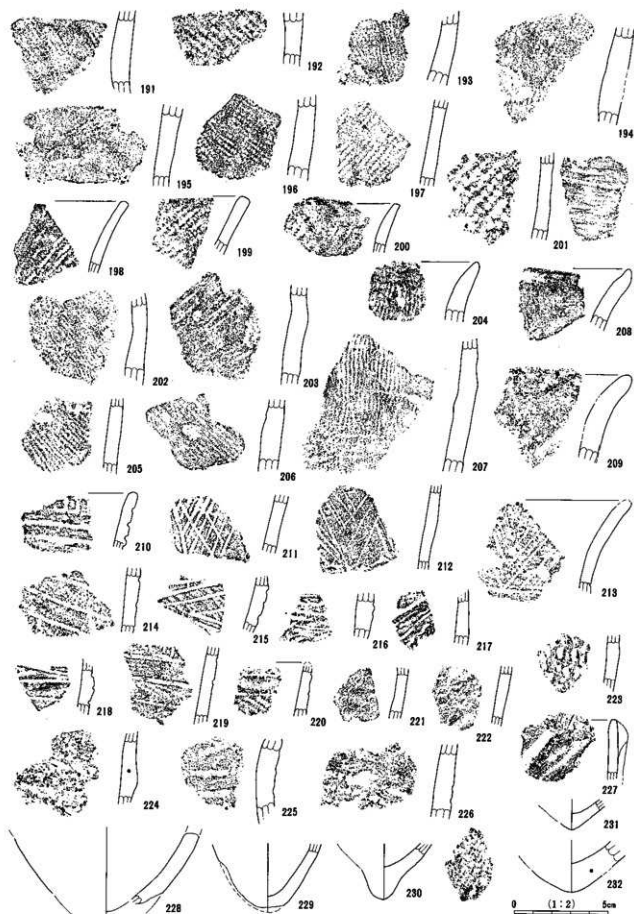
胎土に砂を含むが、研磨によって器面は平滑に仕上げられ、焼成の良い土器である。

252は口縁の屈曲部に刻みを施す隆帯が巡って狭い文様帯を画し、楕円文が配される。文様の接点には貼付文がある。253は平行沈線間に列点を施す。254は彫刻的な工字文をもつ。255・256はおそらく半載竹管によると思われる横位の条痕文を施される。257~264は無文土器である。259は薄手の口縁部で小形器種と思われる。その他は深鉢か甕であろう。いずれも内外面に横へラミガキが施される。

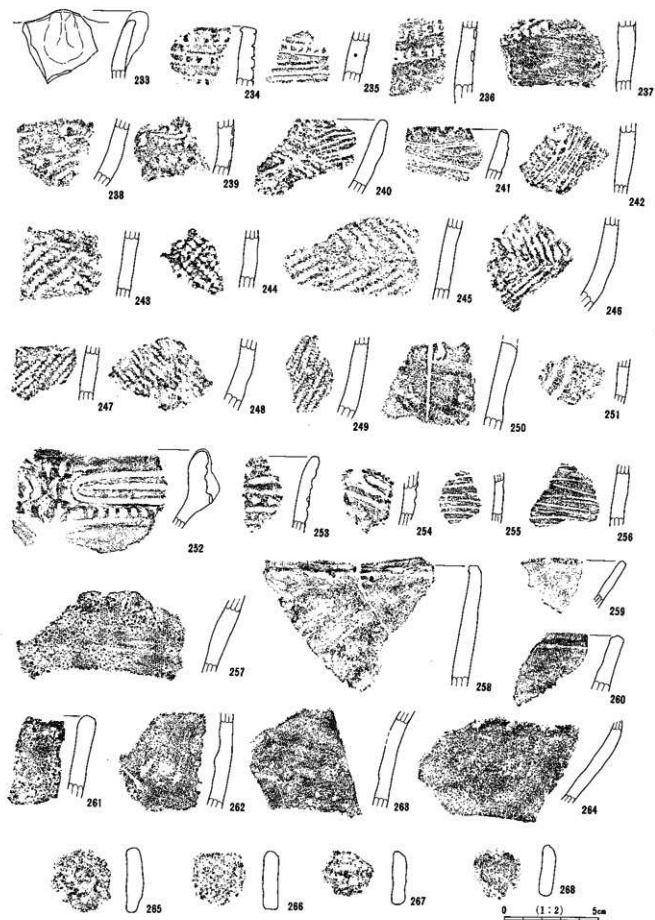
252は晩期初頭、253は佐野Ib~II式、254は佐野II式から女鳥羽羽段階、255・256は晩期終末と思われる。無文土器はいずれの時期か明確にできない。

土製円板 (第23図265~268, PL12)

図示した4点が出土した。265は直径3.2cm、268は2.6cmを測る。267は一部が欠損する。いずれも周縁を打ち欠いただけで、研磨されてはいない。266は縄文を施され、ほかは無文である。胎土は第I群第4類Bに近いが、縄文早期の土製円板は例が少なく、時期比定には不安がある。



第22図 縄文土器拓本図(6)



第23圖 縄文土器拓本図(7)

⑤ 第I群土器の編年的位置付け

第II～VII群土器は出土量が少ないため、ここまでの資料説明の中で型式比定してきた。出土土器の大部分を占める第I群土器については、押型文の各種類と捺糸文・縄文に分類したが、これらは複数の型式を含んでいるため、ここで整理しておく。

②でふれたとおり、第1類a種の格子目押型文土器は胎土がきわめて特徴的で、摩滅して文様が不明でも識別が可能である。SB01出土土器は、わずかに第1類d種の楕円文が混在するものの、これを除けば胎土が共通の格子目押型文土器と第2類捺糸文・第3類縄文施文土器のうちa種という構成を示す。これらの土器群は器壁の厚さや口縁部の形態も共通するため、遺構一括の共伴資料として、第1類a種・第2類・第3類a種の同時性の指標となる。さらに、胎土と形態に同じ特徴をもつ第1類b種のネガティブ楕円文、c種山形文のうち、113を同時期としてまとめることができる。この一群に共通の胎土・形態と文様の種類は、すべて立野式が具備するものである。また、便宜的にb種に含めて説明した112は、一部が立野式と並行関係にあるといわれる大川式の頸部の刺突文に通ずる。

第1類c種の山形押型文は、113を除けばおおむね楕円式に比定される。この中で、薄手で黒鉛を含む可能性を指摘した126・128は搬入品かと推定される。また、第3類b種の縄文施文土器は形態的特徴と同じくするため、楕円式に伴うものであろう。

第1類d種の楕円押型文はおおむね細久保式に比定される。ただし、c・d類については胎土に明瞭な違いがないことと、小破片のため全体の文様構成が不明なことから、押型文の種類のみで楕円式・細久保式と断定するわけにはいかない。

第I群とした押型文系土器は、以下のとおり立野式・楕円式・細久保式の3型式に比定される。ここで第I群土器の約半数に上る第4類無文・不明Aを加味すれば、本遺跡の押型文系土器の7割強を立野式が占め、第4類Bを含めた残りの半分量ずつを楕円式・細久保式が占めるものと推定される。

立野式の編年的位置は今日でも不確定のうえ、従来から長野県では中南信に分布が偏ると見られてきた。北信地域で本遺跡ほど立野式を出土した例はなく、文様のバラエティーとその構成比にきわだった特徴を指摘することもできる。第5節では既知の立野式の資料と比較しながら若干補足する。

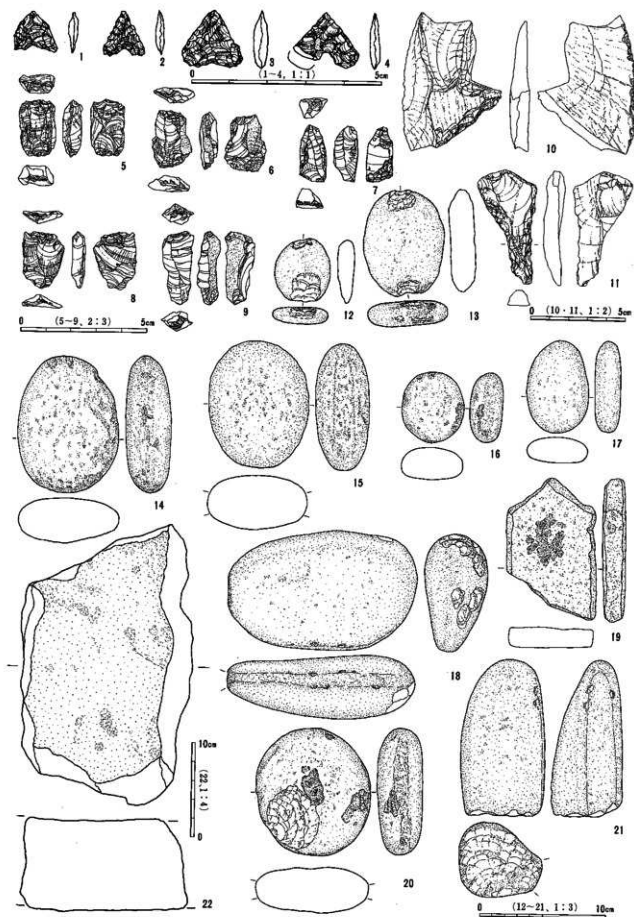
(2) 石器

① 概観(第7表)

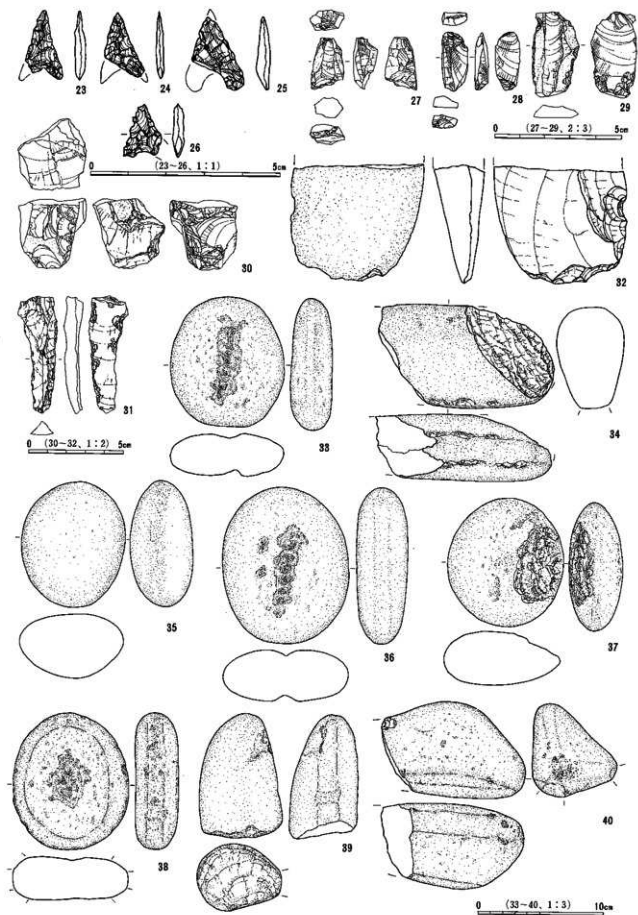
調査で出土した石器は、合計6,106点におよぶ。このうち5,343点は石器製作に伴って石屑としてはじき出された資料、763点が道具と認識できた石器である。道具としての石器の内訳(第7表)は、402点(52.7%)が狩猟活動を担う石鏃と石槍、調理・加工具のうち動物質食料にかかわるとされる刃器・石匙・大形刃器・礫器が134点(17.6%)で、これらを合わせると70.3%を占める。一方、植物質食料の採集および調理・加工にかかわるであろう打製石斧・台石・磨石類・特殊磨石・スタンプ形石器の合計は187点(24.5%)で、そのほかに漁労具といわれる石鏟が23点(3.0%)、材木の伐採、道具の加工具の磨製石斧・

第7表 石器組成表

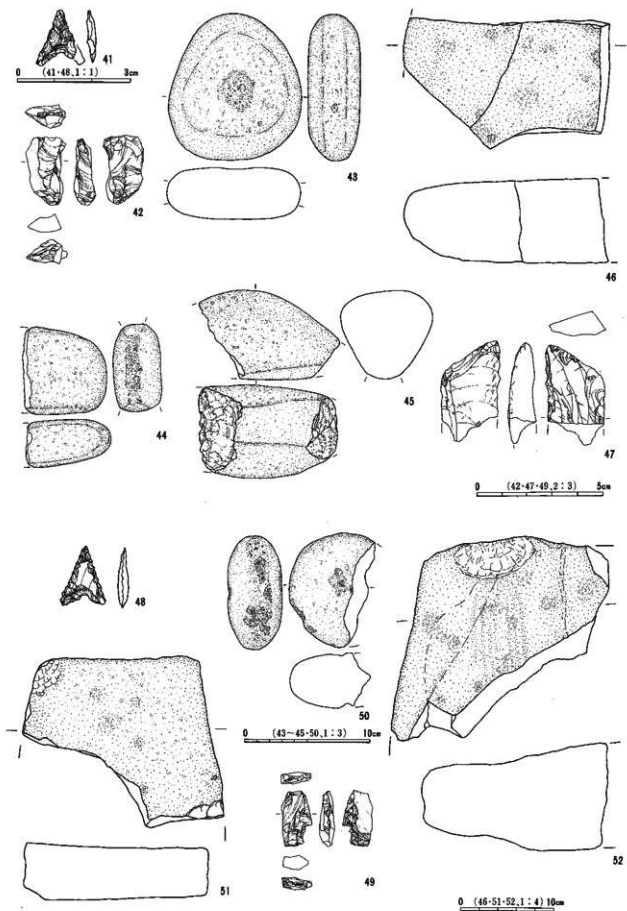
種別 (%)	狩猟具 52.7%			調理・加工具 40.6%								加工具 2.2%			
	石鏃	石槍	石鏟	打製石斧	台石	磨石類	特殊磨石	スタンプ 形石器	礫器	大形刃器	石匙	刃器	磨製石斧	石鏟	砥石
点数 計763	396	6	23	11	10	101	49	16	7	23	5	99	10	4	3
(%)	51.9%	0.8%	3.0%	1.5%	1.3%	13.2%	6.4%	2.1%	0.9%	3.0%	0.7%	13.0%	1.3%	0.5%	0.4%



第24図 遺構出土石器実測図(1) (S B01)



第25圖 遺構出土石器実測図(2) (S B03)



第26圖 遺構出土石器実測図(3) (41-46: S K01, 48-52: S K02, 47: S K11)

石錐・砥石が合計17点(2.2%)となる。刃器には植物質食料や道具の加工に用いられたものも当然あろうが、狩猟による食糧生産活動にかなり比重のかかった組成を示している。前項で述べたとおり、出土した縄文土器の約90%が押型文土器で、そのうち70%前後を立脚式が占めているため、石器群の主体も該期にあると見られる。

以下に出土資料を報告するが、記述は材質・製作法・形態的分類・数量・法量・遺存(欠損)状態の各項目についてふれることにする。分布については、縄文土器と同様に遺構のほかはトレンチおよび地区で取り上げられているため、特に偏在傾向は指摘できず記述は略した。

② 原石・石核 (第25図30、第28図53~63、第38図153、第8・9表、PL13・14・16)

原石は剥片生産に供される原材料で、剥離作業を一度も行われていない石材である。自然面(風化面)に覆われた転石で、黒曜石7点を数える。法量の平均値は長さ3.5×幅2.3×厚さ2.7cm、重さ13.6gである。形態には規則性がない。53は48.1gと大きく、角柱状を呈する。このほかに無加工の水晶8点が出土し、搬入された可能性があるが、重さの平均値が3.8gと軽く、製品としての石器が見られないため、原石とは認め難い(第27図)。

石核は剥片の剥離生産に供される石材で、1回以上の剥離作業が行われた痕跡を認めるものである。総

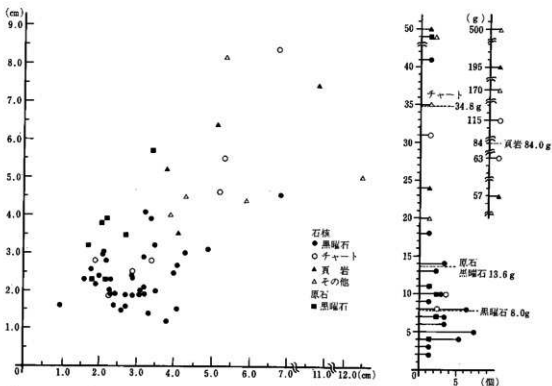
第8表 石屑集計表

種別	石質	母岩			合計
		黒石	石核	石屑	
点	黒曜石 (%)	36	4451	155	4642
		60.0%	86.9%	95.7%	86.9%
	その他 (%)	7	670	7	701
		40.0%	13.1%	4.3%	13.1%
数	小計 (%)	7	5121	162	5343
		1.1%	95.9%	3.0%	100%

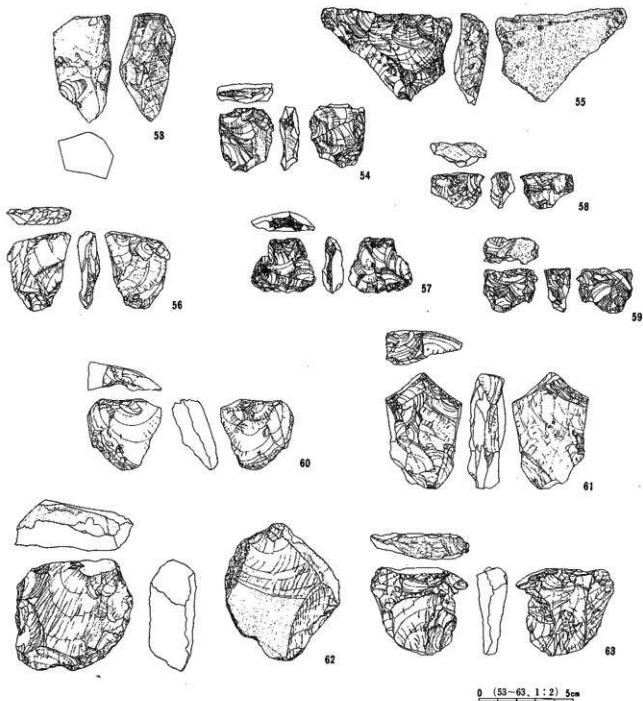
第9表 石核属性表

(合計 53点)

チャート				黒曜石				頁岩				その他				原石									
長さ	幅	厚さ	重さ	長さ	幅	厚さ	重さ	長さ	幅	厚さ	重さ	長さ	幅	厚さ	重さ	長さ	幅	厚さ	重さ						
(cm)	(cm)	(mm)	(g)	(cm)	(cm)	(mm)	(g)	(cm)	(cm)	(mm)	(g)	(cm)	(cm)	(mm)	(g)	(cm)	(cm)	(mm)	(g)						
4.1	4.0	1.6	34.8	2.4	2.0	1.3	7.8	5.6	7.2	2.7	84.0	4.3	4.1	2.3	33.0	6.6	8.9	4.1	30.5	2.4	4.4	5.9	2.6	19.0	1



第27図 原石・石核法量相関図



第20図 原石・石核実測図

数53点が出土し、石質の内訳はチャート7点、黒曜石36点、頁岩4点、めのう2点、泥岩2点、珪質岩1点である。法量の平均値は第10表のとおりで、最も多数出土した黒曜石は平均重量7.8gを測り、チャート34.8g、頁岩84.0gなどと比較してかなり軽量である。剥片剥離は自然面または節理面を打面とし、次の2種の方法で行われる。打面を作り出すものは少ない(61)。

第1種—原石から直接剥片剥離を行うもの(30?・55・58)。

第2種—原石または石核から厚手の剥片を剥離し、これを石核として素材剥片の剥離を行うもの(54・56~63・153)。62は大形刃器の可能性もある。

打面は90度または180度に転移し、2面または3面である。打面転移に伴う作業面の拡大は、石核の表裏2面に限定され、剥離回数はいずれも10回を下回る。

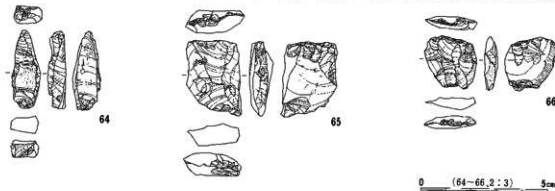
③ 剥片・破片 (第24図5～9、第25図27・28、第26図42・49、第29図64～66、第8・10・11表、PL13・14)

剥片剥離作業において産出され、道具として加工可能な条件を備えた資料を「剥片」とし、これが剥離される過程で産出された道具の製作に不適な資料、すなわち、文字通りの石屑を「破片」とする。このうち両極剥離痕を有する剥片をA類、石鏃や刃器製作に関する素材用剥片をB類として抽出した。剥片A類については石核または楔としての位置付けも可能であり、形態分類してグラフ・属性表を作成した。

剥片A類は総数162点を数え、石質の内訳は黒曜石155点を他を圧倒し、チャート4点、頁岩3点である。黒曜石の法量平均値は、長さ2.0×幅1.3×厚さ0.6cm、重さ1.5gである。長幅比は1:1から3:1の範囲に集まる。上下両端部の形態は面・線・点状に3大別でき、使用後の形状変移はこの組み合わせにより、次のように類別した(第30図)。

I類一面と面、II類一面と線、III類一面と点、IV類一線と線(6・9・27・28・42・49・65・66)、V類一線と点(5・7・8・64)、VI類一点と点。黒曜石材はこの6類すべてが見られるが、IV類が85点と過半数を占め、II・V類がこれに次ぎ、その他の3類は少数である。法量ではII・III・IV類が幅・重さで他を上回るほかに差がない。

剥片B類は総数165点を数え、石質の内訳は黒曜石104点、チャート44点、頁岩12点、めのう1点である。法量平均値は、黒曜石は長さ2.3×幅2.2×厚さ0.5cm、重さ2.5g、チャートは2.9×3.1×0.7cm、6.0g、頁岩は3.1×3.2×0.7cm、6.9gを割り、チャートと頁岩が近似した数値を示して黒曜石を上回る。長幅比



第29図 剥片実測図

第10表 剥片A類属性表

(合計 162点)

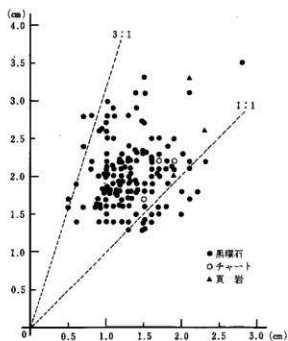
平均値	法量(全体値)				計上数	総数	法量(全体値)				計上数	総数	法量(全体値)				計上数	総数
	チャート						黒曜石						頁岩					
	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
I	—	—	—	—	—	1.9	1.3	0.5	1.2	1	1	2.6	2.3	1.1	7.6	1	1	
II	—	—	—	—	1	1.9	1.4	0.7	1.8	33	25	—	—	—	—	—	—	
III	—	—	—	—	—	2.0	1.4	0.8	1.7	4	4	—	—	—	—	—	—	
IV	2.0	1.7	0.7	2.0	3	2.0	1.4	0.6	1.6	76	83	2.7	2.0	0.7	3.4	2	2	
V	—	—	—	—	—	2.2	1.2	0.6	1.2	31	31	—	—	—	—	—	—	
VI	—	—	—	—	—	2.1	0.9	0.6	1.2	9	11	—	—	—	—	—	—	
全体	2.0	1.7	0.7	2.0	3	4	2.0	1.3	0.6	1.5	144	155	2.6	2.1	0.8	4.8	3	

第11表 剥片B類属性表

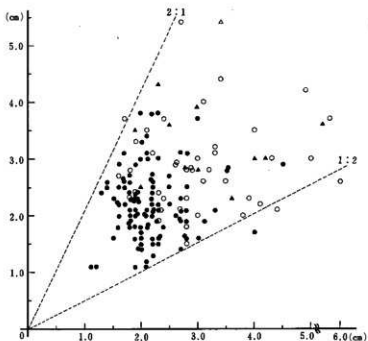
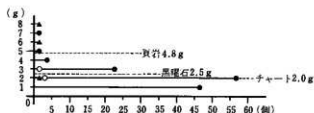
(合計 165点)

チャート				計上数	黒曜石				計上数	頁岩				計上数	めのう				計上数
長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
2.9	3.1	0.7	6.0	44	2.3	2.2	0.5	2.5	104	3.1	3.2	0.7	6.9	12	5.4	3.4	0.8	16.9	1
総数 45					総数 104					総数 15					総数 1				

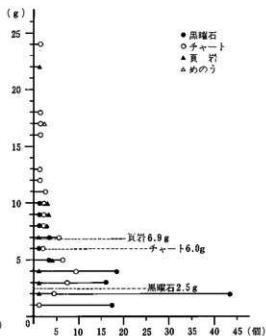
は2:1から1:2の範囲にあり、黒曜石は長さがややまさり集中的傾向を示すのに対して、チャート・頁岩は分散的である。重さも同様である。このことは黒曜石が石鏃に主体的に用いられ、チャート・頁岩などが刃器類に用いられることと関連するのであろう。なお、本遺跡出土石器のうち、利器の石材利用状況を、原石・石核・剥片の総点数の比較からうかがうと、黒曜石が86.9%で地元産のその他の石質を大きく上回る。この占有率は石鏃に占める黒曜石の割合ときわめて近い。ただし黒曜石の石屑は小形のため、重量比較では異なる結果となる(第31図)。



第30図 剥片A類法量相関図



第31図 剥片B類法量相関図



④ 石 鏃 (第24図1~4、第25図23~26、第26図41・48、第32~34図、第12表、PL13~15)

製品300点・失敗品96点、総数396点を数える。石質は黒曜石343点(87%)、チャート44点(1%)、その他9点(2%)と、黒曜石が圧倒的である。後述の各分類と形態不明品、失敗品いずれについても石材利用状況には差がない。

製品について形態分類できたのは183点で、無茎のI類が181点、有茎のII類が2点(116・117)である。基部の形態に着目してI類を以下のように大別した。

I A類—平基を呈するもので、35点を数える(71~78)。

I B類—凹基を呈するもの。基部のえぐりが浅く、全長の5分の1以下のものをB I類とする。55点を数える(1~4・23~26・41・48・67・70・79~90・92~100)。えぐりが深く全長の5分の1を超えるものをB 2類とする。91点と約半数を占める(25・68・69・91・101~110・112~115)。

以上の3類の法量の平均値は第12表のとおりで、I A類はやや大形で厚く著しく重い。この数値は失敗品1・2にきわめて近似し、I A類自体に失敗品が含まれていることを暗示しているだろう。I B 1類と2類には法量に全く差がないといってもよい(第33図)。

これらについて、さらに部分的な特徴に目を向けると、脚部の形態は先端が尖るX(1・23・26・41・67・71・73・77~81・85~90・93~95・97・98)、丸みをもつY(2~4・25・68・74~76・82・91~92・96・99・101・105・106)、角ばるZ(41・48・69・70・83・84・102~104・107~115)の3種に大別できる。また、

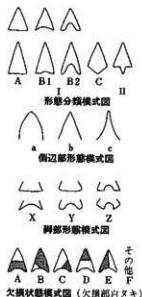
側縁部の形態には、外湾するa(1・73~75・80・89~91・101~106・109・112)、

内湾するc(81・83・95~98・113~115)、直線的なb(a・c以外)の3種がある。

さらに各類とも長身の形態と正三角形に近い形態があり、長幅比は3:2から1:1の範囲に集まる(第33図)。以上の諸特徴の組み合わせを見ると、いずれの類でも側縁部形態はb種が60%前後を占めてa・c種の順となる。脚部形態では、I A・B 1類ではX種が約半数を占め、Y・Z種の順となるが、I B 2種はZ種が半数、X・Y種が残りの半数ずつと、やや違った傾向を示す。特にI B 2種は形態のバリエーションが多く、特徴的なものとして注意される。製作技法上の特徴として、研磨を施すもの(67~70)、鋸歯縁を呈するもの(111)がある。

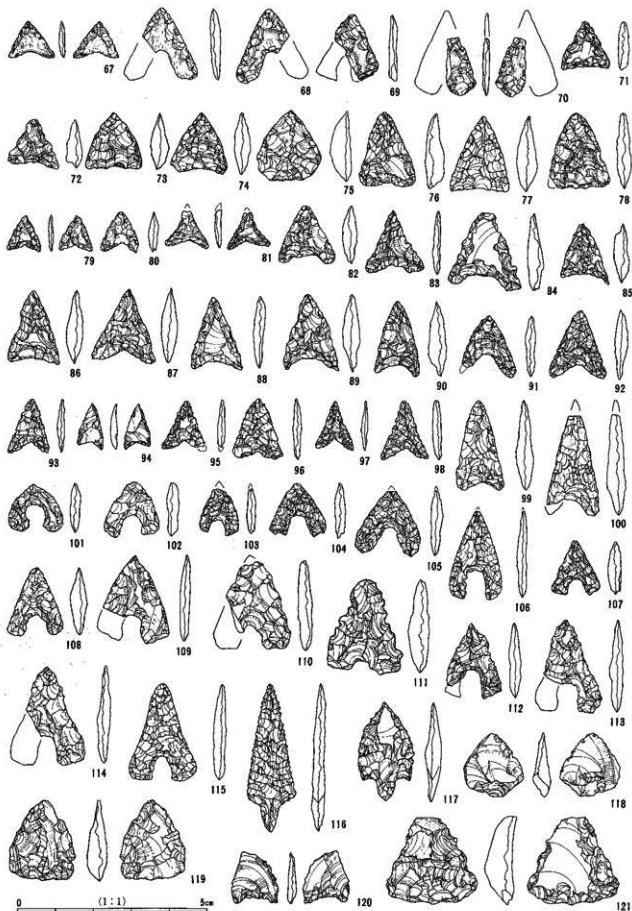
欠損状態は、いずれも脚部的一端あるいは両端が欠損するBが60%前後と最も多く、先端を欠損するAが20~30%でこれに次ぐ。左右半分が欠損するEはI B 2類のみ15%を占める。

形態分類から除外した資料に、製作途中の失敗品あるいは未製品と見られる例

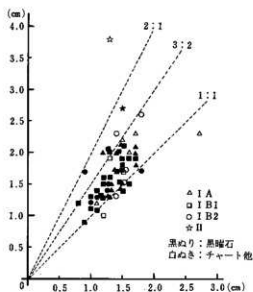


第12表 石鏃属性表

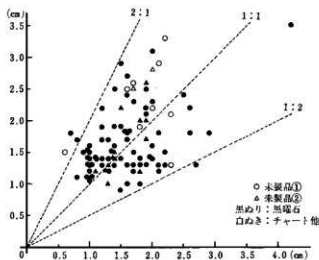
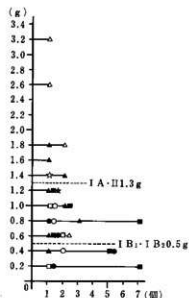
類別	法量(平均値)				計上数	脚部形			側縁形			欠損状態						石質				総数	
	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		X	Y	Z	a	b	c	A	B	C	D	E	F	黒曜石	チャート	ホルンシス	その他		
I A	1.8	1.5	0.5	1.3	18	18	16	1	14	20	0	5	12	1	0	1	0	29	4	0	2	35	
I B ₁	1.6	1.3	0.3	0.5	26	26	15	11	14	35	5	11	21	0	1	0	0	50	3	0	2	55	
I B ₂	1.6	1.4	0.3	0.5	12	19	20	40	23	43	10	19	52	11	0	15	0	77	12	0	2	91	
I C	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
II	3.3	1.4	0.4	1.3	2	2	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2	
不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	19	27	16	11	9	3	61	10	0	1	72
失敗品①	1.7	1.6	0.4	1.3	81	—	—	—	—	—	—	—	7	11	2	1	2	100	13	0	1	114	
失敗品②	1.7	1.6	0.4	1.2	15	—	—	—	—	—	—	—	3	7	0	0	2	25	1	0	1	27	
合計					154													343	44	0	9	396	



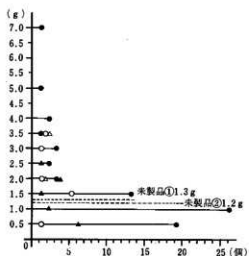
第32図 石鏃実測図



第33図 石鍔法量相関図(1)



第34図 石鍔法量相関図(2)



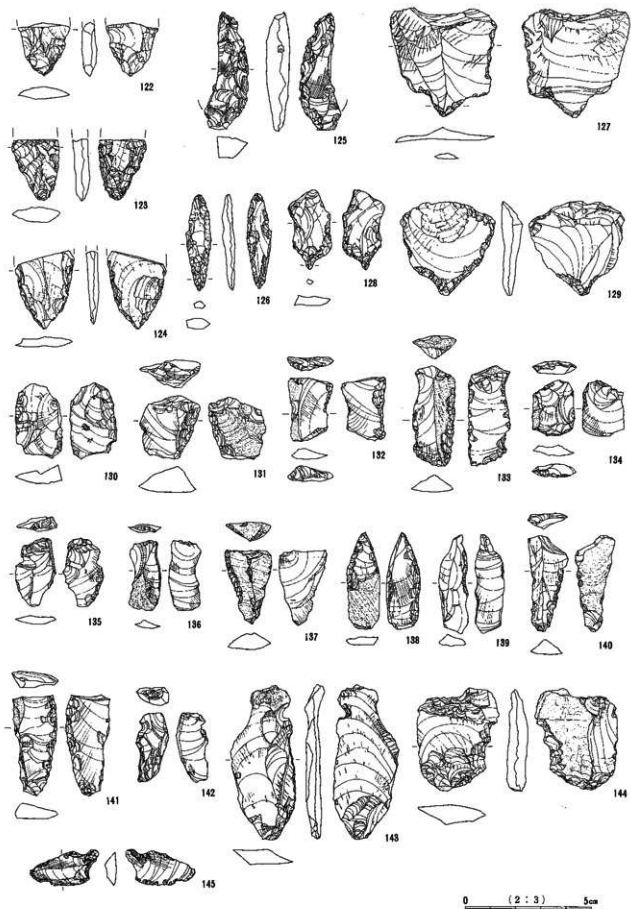
がある。素材剥片の全体成形時にとどまるものを失敗品 1 (118・120・121)、成形後、基部の意識的作り出しのある資料を失敗品 2 (119) とした。長幅比は 2 : 1 から 1 : 2 の範囲にばらつき、製品と比較して幅が広い傾向がある (第34図)。このことから、逆に製品の長さは素材の長さに規定されると推定することができるかもしれない。

⑤ 石 槍 (第35図122~125, PL15)

6点出土した。石質は黒曜石 2点 (125・123)、チャート (122)・頁岩 (124)・安山岩・不明各 1点である。すべて欠損品で、法量は不明である。図示した 4点は木葉形を呈するらしく、125は0.9cmと厚く、現存長4.7cmを測る。122~124は幅1.9~2.4cm、厚さ0.4~0.6cmを測る。第1次剥離面を残し、周縁に比較的急角度の剝離を施す。

⑥ 石 錐 (第35図126~129, PL15)

4点出土し、すべて図示した。石質は126・127がチャート、128・129が頁岩である。127~129は剥片素



第35圖 石槍・石錐・石匙・刃器実測図

材の形態をとどめ、機能部分のみ加工して三角形の短い錐部を作り出す。126は素材全体を加工して柳葉形に成形し、基部と先端部の区別がない。第24図11は刃器としたが、石錐の可能性もある。

⑦ 石 匙 (第35図143~145、PL15)

刃器のうち、つまみ部を作り出すものを石匙とした。5点出土したが、明確なつまみ部をもつものはないため器種の認定に疑問が残り、後述の刃器に含めるべきかもしれない。石質は黒曜石(145)・チャート(144)各2点、珪質岩(144)である。143は縦形で、縦長剥片の打点側を刃先とし、1個縁に微細な剝離痕がある。つまみ部はほとんど加工しない。144は短めの縦長剥片の上下端を加工し、刃縁に対して斜めにつまみ部を作る。ただし、刃部を加工しない。145は縦長剥片の両個縁を細かく剝離して、小さな縦形のつまみを作る。

⑧ 刃 器 (第24図11、第25図29・31、第26図47、第35図130~142、第38図146~150、第36・37図、第13表、PL13~15)

切削具と思われる刃部を有する石器のうち、つまみ部がなく、小形で鋭利なものを本稿にまとめた。99点を数える。調整剝離して刃部を作り出すもの(第2種、スクレイパー)と、刃つぶれ・刃こぼれなどの微細剝離痕があるもの(第1種、使用済ある剥片・石屑)の2種類を含む。石質の内訳は、2種では黒曜石10点、チャート3点、頁岩4点、ホルンヘルス1点、不明5点、1種では黒曜石67点、チャート4点、頁岩3点、メノウ1点、不明1点である。

第1・2種について刃部の位置・形態から分類すると、次の3類が見られる。

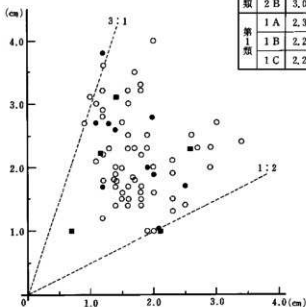
A類—素材の長辺に平行する、緩斜度の刃部をもつもの。第2種ではサイド・スクレイパー。

B類—素材の長辺に直交する、急斜度の刃部をもつもの。第2種ではエンド・スクレイパー。

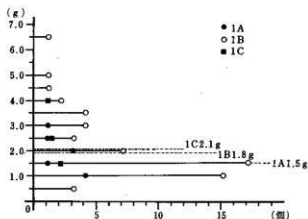
C類—挿入状の刃部をもつもの。

第13表 刃器属性表

種 類	法 益 (平均値)				計 上 数	刃 部					総 数				
	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		刃角 (度)	刃長 (cm)	刃幅 (cm)	平面形			断面形			
									外	内					
第2種	2A	4.1	2.1	0.7	6.5	14	37	3.8	0.4	2	12	3	9	7	18
	2B	3.0	3.2	0.8	12.9	3	64	2.7	0.2	1	2	1	3	1	5
第1種	1A	2.3	1.7	0.5	1.5	10	39	1.4	0.1	—	—	—	—	—	12
	1B	2.2	1.8	0.6	1.8	58	45	0.9	0.3	—	—	—	—	—	60
	1C	2.2	1.8	0.7	2.1	4	40	0.7	0.2	—	—	—	—	—	4

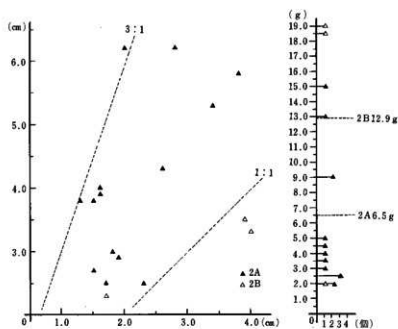


第38図 刃器1類法量相関図



以上の種・類に基づいて分類し、法量と刃部の諸特徴を集計したのが第13表である。

第2類では、A種が18点(11・31・47・130・133・135・138・140・141・149・150)と78%を占め、B種が5点(134・146・148)で、C種は見られない。刃部は素材の1辺にある単刃(47・130・131・134・135・137・140・141・148・149)がやや多く、2辺にある複刃(11・132・133・138・146・147・150)も見られる。刃部の平面形は直刃が一般的で、外湾刃(134・135・138)、内湾刃(11・146)も少数見られる。法量の平均



第37図 刃器2類法量相関図

値では、A種が長身で軽量なのに対して、B種は長さ・幅が等しく重い特徴が見られる。刃角はA類37度、B類64度とかなり開きがあり、刃長・刃幅ともA類がB類を上回る。刃付け(刃部断面形)は両刃より片刃がやや多い。

第1類では、A種が12点(136・139)で15.8%、B種が60点(29・142)で79%に上り、C種も4点見られる。第2種と異なってB種が多数を占めるのは、刃部の位置よりも刃部角が急斜度の点を重視して分類したため、素材の長辺を刃部とするサイド・スクレイパー的な資料が多いことは変わりが無い。法量の平均値ではA・B種に差がない。第2種と比較すると、刃角はA類39度、B類45度と第2類ほどの開きはなく、長さ・幅と刃長は第2種よりかなり小さい。

前項で石匙とした143は第1類A種、144は第2類B種の複刃と見ることもできる。

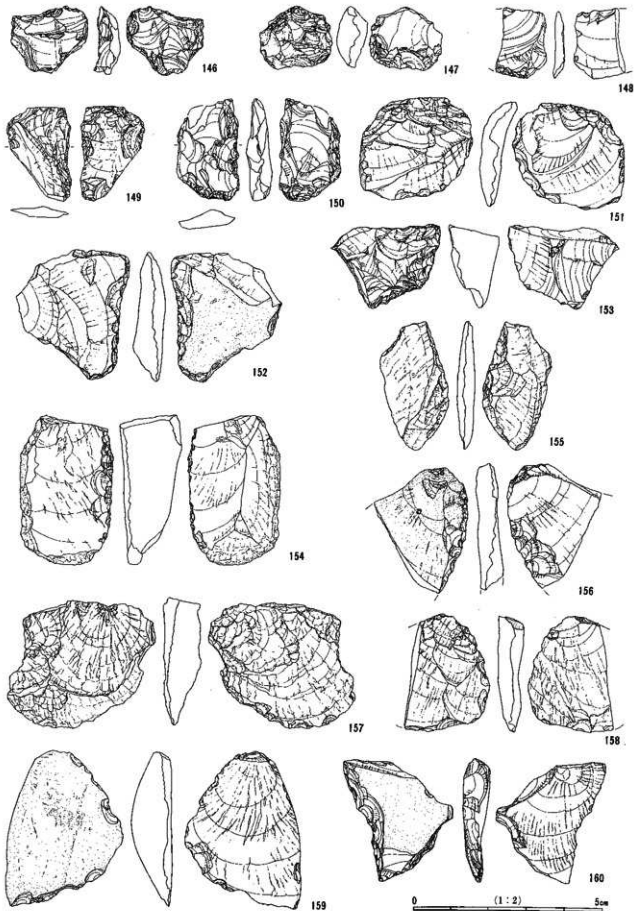
⑨ 大形刃器 (第24図10、第38図151・152・154~160、第39図、第14表、PL13~16)

「刃器」より粗大で、礫器に近い鈍重な刃部を有する剥片素材の石器をまとめた。23点を数え、石質は頁岩を主体に泥岩・砂岩の堆積岩を用い、安山岩も少数見られた。素材剥片は横長あるいは長さ・幅が等しいものが多く、形態はさまざまである。「刃器」のA・B種に従って刃部の位置に着目すれば、A種は7点で10・154・155が該当し、その他の12点はB種に近い。A・B種の法量平均値に大差は見られないが、B種が重く刃角が急角度である。刃部の平面形は外湾刃が比較的多く(151・156~159)、断面形は片刃・両刃両にあるが、10・152・156・160以外は刃部を作り出したというより、打撃による剥離痕のようである。

本書では法量の違いから「刃器」と仮に区別して記述してきたが、分類に迷うものもある。大形刃器は著しく重いこと、鋭利な刃部を作り出せない石材を用いることから、手

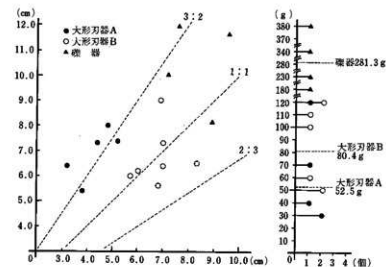
第14表 大形刃器・礫器属性表

器種	類	法 量 (全体側)				計 し 数	刃 部						総 数		
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		刃角 (度)	刃長 (cm)	刃幅 (cm)	平面形		断面形			
										外	内	片		両	
礫器		10.4	8.3	5.2	281.3	4	71.9	5.6	1.7	6	1	5	2	7	
大形 刃器	A	6.9	4.3	1.7	52.5	5	48.0	5.0	1.2	2	3	1	3	2	7
	B	6.7	6.0	1.9	80.4	7	62.9	5.6	0.8	6	2	1	5	4	12
	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4



第38圖 大形石器実測図

の運動による切る機能ではなく、腕の振りを伴って対象物を敲き切るような機能が想定される。大小の差だけでなく、刃器とは異なる器種として扱う必要があろう。



第39図 大形刃器法量相関図

⑩ 礫器 (第39図、第40図161~166、第14表、PL16)

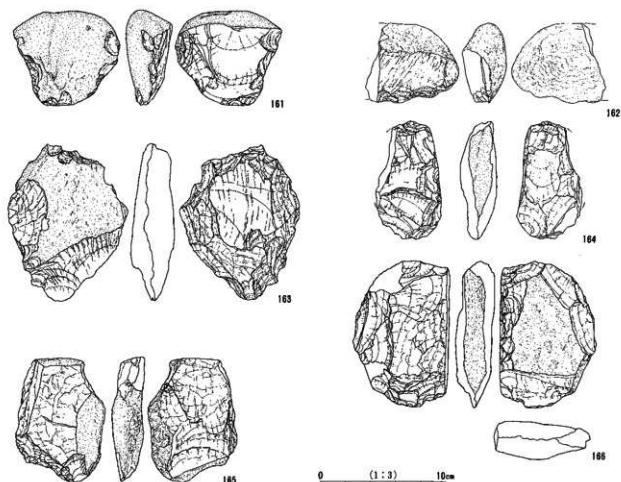
7点出土し、石質の内訳は頁岩3点、粘板岩?・安山岩・桑原火山岩・不明各1点である。定義どおりなら礫を素材とするものに限定されようが、ここでまとめたものは自然面を半分程度(161~163)、あるいは部分的に残す(164・165)とはいえ、素材礫の半分以下の厚手の剥片に鈍重な刃部を有するものである。法量の平均値は「大形刃器」を上回って特に厚く、4点の平均とはいえず重さは281.3gを測る。図示したものは165が180gと最も軽く、166は340gを測る。刃角は71.9度と急角度で、刃部形態は片刃の外湾刃が卓越する。刃部は素材の最も薄い縁辺をほとんど加工せず、使用によると見られる剥離痕を残す。第43図187は石錘の一端、195は鋼縁を剥離加工しており、石錘を礫器に転用したものである。「大形刃器」と共通の石材を用いて鋭さに乏しい外湾刃を備え、重量を生かした打撃力で対象物を敲き切るような機能が推定される。

⑪ 打製石斧 (第25図32、第42図167~170・172・176・177、PL13・16)

11点を数え、石質はホルンフェルスに近い頁岩・砂岩・緑色凝灰岩などの地積岩である。8点は欠損品で、平均法量は明らかにできない。図示した資料も167以外は欠損しているが、側縁は直線的で刃部側がわずかに広がる楕形と推定される。32・167は片面に自然面を残す横長剥片、168・169は扁平な礫を素材とし、未製品の可能性がある。170は刃部に縦方向の線状痕が見られ、片面が顕著である。177は幅8.3cmと大形で厚く、基部の中央に縦方向の線状痕がある。側縁はわずかに内湾し、縄文時代後・晩期の分銅形打製石斧の可能性はある。

⑫ 磨製石斧 (第42図171・173~175、PL16)

10点を数え、主に蛇紋岩を用いるが、砂岩(173)・緑岩凝灰岩(174)のほかヒスイ(171)・緑色片岩(175)といった糸静線以西に産する石材も見られる。図示したものを以外は小破片である。171は斜刃を呈する刃部である。174は小扁平礫をわずかに研磨し、一端に剥離痕を残す。173は短冊形を呈して厚みがあり、剥離成形の後に刃部側を研磨して直刃を作り出す。175も同様な成形法である。



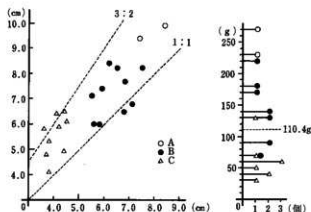
第40図 礮器実測図

⑬ 石 錘 (第24図12・13、第41図、第43図178~195、第15表、PL17)

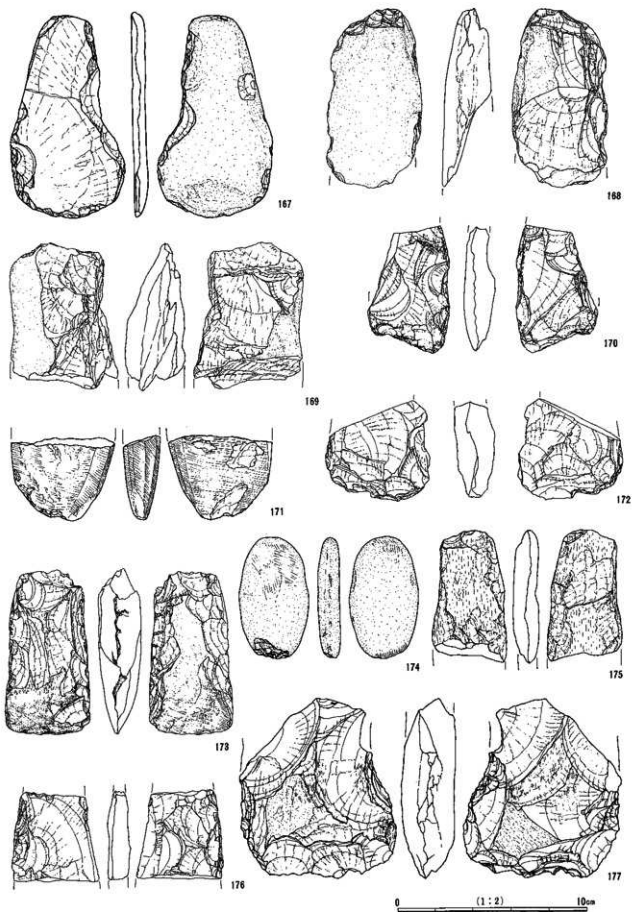
23点出土し、石質はすべて安山岩である。扁平な円礮を素材とする打ち欠き錘で、長幅比は3 : 2から1 : 1の範囲に集まる(第41図)。法量分布から大・中・小の3種程度に分かれる(第15表)。大は平均重量250.0gを測り、3点(187・194・195)ある。このうち187・195は側縁を剝離して礮器に転用する。中は132.4gで10点(13・185・186~193)ある。小は55.1gで10点(12・178~184)で、長身のものが多い。

第15表 石錘属性表

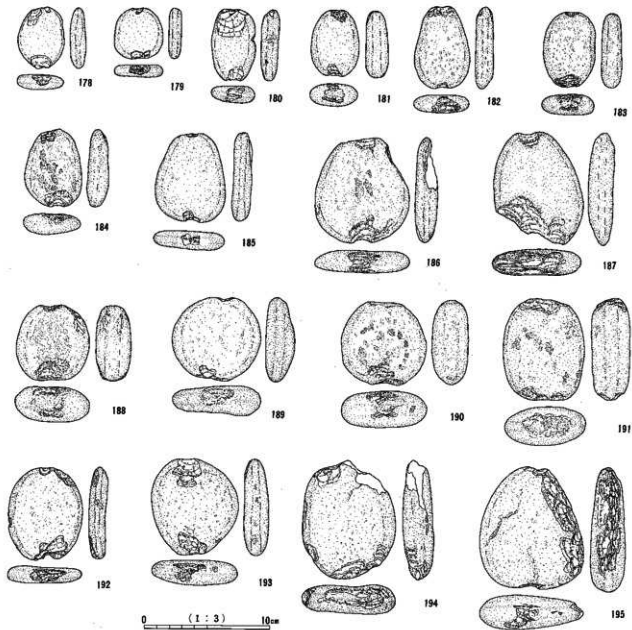
大きさ	法量(全体値)				計上数	欠損状態		総数
	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		完形	%	
A	9.7	7.9	2.7	250.0	2	2	1	3
B	7.2	6.4	2.1	132.4	10	10	0	10
C	5.5	4.1	1.6	55.1	9	9	1	10



第41図 石錘法量相関図



第42図 打製石斧・磨製石斧実測図



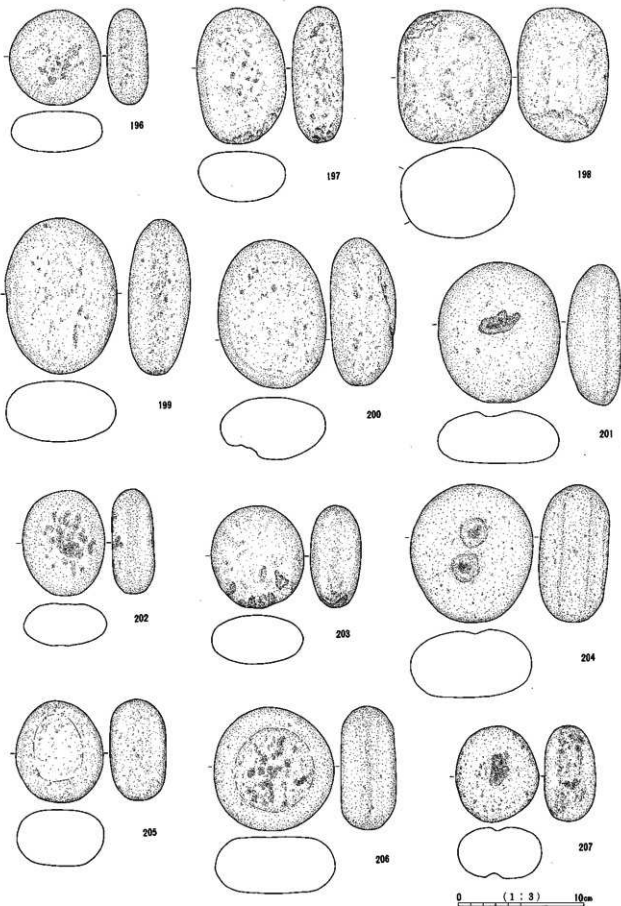
第43図 石鏃実測図

⑭ 台 石 (第24図22、第26図46・49・52、PL13・14)

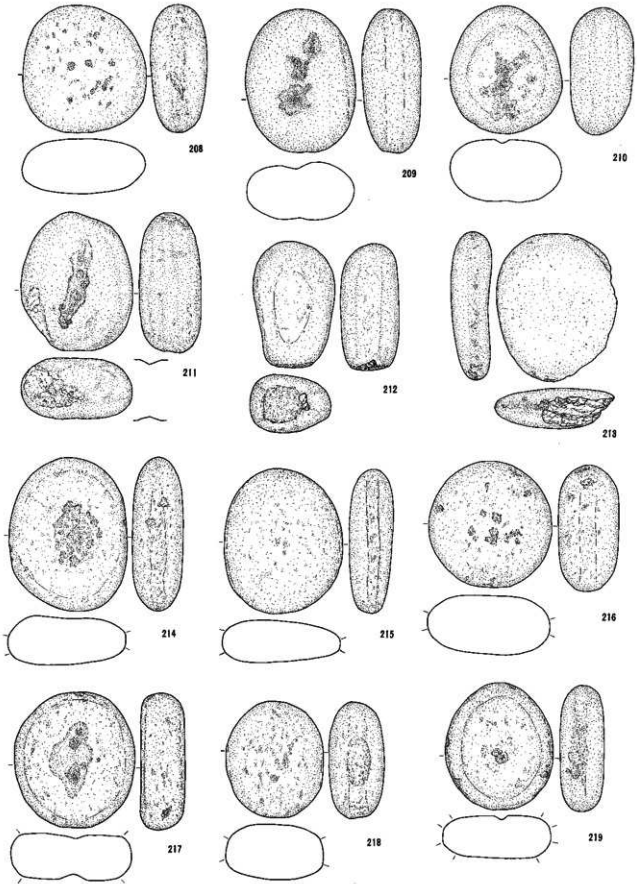
10点出土したうち、SB01 (22)・SK01 (46) から各1点、SK02から5点 (51・52) と、遺構に伴うものが多い。すべて欠損し、全体形をうかがえるものはない。大形の扁平な安山岩の平坦面が摩耗しており、いわゆる盤状石皿である。最も厚い22は厚さ10.0cm、薄い51は6.0cmを測る。51・52は平面が方形を呈するらしく、51は幅22.5cmと比較的小形である。

⑰ 磨石類 (第24図14~17・19・20、第25図33・35~38、第26図43・50、第44図196~第46図224、第47図、第49図235、第16表、PL13・14・17・18)

磨石・凹石・敲石をまとめた。摩耗面が最も一般的な使用痕跡であるが、くぼみ・敲打痕を併せもつものがかなりの比率を占めるため、くぼみ・敲打痕のみで摩耗面が見られない石器も分離せずに磨石類とし

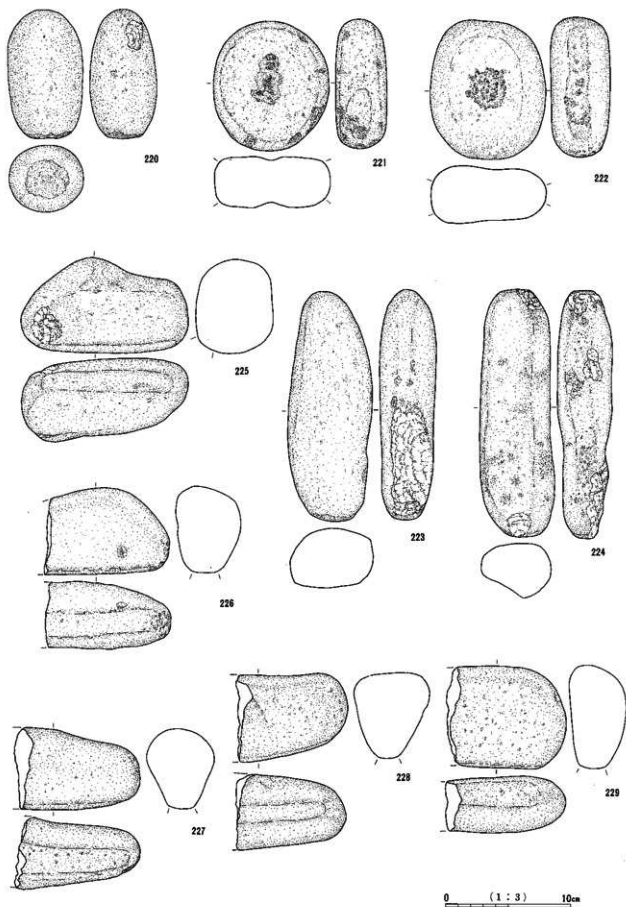


第44回 摩石類実測図(1)



0 (1:3) 10cm

第45図 磨石類実測図(2)



第46図 磨石類(3)・特殊磨石実測図

た。ただし、特殊磨石とスタンプ形石器は形態・使用痕跡が著しく異なるため、磨石類とは区別した。総数101点上り、石質の内訳は、安山岩が87点と圧倒の多数で、砂岩6点、花崗岩5点、閃緑岩・頁岩・凝灰岩?各1点である。形態・使用痕の種類により、次のように分類した。

・全体の形態 (第16表)

A類—平面形が円形を呈するもので、52点を数える(16・20・33・37・43・196・198・201・203~208・210・213・216・217・221)。

B類—平面形が楕円形を呈するもので、41点を数える(14・15・17・35・38・44・50・197・199・200・202・209・211・212・214・215・218・219・222)。

C類—棒状を呈するもので、4点を数える(220・223・224)。

D類—板状を呈するもので、4点を数える(19)。

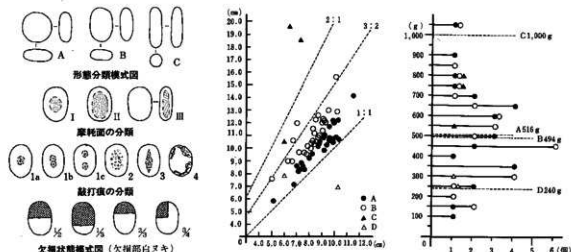
以上のうち、ほぼ同数で主体を占めるA・B類の区分は漸移的で、長幅比がより1:1に近いものがA類、より3:2に近いものがB類である(第47図)。法量の平均値では長さ・幅に大差はなく、厚さは等しい。重さは共に500g前後である(第16表)。

・使用痕の種類 (第16表)

使用痕の種類は摩耗面と敲打痕に大別した。凹凹に見られるくぼみは敲打によって形成されたと考えられるため、敲打痕の1種として分類した。また、摩耗面は2類、敲打痕は6類に細分した。第16表では側面・端部の使用痕は細分せず、1側面または1端部にある場合は1~2カ所の場合は2とした。また、資料1点について1面ごとに計上したため、使用痕の種類ごとの合計は点数ではなく面数で、個体総数を上回る。摩耗面と敲打痕およびその細分類は同じ個体で重複する例が一般的で、表面・裏面・側面・端部に異なる種類の使用痕を有する個体もある。それぞれの分類項目では、複数の使用痕をもつものでも、その個体のなかで典型的な使用痕を図化した資料を例示する。

第16表 磨石類属性表

類	法量(全体値)				計上数	摩耗面-裏				敲打痕-表				敲打痕-裏				側面・同端部				欠損状態				総数					
	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		I	II	I	II	1	2	1a	1b	1c	2	4	1a	1b	1c	2	4	1	2	1	2		3	4	5	6	
A	10.1	8.7	4.1	516	28	10	41	12	32	3	9	7	5	1	8	3	2	6	1	10	1	2	3	1	0	28	12	1	6	5	52
B	11.1	8.2	4.0	494	28	9	27	7	23	6	11	6	2	1	12	1	4	2	0	9	1	2	0	5	1	29	5	2	5	0	41
C	24.3	9.9	7.2	1,000	2	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	3	0	1	0	0	4
D	7.4	8.2	3.0	240	2	0	1	0	1	1	0	1	0	0	2	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	2	1	0	1	0	4



第47図 磨石類法量相関図

(摩耗面)

I類—使用面が表面あるいは裏面の局所的な1カ所に限られるもの。

II類—使用面が表面あるいは裏面全体に広がるもの。

摩耗面は表裏両面にあるものが多く、類別の合計はII類が125で、I類の40を上回り、表・裏面に同じ種類の摩耗面をもつものが大多数を占める。図示した資料としては両面I類は198・202・204~206・209~212・216・220、両面II類は14・15・17・20・33・35~38・43・44・50・196・197・199・201・203・208・215・217~219・221・222・235が該当する。表・裏面で種類の異なる摩耗面をもつものは2点と少ない(207・214)。以上のうち、側面にも摩耗面があるものは、1側面は10点(44・198・235)、2側面は20点(15・20・38・43・215・217~219・221・222)ある。表裏面または側面の1点のみの例は12点を数える(16・200・213)。摩耗痕のみ見られるものは38点である。

(敲打痕)

1類—小さな粒状の単位が集合してくぼみを形成するもので、39を数える。花卉状に広がり浅い1a類は21(38・201・222)、2カ所以上にわたり連結した1b類は15(20・33・36・207・211・217・221)、2カ所以上で独立した1c類は3(204・209)である。

2類—アバタ状を呈するもので、42ある(14・15・43・202・206・208・210・216)。

3類—細長い溝状のものである。該当資料が見いだせなかった。

4類—小剝離痕を伴うもので、6ある(20・37・223・224)。いずれも側縁や端部に使用痕がある。

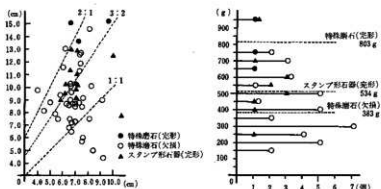
敲打痕も同じ類が表裏両面あるものが多数を占める(14・15・20・33・36・38・43・202・207・208・210・211・214・216・217・221・222)。異なる類が重複するものは少数で、1c類と2類の206、1a類と1c類の209、1a類と2類の219などがある。側縁または端部のみに見られるものには203・212・220・223・224がある。敲打痕のみ観察されるものは5点で、棒状のC類223・224、板状のD類19はA・B類とは用途を異にするものであろう。235は摩耗面とくぼみをもつが周囲の剝離痕が著しく、転用であらう。

欠損状態は、A類が完形品53.8%、

B類が同じく70.7%で、著しい差異は認められない。

⑬ 特殊磨石(第24図18、第25図34・40、第26図45、第46図225~229、第48図、第17表、PL13・18)

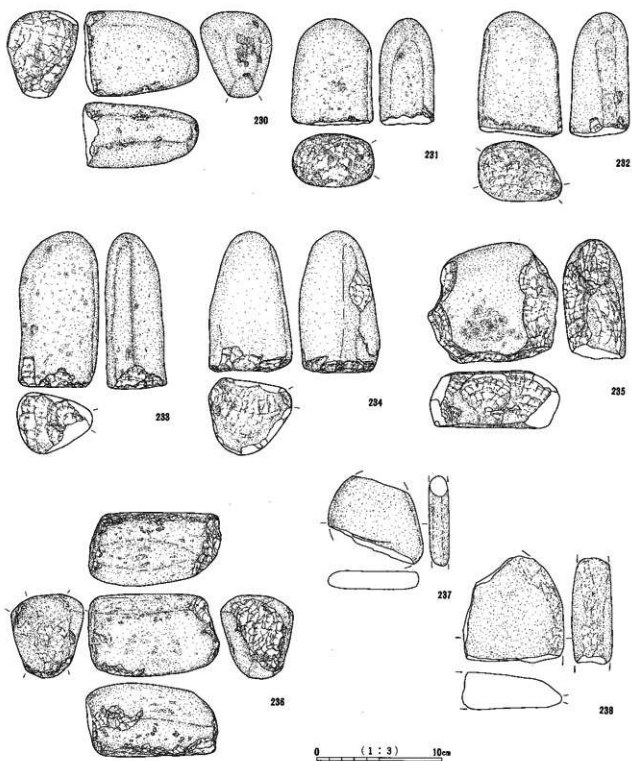
断面が三角形や卵形の長い礫の稜に摩耗面を有する石器で、磨石類とは区別した。49点を数え、石質内訳は、安



第48図 特殊磨石・スタンプ形磨石重量相関図

第17表 特殊磨石・スタンプ形磨石属性表

器種	完・欠	法費(全体値)			計上数	平圓形			断面形			磨面		端部敲打	欠損状態			総数				
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		重さ(g)	1	2	A	B	C	1	2		1/2	1/3	1/4					
特殊磨石	完	14.6	7.8	5.2	803	3	2	1	2	1	0	3	0	2	0	0	0	3				
	欠	8.9	6.9	4.9	383	40	12	17	23	18	1	29	4類1	11	3類1	12	16	1	28	46		
スタンプ形磨石	完	10.5	7.3	5.0	534	13	6	7	7	3	2	0	0	3類1	1	7	6	0	13			
	欠	0	0	0	0	0	2	1	1	1	2	1	0	0	0	2	1	0	3			
合計																	56				合計	65



第49図 スタンプ形石器・砥石実測図

山岩18点、閃緑岩17点、砂岩11点、花崗岩2点、不明1点である。

形態的には明確に分類し難いが、次のとおりである。稜線を側縁に見立てた場合の平面形には、直線的な1稜以外が外湾ぎみの1類12点と、全体が楕円形の2類18点がある。断面形には、三角形に近いA類25点が一番多く、卵形のB類19点が大ぎ、楕円形のC類1点である。全体の形態がわかるものは1A類8点(40・45・225・226)、1B類5点(227)、2A類9点(228)、2B類8点(18・34・229)である。長幅比

は残存部分の少ない欠損品を除けば、おおむね1:1から2:1の範囲にある。完形品3点の平均重量は803g、欠損品40点は383gを測る。

使用痕には稜線の摩耗面と端部の敲打痕がある。摩耗面は1稜が33点(18・34・45・225~229)、2稜が12点(40)で、線状痕は観察できず、小剥離痕を伴う例がある。端部の敲打痕は14点に認められる。欠損状態については、完形品が3点に対して欠損品は46点と著しく多い。欠損部位は半折16点より、やや端部に近い部分で折れるもの29点が多い。磨石類とは形態・摩耗面のほかに石質と欠損率の高さが異なり、比較的緻密で硬質な石材を選び、平坦な台の上で敲打を伴うような作業に用いたものと推定される。

⑰ スタンプ形石器 (第24図21、第25図39、第48図、第49図230~234・236、第17表、PL13・18)

特殊磨石と同じ形態で、折れ面が摩耗する石器である。16点を数え、石質の内訳は安山岩7点、閃緑岩6点、砂岩2点、不明1点である。法量と石質の共通性から、特殊磨石の欠損品の転用と推定される。前項に準じて形態分類すれば、およそ全体がわかるものは1A類4点(21・234)、1B類4点(39)、1C類1点、2A類4点(233・236)、2B類2点(230・232)、2C類1点(231)である。長幅比は2:1から3:2前後の範囲に集まり、特殊磨石のうち、遺存率の高いものと重複する。13点の平均重量は534gを測る。摩耗面は1稜が10点(21・39・230・231・233・234)、2稜が1点(232)、3稜が1点(236)で、端部に敲打痕を認めるのは1点(230)である。

スタンプ形石器としての機能部である折れ面はほぼ平坦で、確実に剥離調整を施すと認められる例はない。使用痕である折れ面の摩耗は比較的微弱な例が多く、特殊磨石と区別に迷うものもある。摩耗は折れ面の周辺部に見られ、摩耗面の周囲に小剥離痕をもつものも多く(230・232~234・235)、233・234は顕著である。平坦な折れ面を対象物を敲きつぶす機能が推定される。

⑱ 砥石 (第49図237・238、PL18)

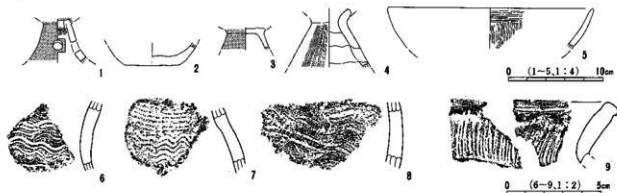
3点出土し、いずれも砂岩の扁平円盤を用いる。237は現存幅8.3cm・厚さ1.6cm、238は現存幅8.8cm・厚さ3.2cmを測る。両面を研磨に用いているが、1面がより顕著である。238は周縁を多少整形するらしい。

2 弥生・古墳時代の遺物

(1) 土器 (第50図1~9)

弥生時代終末期から古墳時代前期および中期の土器がある。

SK07・08は隣接する土坑である。SK07からは第50図1・2・6・7、SK08からは2・8が出土し、



第50図 弥生・古墳時代土器実測・拓本図(1・2・6・7:SK07、2・8:SK08)

2は接合した。その他は遺構外で、2基の土坑がある9トレンチから多く出土した(4・5・9)。

1は赤彩された在地系の器台で、脚部に4孔がある。裾部はわずかに屈曲して開く。3は赤彩された小形の高杯または器台である。4・5は赤彩のない高杯である。5は杯部で、内面にヘラミガキを施す。4は脚部で、外面はタテヘラミガキを施し、内面に輪積み痕を残す。6～8は栴檀文を施す甕である。2は布留系のくの字甕の底部である。9は北陸北東部系の甕で、口縁部は短く、強く屈曲して開く。口唇端部を面取りし、はみ出した粘土をナデつけている。外面にはタテハケメ、内面にはヨコナデを施す。これらの土器は、4が5世紀代のほか、おおむね弥生時代終末から古墳時代前期である。

3 古代・中世の遺物

(1) 土器 (第51図、PL19)

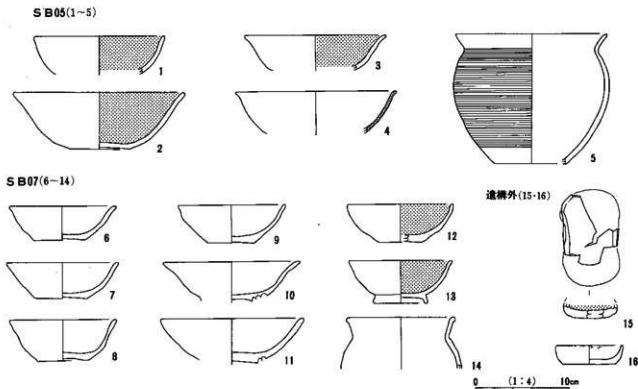
該期の遺物は焼物がすべてであり、大部分がSB05・07の2軒の竪穴住居址から出土している。個々には詳述するが、前者が9世紀後半、後者は10世紀中頃と時期的にはやや間をおく。

SB05 (第51図1～5)

食膳具のほとんどは黒色土器Aでわずかに灰釉陶器が見られる。1は黒色土器A杯A II、2は杯A I、3は碗である。4は灰釉陶器の碗で、口縁端部を玉縁状に仕上げ、施釉がハケ塗りであることから、東濃産光ヶ丘1号窯式と思われる。5は外面にカキメを施してロクロ調整する小型甕であり、このほかロクロ調整の長胴甕の破片がいくつか見られる。時期的には9世紀後半と思われる。

SB07 (第51図6～14)

比較的多くの食膳具が見られる。土師器が大部分で、わずかに黒色土器Aが見られる。6～9は焼成が良好で薄手の土師器杯A IIで、口径11.5～12cm、器高3.5～4cmに集中する。10・11は土師器の碗で、両



第51図 古代・中世土器実測図

者とも高台を欠損する。黒色土器Aは、12が杯AⅡ、13が碗であり、後者のヘラミガキは丁寧である。14はロクロ調整の小型甕である。时期的にみると、10世紀中頃と思われる。

遺構外（第51図15・16）

15は内外面をヘラミガキ・黒色処理する耳皿で、底部に糸切痕を残す、平安時代の所産である。16は中世のロクロ調整の土器皿で、口縁にスガが付着しており、灯明皿として使用されたと思われる、时期的には15・16世紀と思われる。

第5節 小 結

今回の調査の最大の成果は、縄文早期押型文期の住居址と多量の遺物を検出したことである。もともと中南信と比べて東北信は縄文時代遺跡は劣勢で、特に北信は早期遺跡の調査例が少なかった。草創期を除いて多少ともまとまった資料を報告した例は、大岡村鍋久保・信濃町寒ノ神・高山村黒部・山ノ内町上林中道南・木島村三枚原の諸遺跡のほか、菅平周辺の洞窟遺跡や近年調査された飯山市の数遺跡を数えるにすぎない。このうち住居址を検出したのは鍋久保遺跡のみである。

遺存状態が悪いため、出土土器全点を集計の対象としたわけではないことはすでに断ったが、90%を占める第Ⅰ群押型文系土器のうち、文様不明の資料も含めて検討した結果、約70%が立野式と推定されたことは特筆される。従来立野式は中南信にまとまった資料を出土する遺跡が多く、佐久・更埴地方にも断片的な資料が知られていたが、確実に長野盆地に分布することが明らかとなった。

立野式の編年的位置については今日でも諸説あるが、長野県では立野式—桶沢式—細久保式という見解がなかば定説化していることはいうまでもなく、遺跡によって押型文の種類に差があることも指摘されている。本遺跡の立野式比定土器の押型文は、1点（113）の山形文を除いて格子目文あるいはそれに近似した少数のネガティブ楕円文に占められることが顕著な特徴である。格子目押型文は概して小ぶり、菱形・正方形・円形・乱れたものなどがある。市松文やネガティブ楕円文と中間的なものも見られるが、明瞭な市松文はない。口唇端部に施文された例はなく、大部分が縦位密接施文で、磨り消しによって幅の狭い無文部を作るものもある。矢野健一氏は立野式を3細分し、二本木段階—百駄刈段階—福沢段階の変遷を説いているが、百駄刈段階の特徴を「格子目文主体で口縁端部に施文する率が低く、胴上半縦位下半横位の構成を有する時期」と指摘しているから、本遺跡出土資料にもっとも適合する。この見解に従えば、本遺跡の資料は立野式のうちでもきわめて限定された時期に位置付くことになる。富士見町頭殿沢遺跡報文において立野式とされた第Ⅴ群土器は、図示された資料を見ると格子目文49点と市松文・楕円文各1点で、文様組成でも格子目文の特徴でも本遺跡例と近似している。また、距離的に近い更埴市古屋敷遺跡では、発掘資料ではないが格子目文ばかりの押型文土器が出土し、本遺跡と同様な内容の可能性がある。

SB01は胎土の異なる山形文・楕円文がわずかに混入するものの、遺構一括資料と見られ、第2類縹糸文と第3類縄文施文土器を伴っている。186は口縁部内面にも1条の縄文施文が見られ、立野遺跡出土の表裏縄文土器と共通する。また刺突文を施す112は大川式の頸部文様の可能性があり、时期的な並行関係が問題となる。少数例ながら慎重な検討を要する資料として注目される。

第Ⅰ群第1類c・d種は桶沢式・細久保式に比定される。当地方の押型文期遺跡の大部分は楕円文を出土することから、断言はできないが細久保式期に遺跡数のピークがあるように思われる。

第Ⅱ群の貝殻沈線文系土器は皿戸上層式を主体とする。県内では、細久保式以降野島式ころまでの間は資料が乏しく、今回のように押型文土器に混じって少量出土する場合がほとんどである。両者の並行関係

は課題となっている。

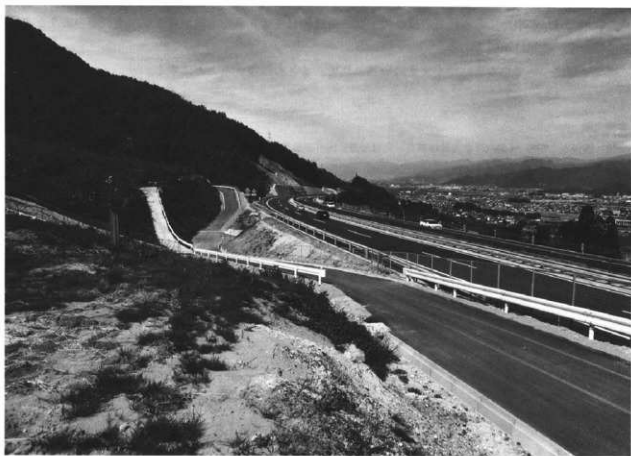
多数出土した石器の組成は、狩猟・動物食料の調理・加工具が卓越する一方、植物食料にかかわる磨石類・特殊磨石が少なからず出土している。これらの石器群が時間幅をもち、前期・晩期などの資料の混入もあろうが、押型文期の組成を示すと見ることに異論はなかろう。器種別に検討する余裕はないが、6点の石棺や23点の石鍾は注意される。特殊磨石は押型文期に特徴的な石器といわれ、用途が問題となるが、磨石類より硬質な石材を好む傾向が見られるかもしれない。スタンプ形石器は関東地方で撚糸文期に特徴的な独自の器種であるが、本遺跡で認められた例はすべて特殊磨石の欠損品を転用していた。風化のため、折れ面の摩耗の観察に一抹の不安は残るが、地域的な特色であろうか。7点の礫器はいずれも分厚い剥片を素材とし、円礫の一端に剝離を施すタイプほど重量がないように見受けられる。石材の利用状況については、石鏃の素材に黒曜石をかなりの比率で用いることと、緑色凝灰岩やヒスイの磨製石斧など、遠隔地から素材を入手していることが注目される。

押型文期の住居址は県内では25例を超え、2～3軒程度で集落を構成するらしい。立野式期に属す例は、飯田市宮崎A・伊那市三つ木・小谷村林頭遺跡など10例足らずしか知られる。平面形態には方・円二系統あり、長野県では両者が見られる。SB01・03とも炉・柱穴は見られず、不整な隅丸方形を呈し、規模は長径2.6m・2.1mと小形である。このほかに早期の遺構としては6基の土坑があるが、集石がのようなタイプではなく、性格は不明である。

縄文早期についてのみ思いつくままに一言ふれて、まとめて替えることにする。

参考文献

- 会田 進ほか 1987 『樋沢押型文遺跡調査研究報告書』岡谷市教育委員会
 小林康男ほか 1988 『向陽台遺跡』【一般国道20号(塩尻バイパス)改築工事埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書】塩尻市教育委員会
 近藤尚義ほか 1988 『八段遺跡』【中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2-塩尻市内その1】長野県埋蔵文化財センター
 田村陽一ほか 1993 『研究会「前半期押型文土器の諸問題」の記録』【研究紀要2】三重県埋蔵文化財センター
 長崎元廣ほか 1984 『長野県における縄文集落の変遷』【シンポジウム 縄文時代集落の変遷】
 矢野健一 1993 『押型文土器の起源と変遷』【考古学雑誌】78-4)



鳥林遺跡現況

第4章 こさかにし 小坂西遺跡

第1節 遺跡の概観と調査の概要

1 遺跡の概観

本遺跡は更埴市大字桑原字小坂西2583-1ほかに所在し、小坂集落を横切るJR篠ノ井線付近が遺跡の中心と推定される。高速道路線としては小坂トンネルの入りロー帯に当たり、調査範囲には中心杭STA. 687・688が含まれる。この地点では高速道は北東に進路をとり、上下線にセパレートして、千曲川を見下ろしながらJR線路の西側を並走している。

遺跡は篠山南麓の南東向きの斜面に立地し、山麓から現集落まで広がるらしい。調査地点は最も山寄りの遺跡範囲の上限に当たり、東西を深く侵食された狭い段丘上である。標高は450m前後で、南には聖高原の山並みを望み、東には千曲川の沖積地を見下ろし、上田盆地まで見はるかす、すこぶる眺望のすぐれた場所である。周囲一帯は果樹園として利用されているが、一部はかつて水田であったという。このため切り盛りが行われて、調査地点では地形の改変が著しい。

「更級埴科地方誌第二巻」の縄文早期・前期・晩期の項には「小坂西沖遺跡」と記載され、楕円押型文少量、前期前半の繊維土器、変形工字文、条痕文の各種土器、石鏃、曾根型彫刻器、特殊磨石、石匙、打製石斧などを紹介している。また、更埴市の遺跡分布図には、縄文時代と奈良・平安時代の散布地と記載されている。これまで調査歴はない。

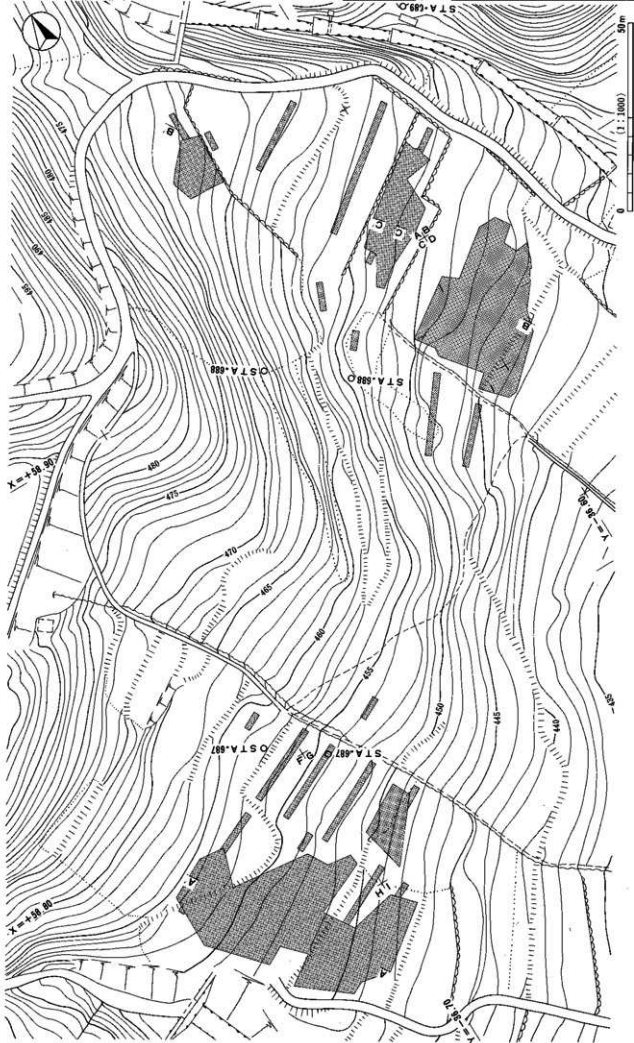
2 調査の概要

調査地点の中央部には、北西から篠山支脈の尾根が張り出して調査予定地を分断している。このため調査地点は100m以上離れた北東部と南西部の2地点に分かれ、それぞれを東区・西区と呼称した。

発掘調査は平成元年9月14日から開始した。遺跡の範囲・内容が明らかではなく、調査開始時点には雑草が繁茂して立ち入りもままならなかったため、まず重機によるトレンチ調査から着手した。トレンチは等高線と平行の方向に設定し、幅約2mで西区に12カ所、延長約250m、東区に11カ所、延長約210m、総延長約460mを掘削した。この結果、東西両地区とも縄文時代から中世にいたる遺物包含層を確認したため、表土剥ぎを行い、西区から面的調査にかかった。トレンチ調査のみの部分を含めて、調査面積は4,000㎡となった。東区は遺物包含層の南北方向の比高が約25mにおよび、この間に5カ所の段差がある。石垣の高さが2m以上の部分もあって、遺物包含層が3カ所に断続するため、それぞれ上段・中段・下段と呼んだ。グリッドの設定方法や呼称は原則と異なる部分があるため、以下にやや詳しく述べる。

測量基準杭は調査担当者が設定した。この設定方法は、下り線側にある位置の正しい幅杭を仮原点として、光波測距儀で視準可能な上り線側の幅杭数カ所の距離と角度を観測し、それぞれの座標値からY軸とのなす角を算出し、これを振り戻してY軸を設定する方法である。西区は仮原点をSTA. 686+60L (X=58,784,6201, Y=-36,748,6498)、視準点をSTA. 686+43R (X=58,738,8567, Y=-36,710,7472)とし、この2点間を基準線として実測が必要な部分に8mグリッド杭を打った。大地区名は調査後に決定し、調査区内にある原点 (X=58,800, Y=-36,700) からX軸・Y軸方向にそれぞれ40m間隔で区切ってE・F・G・H・I地区と呼んだ。

東区下段は仮原点をSTA. 688+49,85R (X=58,891,0640, Y=-36,574,5600) から、STA. 687+20



第52图 调查区全体图

R-ST A. 687+80 Rなど5点を視準し、この5点間の振り戻し誤差の算術平均を按分して仮Y軸とした。この仮Y軸上に設定した仮原点2 (X=58,891,0640、Y=-36,602,8110) から視準して、調査区内にある原点 (X=58,900、Y=-36,600) を基準に8mグリッド杭を打った。大地区は原点から40m間隔で区切り、B・C・D地区とした。しかしながら、調査後の図面整理中に、東区下段のみが全体図からはずれるため点検したところ、視準した上り線測幅杭の番号を誤認していたことが原因と判明したため、再度現地で視準し直して基準線を修正計算した。この結果、逆時計方向に2°20'52"回転すれば正しいX・Y軸となることになった。また、調査時点で設定した8mグリッドの座標値は、例えば、DI05が (X=58,892、Y=-36,584) から (X=58,883,5426、Y=-36,587,5989)、DE09が (X=58,884、Y=-36,592) から (X=58,876,2463、Y=-36,596,2411)、DE17が (X=58,868、Y=-36,592) から (X=58,860,7596、Y=-36,596,5482) へそれぞれ修正された。

東区上段・中段は範囲が狭いためグリッド杭は設けなかった。遺構実測は手測で行ったが、面的調査の範囲や任意の測量基準杭、エレベーション・ポイントなどは光波測距儀で測量した。

遺物の取り上げは、遺構外については東区上段・中段は地区一括で分層ごと、西区はグリッド設定が遺構実測時点のため、耕地の区画などでまとめた。東区下段は分層および中・小グリッド単位とし、特に遺物が集中した部分は小グリッドを4分割した1m単位で取り上げた。前述のとおり、この地区全体がX・Y軸とずれているが、遺物の注記、実測図中の基準杭、遺構・遺物に関する本文中の記述は、発掘時点のグリッド表記のままである。

検出された主な遺構は、時期比定に不確定要素を残すものもあるが、縄文時代は住居址5、土坑4、遺物集中2、弥生時代は土坑2、古墳時代は住居址2、土坑1、奈良・平安時代は住居址3、土坑1、遺物集中1、中世は竪穴建物址5、掘立柱建物址3、火葬施設2、土坑多数がある。第3節の遺構の記述は時代ごとに東区・西区の順とする。

3 調査の経過

平成元年度

- 9月14日 機材搬入。重機の新入難航し道路清掃。
 18日 作業従業員参加し、プレハブ整備。草刈り。
 西区から重機でトレンチ掘削。
 20日 トレンチ掘削。東区にかかる。西地区で遺物包含層確認。防除組合長立会い放水確認。
 21日 トレンチ掘削。東区は縄文晩期土器多く上段でも出土。西区から表土剥ぎ。
 27日 西区で平安住居址検出。東区表土剥ぎ。
 10月2日 西区で中世遺構掘り下げ。東区上・中段遺物包含層掘り下げ。下段の表土剥ぎ終了。
 6日 西区遺構掘り下げ。東区遺物包含層掘り下げ、中段で特殊磨石多出。
 12日 東区下段で遺構検出。測量杭打ち。
 13日 西区で遺構写真撮影。当分は東区の調査。
 17日 平安住居址で壁外へ延びる排水溝検出。
 23日 弥生～中世の各種遺構増え、掘り下げ。
 26日 縄文早期住居址掘り下げ。作業従業員を減員。
 30日 縄文・中世遺構掘り下げ。森嶋瑠理事視察。
 11月2日 西・東区遺構実測。光波測距儀で全体測量。

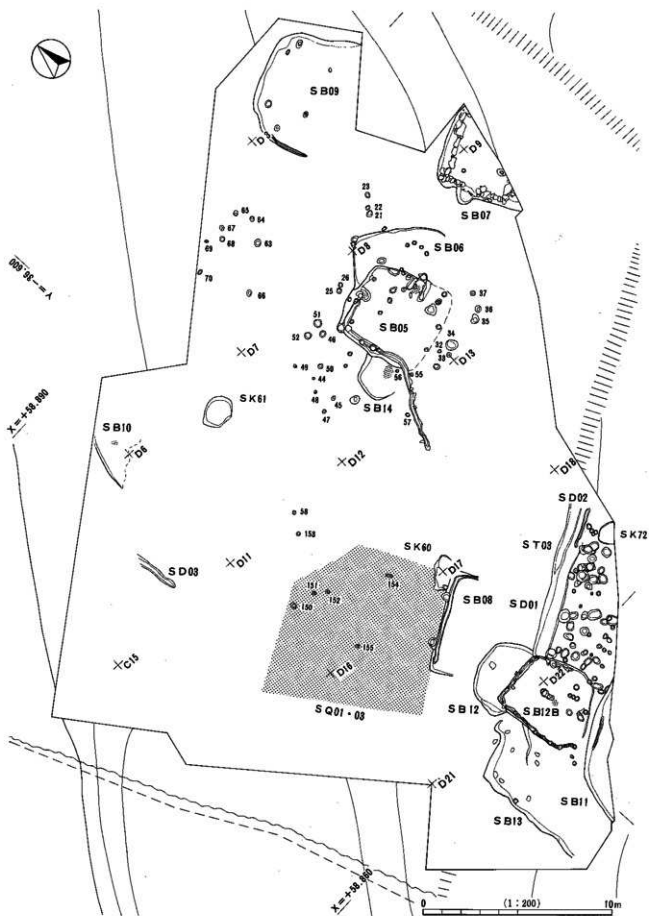


重機の導入 (平成元年9月)

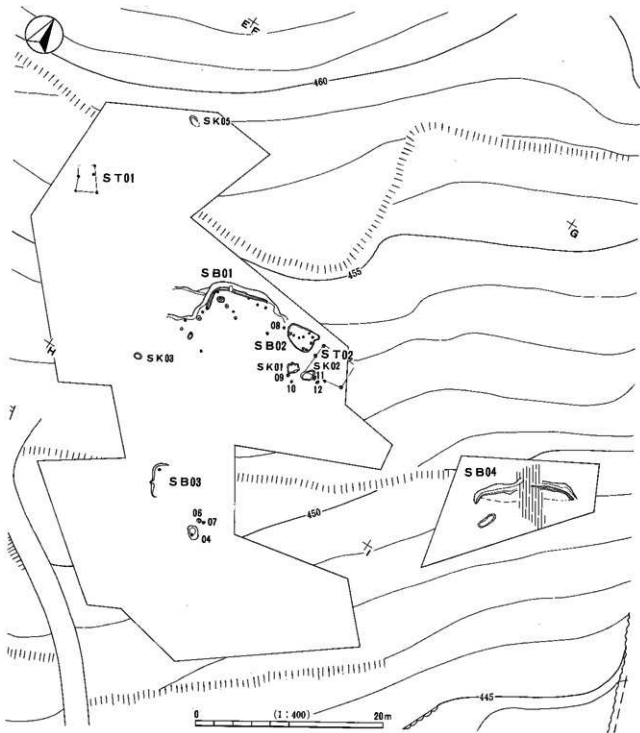


休息風景 (平成元年10月)

- 4日 調査研究員のみで遺構実測。機材撤収。
 17日 実測の残務中に縄文住居址検出し調査。



第53図 東区遺構分布図

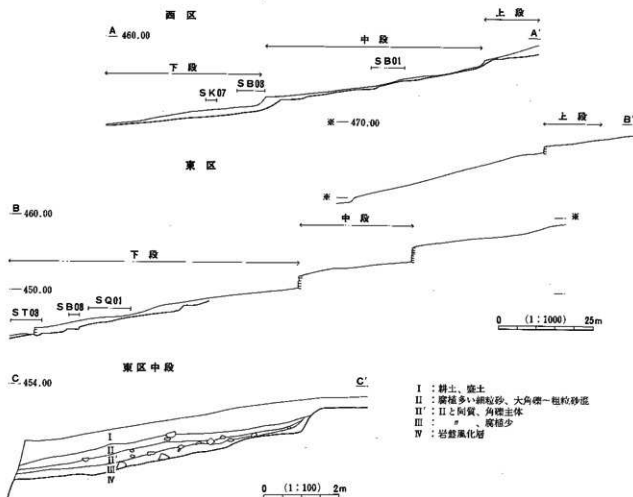


第54図 西区遺構分布図

第2節 地形と基本層序

1 地形

本遺跡は更埴市稲荷山治田小学校の西方、小坂集落を横切るJR篠ノ井線を越えた標高450mを示す、崩積土の傾斜地に位置している。篠山から東へ延びる尾根の突端小坂山(660.8m)および南東方向に延びる尾根に囲まれた山懐に立地し、小坂沢のもたらした新期挟捨土石流堆積物とほぼ同時期の、最終氷期最盛期後の降水量増加期に、長野盆地の陥没運動に起因して生じた地すべり堆積物が再活動して形成された



第55図 土層図

ものと思われる。比較的急な傾斜面をなし、先端部は北東—南西方向に走り「西上がり東落ち」の推定断層（第4図には示していない）に沿って小坂沈扇状地堆積物が緩傾斜で覆い、佐野川扇状地堆積物と複合している。

堆積物は後背地の岩石が反映されて、砂またはシルト質を基質としたこぶし大の石英の多い流紋岩溶岩や安山岩の亜角礫を主体とし、地すべり性または崖錐性の堆積様を示す。この堆積物中には全体的な量は多くないが、鮮紅色をした赤玉（碧玉または鉄石英）の5cm前後の小塊が含まれており、まれに溶着状態の安山岩塊も見いだされる。これが加工されたり、他地域に搬出されたかは不明である。傾斜がやや急なため階段状に石垣を積み、可耕地のほとんどは果樹園や畑地として利用されている。

2 基本層序と遺構

本遺跡の基本層序を、各時代にわたって遺構・遺物とも最も多かった東区下段の層序で代表させれば、次のとおりである（第55図）。

- I 層：耕土
- II 層：山砂起源の細～中粒砂。腐植が多く、角礫を含む。
- II' 層：II層の下半で、多量の人頭大礫を含む。
- III 層：II層と同質で、腐植が少ない。角礫を多く含む。下半には人頭大角礫が多い。
- IV 層：岩盤の風化層で、土壌化が進んでいない。

上記の層序のⅡ・Ⅲ層が黒色土で、遺物包含層である。調査予定地全体におよぶトレンチ調査により、東西両地区とも遺物包含層は等高線に直交して帯状に広がることがわかった。中央に張り出す尾根の付近と、東北端を侵食する蟹沢川、および西南端を深く侵食する地獄沢川付近には見られず、山から押し出した礫と共に、浅い沢筋に堆積している。模式的に区分すれば、Ⅱ層上半は古代・中世、下半は縄文晩期の遺物、Ⅲ層は縄文早・前期の遺物を含むが、明瞭に区分はできない。もともと侵食されやすい傾斜地の上、切り盛りによる地形の改変や耕作の影響を被っており、遺物包含層は20cm足らずと薄く、Ⅰ層から直接Ⅳ層となる部分もある。遺構検出面はおおむねⅢ層上面であるが、本来Ⅱ層から掘り込まれたものであろう。また、Ⅱ層は遺構埋土の基調をなしている。

東区は調査範囲内の遺物包含層の比高差が25mに達している。調査可能な地点は3段に分かれ、それぞれの標高は上段が466～468m、中段が452～454m、下段が443～449mで、遺構・遺物分布が濃密な下段の遺物包含層はさらに南側へ広がる。西区は東区ほどの広がりはないが、耕地の段差から調査地点を仮に区分すると、上段が456～458m、中段が451～456m、下段が447～450mである。

第3節 遺構

1 縄文時代の遺構

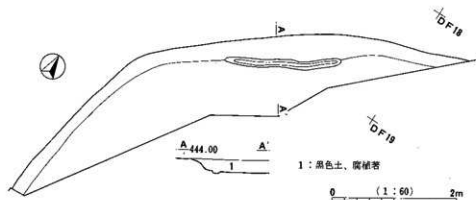
(1) 竪穴住居址

SB11 (第56図、PL24)

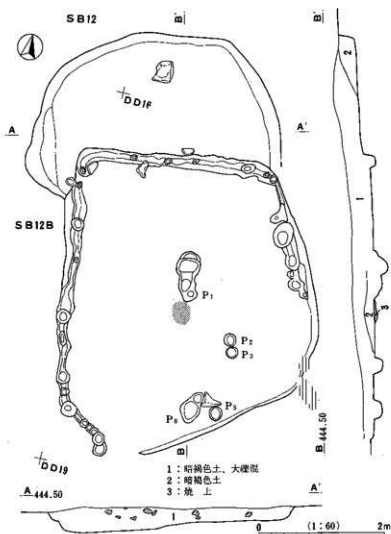
位置：東区下段D21・22にある。**検出：**本址の北東にある中世遺構ST03に伴う土坑群を調査した際、Ⅲ層中でⅡ層が落ち込む壁の一部を検出した。確実な遺構とは断定できない。**埋土：**腐植の著しいⅡ層の単層である。**規模・形態：**大部分が用地外で、北西壁付近の一部を調査できた。壁線は緩く弧を描き、最大7.6mを測る。床・壁：掘り込んだⅢ層下部を床面とする。壁高は約20cmを測り傾斜は緩く、一部に周溝状の浅い溝が沿っている。**遺物分布：**遺物は埋土中に散在し、量は少ない。土器は前期前半に属するものが主体である(第78図15・16)。石器は碎片・剥片少量である。

SB12 (第57図、PL24)

位置：東区下段D16にある。**検出：**中世遺構ST03に伴う土坑群の検出中、西端では黒色土が厚く、縄文土器が多出した。Ⅳ層上面で住居址の北壁らしい黒色土の落ち込みを確認し、東西・南北方向のサブトレンチをかけた。これによって、南北に長い楕円形プランを想定したが、地床炉を検出した床面と本址の床面に段差があることから、2軒の重複を認めた。埋土には差がなかったが、早期末の土器を出土した本址



第56図 SB11実測図



第57図 SB12・12B実測図

可能性が高い。石器(第86図29~32・36・39、第87図41・46)には石匙、刃器、打製石斧、磨製石斧、磨石、特殊磨石、砕片、剥片がある。

SB12B (第57図、PL24)

位置: 東区下段D16・17・21・22にかかる。**検出:** III層中にあるため平面的な確認はできなかった。前述のとおりSB12B北壁から南にかけたトレンチで地床炉が検出され、本址の存在がわかった。SB12Bを切り、西側にあるSB13とも切り合うと思われるが、新旧関係はわからない。東側はST03に伴うSD01が埋土上部を切る。埋土: II層を基調とする。黒みが強く大礫を含まない2層が床面上に堆積し、風化礫・大礫を多く含む1層がこれを覆う。規模・形態: 南向き斜面のため南壁が不明瞭で壁線が乱れるが、東西4.0m・南北4.5mの台形を呈する。面積は検出面の輪郭では16.17㎡、掘り込んだ床面では14.84㎡を測る。床・壁: 周囲に切り合いがあるため全体に壁高は低いが、垂直に近く立ち上がる。西壁の一部は壁高25cmを測る。北壁側は地山のIV層を掘り込み、これ以外はIII層下部を平坦な床面とする。東壁の途中から北・西壁に沿って南西隅まで、幅15cm・深さ4cm前後の周溝が巡る。柱穴: 床面上で6個、周溝内で30個のビットが検出された。P₁は中央にある。P₂~P₅が南側にまとまり、径・深さとも15~30cm前後である。周溝中のビットの径は溝と同じかわずかに大きい程度で、ほとんどが深さ3~10cmの範囲にある。炉: 床面中央に径30cm・厚さ6cm程度の焼土があり、掘り込みが認められない地床炉である。これに隣接する、

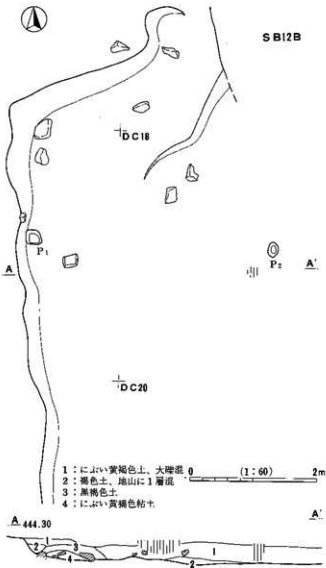
が前期前半の土器を主体とする住居址に切られると推定した。床面精査によってこの推定が正しいことがわかり、新しい住居址をSB12Bとした。埋土: 標準土層のIII層を基調とする。黒みが強く、大礫を含まない2層が北壁際に流れ込み、風化礫・大礫を多く含む1層が全体に堆積している。規模・形態: 南側3分の1以上をSB12Bに切られ、東西3.4m、南北1.8m以上の不整な円形か楕円形らしい。床・壁: 掘り下げた地山IV層を平坦な床面とする。山側の北壁高は30cmを測り、壁はやや外傾する。床面の大礫は地山の礫が露出したものである。竈・柱穴は認められない。遺物分布: 本址とSB12Bの遺物は、掘り下げ中途まで区別できずに取り上げられているため、混在するのはやむを得ない。床面直上と認められたものはなく、埋土中に散在していた。土器(第78図17~32)は早期末から前期前半までがあり、破片がやや大きい茅山上層式(17)、および鉛細式(18~20)が本址に伴う

楕円形で深さ25cmのP₁には焼土が見られないが、炉に伴う施設の可能性がある。遺物分布：土器は床面直上から前期前半の土器が出土し（第78図33～第79図38）、早期の土器を少量交える（第78図28～30）。石器は少量で、石匙と碎片・剥片がある（第86図33）。本址の時期は住居址の形態と床面直上出土土器から前期前半と考えられる。

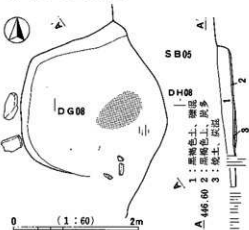
SB13（第58図、PL24）

位置：東区下段D21にある。検出：SB12の掘り下げと並行して西側の黒色土の深い部分の掘り下げを行い、遺物が多出した。平面ではプラン確認ができず、わずかに西壁らしい部分が見られたため、東西にサブトレンチ2カ所をあけて床面を確認した。東側にはSB12・12Bがあり、切り合うと思われるが、新旧関係は不明である。埋土上部を暗渠が攪乱するうえ、後述のようにプランが不明確で炉もなく、自然地形のくぼみに遺物とともに黒色土が厚く堆積した可能性もあり、住居址とは断定できかねる。埋土：IV層を基調とする2・4層が床面と壁際に堆積し、III層を基調とする1・3層がこれを被覆する。規模・形態：住居址とすれば西壁と北壁の一部を検出できたにとどまり、南北5m以上・東西4m以上の長方形、あるいは方形となろう。床・壁：床面は東側ほど低くなり、また地形の傾斜に沿って南側ほど低く、水平にはならない。西壁は緩く立ち上がり、その他は確認できない。柱穴：床面でピット2個を検出した。P₁・P₂とも径20cm・深さ10cm強を測るが、柱穴かどうか断定できない。遺物分布：土器・石器とも多量に出土した。土器（第79図39～58）は早期の貝殻沈線文系を少量交えるが（39～42）、条痕文系（43～51）と前期前半の土器群（52～58）が併し、時期を決め難い。石器（第86図17～21・31・34・37・38、第87図40・42～45・48・49）には石核、碎片・剥片、石鎌、石匙、刃器、磨製石斧、礫器、磨石類、特殊磨石がある。本址が遺構とすれば、重複する住居址か土器捨て場の可能性もある。

SB13 実測図



第58図 SB13実測図



第58図 SB14実測図

SB14（第59図、PL25）

位置：東区下段D07にある。検出：平安時代のSB05の西側でIII層下部に黒色土の落ち込みを

認め、さらに、SB05の西壁に炭化物層が断面観察された。埋土：床面全面に厚さ2cm程度の炭化物層（2層）があり、この上に暗褐色土層（1層）が堆積する。規模・形態：東側半分程度をSB05に切れ、谷側の南壁は不明瞭なため、南北約2.5m・東西2.2m以上を測る。北・西壁線から推定すると、東西にやや長い楕円形か、丸みの強い隅丸長方形になりそうである。床・壁：北壁高は約20cmで、床面は南側にやや傾斜するが平坦である。炉：床面中央に50×80cmほどの薄い焼土がある。掘り込みを伴わない地床炉と思われる。遺物分布：埋土が浅く、少量である。SB05の西側半分から出土した遺物も本址に含めた。土器は早期末から前期前半と思われる小破片がある。石器（第86図22～28・35、第87図47）には碎片、石鏃、刃器、特殊磨石がある。

(2) 遺物集中

SQ01（第53図、PL22）

東区下段C15・D11・16に位置する。標準土層II層が縄文晩期末葉の遺物包含層となっている。層厚は5～15cmで、上半は耕作の擾乱を被り、須恵器や内耳鍋の破片が混じる。この下層にあるIII層は縄文早期の遺物を少量含む。II・III層は沢筋に堆積し、山からの押し出しによる大小の角礫を多数含んでいる。遺物集中の範囲は8m四方程度で、ほぼ同じ範囲から奈良時代の土器がまともって出土した（SQ03）。遺物（第81図105、第82～84図）は大部分が摩滅した小破片で接合できたものがないが、時期はかなり限定される。

SQ02（第60図、PL22）

東区上段の調査範囲中央に位置する。標準土層II層が縄文晩期後半の遺物包含層となっている。この地点はわずかな緩斜面となり、II・IIIが堆積するのは調査範囲内の5×7m前後の部分に限られる。遺物包含層は10cm内外と薄く、崖錐性の角礫の間から土器が集中的に出土した。焼土等は見られない。土器（第81図104）は底部が正位にあり、口縁部が谷側に倒れて散らばった状態で、1個体の3分の1程度の破片である。このほかに別個体の破片（同102・103）と、チャート剥片少量がある。後述するが、縄文晩期後半の中でも本址とSQ01とは時期差がある。

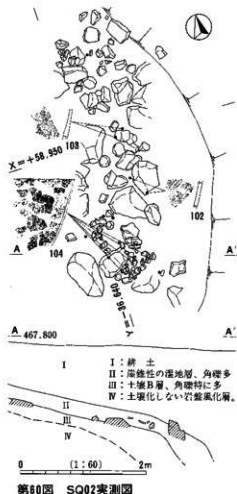
(3) 土坑

西区にあるSK03・04・06・07は縄文時代に属す土坑と思われる。いずれもII層基調の暗褐色土を埋土とする。

SK03（第61図）：F22にある。0.9×0.6mの楕円形で深さ約25cmを測る。土器の小破片と碎片を少量出土し、周辺にも縄文時代遺物が散在した。

SK04（第61図、PL24）：H08・09にある。1.5×1.06mの楕円形で深さ約40cmを測る。底面には一段深い掘り込みがあり、地山の火礫が露出している。遺物は縄文晩期末葉の土器（第77図1～7）と、剥片、石鏃、打製石斧、磨製石斧、磨石などの石器（第85図9・14）がある。

SK06・07（第61図、PL24）：SK04の北側に隣接する。SK06は径45cm、SK07は径30cmの円形で、



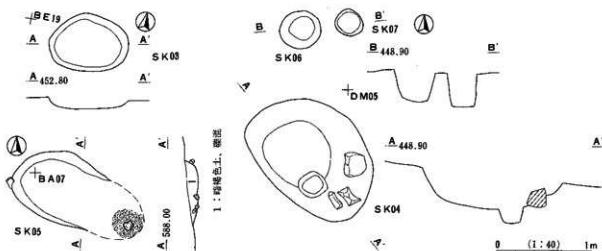
第60図 SQ02実測図

深さ35cmを測る。SK07からは打製石斧が出土した(第85図13)。時期は明らかではないが、SK04と同時期の可能性がある。

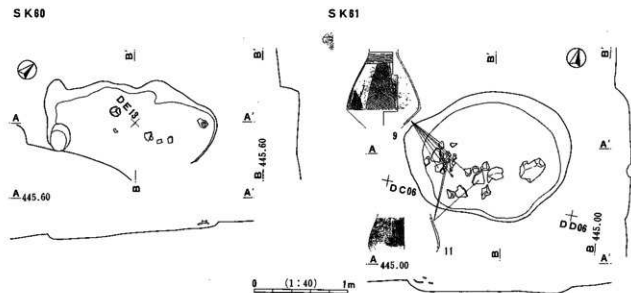
2 弥生時代の遺構

(1) 土 坑

SK60 (第62図、PL25) : 東区下段D17杭にかかる。IV層を掘り込んでおり、埋土は暗褐色砂壤土の単層である。谷側の南東壁は不明で、奈良時代のSB08に一部切られる。等高線と平行な長軸は1.85m、短軸は1m前後らしい。楕円形を呈し、深さは北西壁で約20cm、底面は平坦である。遺物(第104図1・2)は箱清水式に属す甕・高杯・蓋など、数個体分の破片があり、SB08にも流れ込んでいるらしい。



第61図 SK02・03・04・05・06・07実測図



第62図 SK60・61実測図

SK61 (第62図、PL25) : 東区下段D06にある。Ⅲ層下部で検出した。埋土は暗褐色砂壤土の単層である。東西1.7m・南北1.4mの楕円形を呈し、深さは北側で約15cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面はⅣ層を明瞭に掘り込まず、南に傾斜している。やや東側に片寄って大礫1個があり、西側に吉田式の壺2または3個体の4分の1程度の破片が集中していた(第104図9~11)。そのほかの遺物には甕の小破片がある(同12~15)。

SK34 (第53図、PL25) : 東区下段D08にあり、Ⅲ層下部で検出された。06×0.46mの楕円形で、深さ17cmを測る。埋土はⅡ層基調の単層で、箱清水式末期の小型高杯の脚部(第104図3)が出土した。

3 古墳時代の遺構

(1) 住居址

SB06 (第63図、PL26)

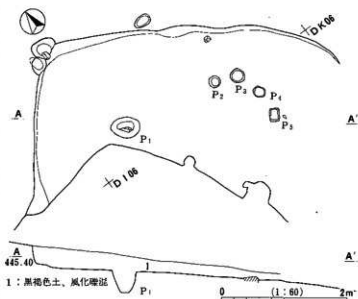
位置 : 東区下段D8にある。**検出** : Ⅲ層下部で住居址の北東壁らしい黒色土の落ち込みを認めたが、北西側の壁線が不整形となり、プラン内にコマド煙道が現れたため、本址を切る住居址(SB05)があることが判明した。埋土で識別できず、2軒の住居址にかけてサブトレンチをあけて壁・床を確認した。**埋土** :

標準2層基調の黒褐色土の単層である。**規模・形態** : 南西側半分程度をSB05に切られる。谷側は不明ながら、北西~南東は約5mの隅丸方形を呈する。**床・壁** : 掘り下げたⅣ層を平坦な床面としている。北隅の壁高は約30cmで、垂直に近く立ち上がる。

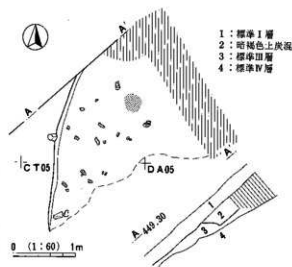
柱穴 : 床面でP₁~P₅を検出したが、配置が不規則で深さも5~36cmとばらつきが大きい。P₅・P₇は北隅、P₈は北東壁外にある。いずれも本址の柱穴とは断定できかねる。**遺物分布** : 遺物量は少ない。床面から古墳前期の土師器高杯の脚部(第104図4)が出土した。

SB10 (第64図、PL25)

位置 : 東区下段C05・D01にある。**検出** : Ⅲ層下部で炭化物を含む黒色土の落ち込みを認め、断面観察ではⅢ層上面から掘り込まれることがわかった。暗渠に切られ、耕作がおよんで遺存状態は悪い。**埋土** : 標準Ⅲ層を基調とし、炭化物を多く含む黒色土の単層である。**規模・形態** : 西壁の一部を検出したのみである。**床・壁** : Ⅲ層下部を



第63図 SB06実測図



第64図 SB10実測図

床面とし、炭化材が多く散布している。焼土ブロックが1カ所見られるが、壁から1m前後の位置のため、炉とは断定できない。西壁高は10cm程度が残存する。遺物分布：古墳時代前期と思われる土器の小破片が少量出土した。

4 奈良・平安時代の遺構

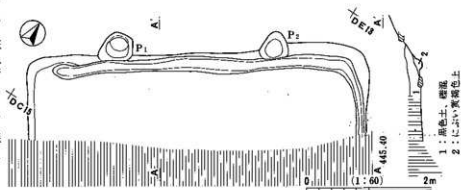
(1) 住居址

SB08 (第65図、PL25)

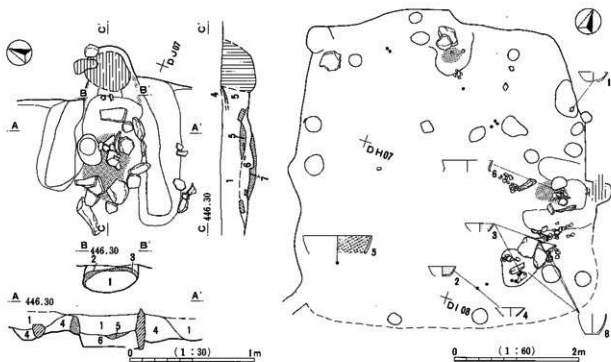
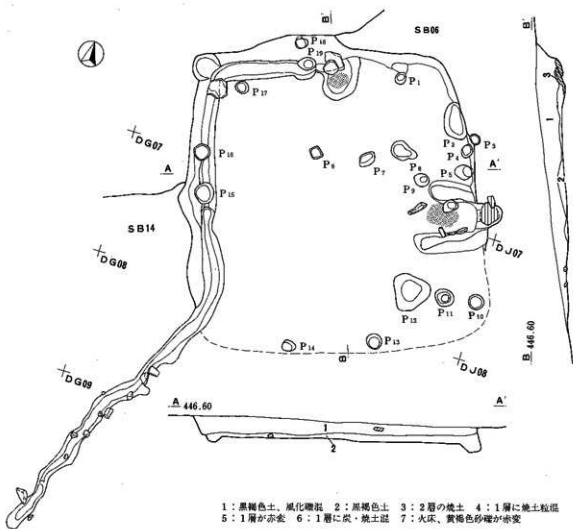
位置：東区下段D16にある。**検出**：石垣を除去してII層を掘り下げた際、IV層上面で黒色土の落ち込みを認めた。南東側3分の2程度はカットされている。**埋土**：北壁直下に標準II層とIV層が混じった2層が流れ込み、上部はII層を基調とするかなり黒みの強い1層が堆積する。**規模・形態**：東西5.1mの隅丸方形を呈する。床・壁：掘り込んだIV層を平坦な床面としている。北壁高は約30cmで、外傾して立ち上がる。北壁から東壁直下にかけて幅約20cm・深さ4cm前後の周溝が巡る。**柱穴**：P₁・P₂は北壁上から掘り込まれる。口径45～50cm・深さ50～60cmを測る。**遺物分布**：床面から須恵器杯(第105図1)と甕が出土した。これらの遺物から、8世紀の住居址である。

SB05 (第66図、PL26・27)

位置：東区下段のD07・08にある。**検出**：III層下部からIV層上面で遺構検出し、まず、本址の北・西壁線が確認された。東側に黒色土が広がり、推定プラン内からカマド煙道が検出されたことから、本址に切られる別の住居址(SB06)が想定され、サブトレンチで東壁と床を確認した。また、南壁外で検出された溝は、床面精査で確認された周溝とつながった。本址調査後に西壁断面で縄文時代のSB14が確認された。**埋土**：標準II層基調の黒色の砂壤土で、床面に薄く堆積する2層は上層の1層より黒みが強い。**規模・形態**：谷間の南壁は検出できず、P₁₃・P₁₄を本址の柱穴とすれば東西4.6m・南北約4.8mの隅丸方形となる。床面積は18.98㎡を測る。床・壁：掘り込んだIV層を平坦な床面とし、南側が10cmほど低い。山側の北壁高は40cmを測り、わずかに外傾して立ち上がる。北壁中央から西壁の直下に周溝が巡り、南西隅から壁外へ抜けている。**柱穴**：P₂・P₁₂を除く17個のビットが柱穴となろう。P₆～P₉以外は壁に沿う。P₁₅・P₁₆・P₁₉は周溝内、P₃・P₁₈は壁にある。口径は20～30cm、深さは8～39cmとばらつきがあるが15～25cm程度が多い。P₁₁には柱痕が見られた。**カマド**：東壁中央にある。両袖の下部が残り、向かって右袖には平石2枚が立つ。燃焼部は壁外に突出しないタイプで、平石10個ほどが落ち込み、土器片も混じる。火床は強く焼けて赤変している。煙道部に移行する部分は赤変した天井部が残り、穴の大きさは幅40cm・高さ17cmを測る。この先は中世のビットに切られる。北壁中央部にも径約50cm・深さ6cmで中央が赤変したくぼみがあり、平石2枚が乗っている。カマドの痕跡の可能性はあるが、壁には煙道の痕跡が見られない。**諸施設**：P₁₂はカマドの右手前であり、径約60cmの不整形、深さ8cmで、上部にはカマド芯材らしい大礫が数点集まり、土器片も出土した。灰



第65図 SB08実測図

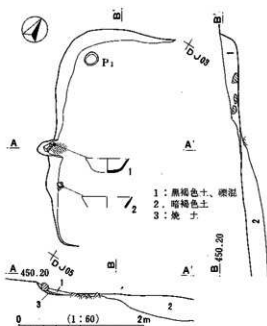


第66図 SB05・カマド・遺物分布実測図

溜めであろう。先にふれた周溝は幅20cm前後・深さ10～15cmで、南西隅から等高線に沿うようにわずかに方向を変えて壁外へ約4.5m延びている。遺物分布：東側半分は比較的多く、カマド手前からP₁₂付近では床面に集中していた。土器は出土量が多い割には接合できたものは少ない(第105図1～8)。土師器杯A(1)・甕(6・7)・小型甕(8)、黒色土器A杯A(2・3)・鉢(5)、須恵器杯A(4)・甕(9)がある。このほかに鉢(第108図1)が埋土上部から出土した。これらの遺物から、9世紀後半の住居址である。

SB03 (第67図、PL24)

位置：西区下段H03にある。検出：IV層上面で黒色土の落ち込みを認め、焼土の位置からカマドが想定された。埋土：標準II層を基調とする1層の単層。規模・形態：東向き斜面にあり、西側3分の1程度が残る。南北3.2m以上の隅丸方形を呈する。床・壁：北側ではIV層を掘り込み、南側はII層を床面とし、やや軟弱である。北壁高は約25cmを測る。柱穴：北西隅のP₁は口径20cm・深さ14cmを測り、柱穴の可能性ある。カマド：西壁中央にあり、火床の一部を残すのみである。遺物分布：カマドの内部と左側から須恵器杯A 2点(第105図1・2)が出土したほかにほとんど遺物はない。これらから、本址は8世紀の住居址である。



第67図 SB03実測図

(2) 土坑

SK05 (第61図、PL24)：西区上段F06にある。II層中にあり、埋土もこれに近い土質のため、プランは不明確である。約1.5m×0.75mの楕円形を呈するらしく、深さは10cm前後である。東端と西端に分かれて須恵器A杯(第105図1)が出土し、東端には炭と骨粉が少量散布していた。骨が人骨かどうかは不明である。本址は9世紀前半の土坑であるが、性格はわからない。

(3) 遺物集中

SQ03 (第53図、PL22)：東区下段D16にあり、縄文晩期末葉の遺物集中SQ01の南半分と重複している。標準II層が遺物包含層で、縄文晩期とは分層できない。山石の間から土器片が集中的に出土し、個体数はさほど多くなさそうだが、かなり接合できたものがある。遺物(第105図1～11)は、須恵器杯A(1～3)・B(5・6)・高杯?(4)・壺(9)・短頸壺(10)・甕(11)、土師器甕(8・9)がある。圧倒的に須恵器が多く、食膳具は須恵器が占めており、8世紀前半の遺物集中である。同じ地区にあるSB08と同時期であり、土器捨て場のほかに住居址が流失した可能性も考えられる。

このほか、東区中段からも完形の黒色土器A杯A(第105図1)と少量の古代土器が出土し、SB05とは同時期の遺物と思われるが、遺構は検出できなかった。

5 中世の遺構

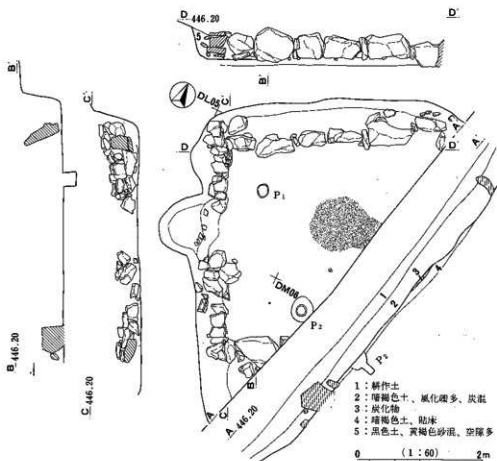
(1) 竪穴建物址

深さに差はあっても斜面を掘削して平坦面を造り、上屋を構築したと思われる遺構を、平坦面を造らずに柱穴を掘ったと思われる掘立柱建物址と区別して、便宜的にこの名称でまとめた。

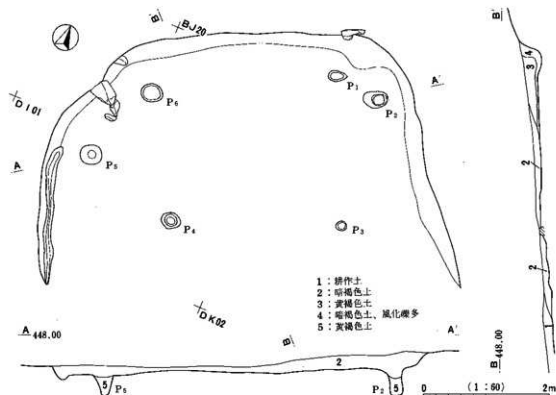
SB07 (第68図、PL26・27)

位置：東区下段D09杭にかかる。**検出：**IV層上面で土器皿・内耳鍋を伴う黒色土の落ち込みが明瞭に確認できた。切り合いはない。**埋土：**基本的には2層つき、下層は標準II層基調の白色風化礫を多く含む砂壤土で、大粒の炭が散在する。これをI層相当の1層が被覆する。**規模・形態：**隅丸方形を呈するが、北東—西南隅の対角線から東側が用地外となる。東西約4.4m・南北5.0m以上。**床・壁：**IV層を掘り込んだ後、2層と同じ土質で白色粒の少ない4層を5~10cm程度貼り、床面上に薄い炭化物層が広がる。北壁高は約60cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁面から約40cmの間隔をおいて大きな扁平の礫を立て並べ、この隙間に小さな礫を詰めて補強している。ほとんど床面を掘り込んで埋めてないため、完掘すると大礫は転倒しやすい状態であるが、本来は掘り方を黒色土で埋め戻して北壁に礫を貼る構造であろう。西壁には壁の高さまで、やや不規則ながら人頭大の山石を小口積みにした石垣が巡る。西壁の一部は幅約1mにわたって石積みとぎれ、50cmほど壁外へ突出するスロープがあり、出入口の可能性はある。用地外をボーリングしたところ、南・東壁にも礫が巡っており、南壁は北壁と同様らしい。炉：2層下部には炭化物が多く、中央部は特に集中していた(3層)。厚さ2~3cmで焼土を交えず、掘り込みを伴わなかったが、炉の可能性が

ある。**柱穴：**IV層上面まで掘り下げ、P₁・P₂を検出した。P₁は径・深さとも20cm、P₂は径35cm・深さ30cmで2段の掘り込みである。**遺物分布：**2層下半を中心に内耳鍋・土器皿(第106図1~4)、開元通寶・威平通寶(第109図1・2)が出土した。西壁の張り出し部に内耳鍋がやや集中していた。



第68図 SB07実測図



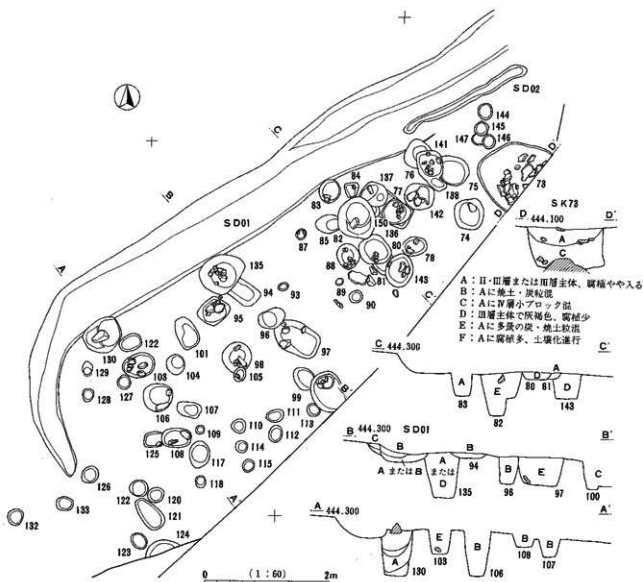
第69図 SB09実測図

SB09 (第69図、PL25)

位置：東区下段B23・D03にある。**検出：**II層が比較的薄く、IV層上面で黒色土の落ち込みが明瞭に確認できた。切り合いはない。**埋土：**3層に分層できた。II層基調の2・4層とIV層基調の3層が山側から流れ込んでいる。**規模・形態：**斜面をカットした平坦面は、南側が不明瞭ながら丸みのある台形状を呈し、東西6.1m・南北約3.5mを測る。**床・壁：**西側はIV層を掘り込み、東側は浅い谷筋のため黒色土II層を掘り込んだ平坦な床面である。西壁下に幅15cm・深さ2～5cmの周溝が約2mにわたって検出された。**柱穴：**床面で6個検出された。P₁・P₂は北東隅、P₅・P₆は北西隅、P₃・P₄は中央よりやや南側にあり、P₁～P₃・P₄～P₆はほぼ対称の配置となる。口径は16～40cm、深さは17～43cmとばらつきがあるが、柱穴であろう。**遺物分布：**内耳鍋の小破片など少量である。平安時代の灰釉陶器長頸壺の底部(第105図1)が出土した。本址は遺構の構造から中世に属すと思われ、灰釉陶器は埋没過程で流れ込んだものであろう。

ST03 (SD01・SK73～150) (第70図、PL27)

位置：東区下段D17・22にある。**検出：**東区では最も下位に位置し、石垣に接しているため黒色土は薄く、III層下部またはIV層上面で検出した。当初、焼土を伴う例を含む中、小規模の多数の土坑群(SK73～150)と溝(SD01)として調査したが土坑群が溝の範囲にまとも配列が見いだせることから、これらを1つの建物としてST03を付した。**規模・形態：**ST03は南東側半分程度が用地外となり、おそらく等高線と平行のSD01が平坦面の区画となっている。SD01は幅1m前後で、山側からの深さは30cmを測り、埋土はCタイプで部分的に焼土が入る。約11mを検出し、北東端は不明、南西端は曲がって消える。土坑群との切り合いは不明であるが、一部の土坑を切っている。SD02はSD01の埋土上部に重複し、煙道のように煤の堆積が顕著である。土坑は68個に上り、ほとんどが円形で、ほぼ垂直に掘り込まれる。口径と深さから4種程度に大別できる。東端にあるSK73は最も大きく、口径120cm程度の円形と思われ、深さ60cmほどである。埋土は上層がA・下層がCタイプで、底面にはIV層中の巨礫が露出している。SD01に直交する北西



第70図 ST03 (SD01・SK73~150) 実測図

一南東の配列を示すのが、西南側から数えれば、SK130・103・106・108・117、SK135・96・97・99・100、SK83・82・143・85・88・136・78、SK141・75である。これらは口径40~60cm・深さ30~70cmの規模である。口径が同じ程度の土坑が、SK124・102・107・104・101・95・98・80・77・142・76・74などであるが、30cm以下と浅く、必ずしも規則性のある配列を示さない。その他はさらに規模が小さく浅いものが多いが、SK79・90・100・120・122・144~146は深さ30cm前後を測る。埋土：第70図の土層説明のとおり、土坑群の埋土にはA~Fの6タイプがあるため、埋土の種類ごとに以下に列挙しておく。

- A : SK81・83・84・87・89・90・95・98・99・102・109・113・121・123~125・132・135・136・144
- B : SK76・78・85・88・93・94・96・101・106・108・110・111・117・122・126~130・133・137~138
- C : SK79・100・104・105・120・141
- D : SK75・80・143
- E : SK77・82・97・103・107・112
- F : SK74・114・115・118・145~147

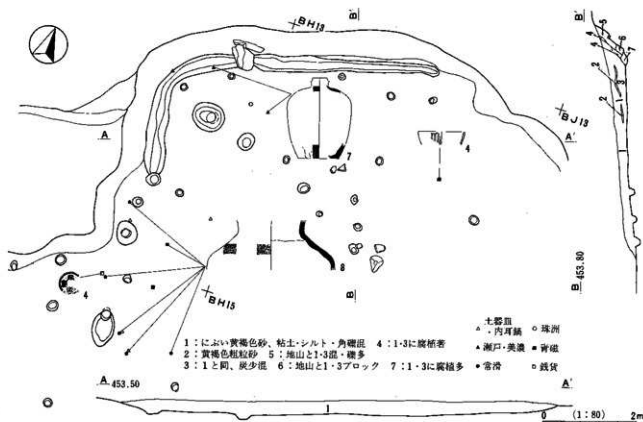
以上のとおり、埋土の3分の1ずつをA・Bタイプが占め、規模・形態による大別とは特に相関性が見

られないことがわかる。これらの中でおほし以上の礫を含む土坑には、SK74・78・79・83・87・88・95・97・98・103・105・130・135~137・141~143がある。遺物分布：中世遺物は多くはなく、土器皿、瀬戸美濃系陶器、輸入陶磁器、内耳鏡などの焼き物がある（第106図）。上記の遺構から出土した各種の焼き物を破片数で示すと次のとおりである。土器皿はSD01：15、SK73：34（8~10）、SK95：4（11・12）、SK85：2、SK75・78・94・97各1、瀬戸美濃系陶器はSK106：1（17）、内耳鏡はSD01・SK73：各5、SK75（23・24）・82：各4、SK136：2、SK135：1である。土坑ではSK73の遺物が目立って多い。

以上に説明した東区検出の中世遺構のほかに、中世の焼き物を出した遺構とその破片数は、SK26：土器皿1・輸入青磁1（第106図7・19）、SK52・53：各土器皿2がある。

SB01（第71図、PL23）

位置：西区F17・18にある。検出：IV層上面でかなり広い範囲に黒色土の落ち込みを認めたため住居址とは思わず、サブトレンチにより床・壁を確認しSBを付した。埋土：7分層したが、基本的には埋没初期に流れ込んだ4~7層と、その後堆積した1~3層に大別される。いずれも山砂を基調とし、下層は腐植分を含んで暗褐色を呈する。床面付近では少量の炭を含む部分がある。規模・形態：谷側がやや開いた隅丸の台形を呈する。谷側は徐々に傾斜して斜面へ移行するため、遺構範囲が不明瞭である。柱穴や遺物分布から判断すると、東西約9.3m・南北約6.0mとなる。西壁外には一段高い平坦面が延びるが、遺構かどうかははっきりしない。床・壁：掘り込んだIV層を床面とし、山側は水平である。北壁高は60~70cmを測り、やや外傾して立ち上がる。北壁から西壁の途中まで、幅15~20cm・深さ4~8cmの周溝が巡る。柱穴：床面上でピット26個を検出した。口径15cm程度のものが多いが、P₅・P₆・P₁₄は上部の径が50cm前後で2段に掘り込まれる。深さは半数が20cmより浅いが、P₁₄・P₁₈・P₂₃は50cm以上ある。深いものは埋土にまったく締まりがなく、一部空洞となるものもあった。配列はやや不規則だが、P₁・P₂・P₇~



第71図 SB01実測図

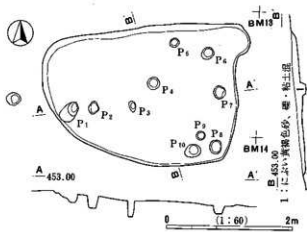
P₁₃・P₂₂～P₂₄は壁に沿う。**遺物分布**：遺物は少量で、埋土下部から床面に散在した。焼き物（第107図）には、土器皿（1・2）・青磁碗（4）・内耳鍋・珠洲系播鉢・常滑系甕（8）・瀬戸美濃系陶器天目茶碗（5）・瓶子（7）があり、常滑系甕は接合した。このほかに銅製品（第108図2・3）・銭貨（第109図4）がある。

SB02（第72図、PL23）

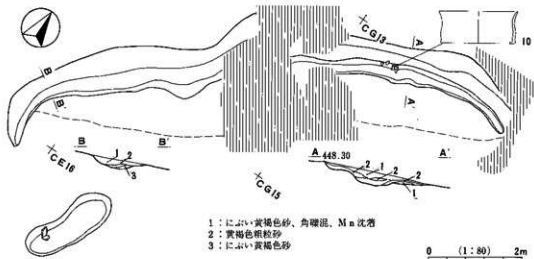
位置：西区F18にあり、SB01の東に近接する。**検出**：IV層上面でやや不整形の褐色土の落ち込みを認めた。**埋土**：厚層10cm程度で、山砂を含む褐色土の単層である。**規模・形態**：等高線方向に長軸をとる不整楕円形で、東西3.1m・南北2.1mを測る。**床・壁**：掘り込んだIV層を床面とし、南側は北側より10cmほど低い。削平のためか壁はほとんど認められない。**柱穴**：床面上でビット10個を検出した。口径15～20cmで、深さは6～49cmとばらつくが、20cm前後が多い。P₈～P₉は壁際を巡っている。**遺物分布**：土器皿・内耳鍋の小破片と銭貨1点（第109図8）が出土したのみである。

SB04（第73図、PL24）

位置：西区G17にある。**検出**：IV層上面で遺構検出を試みた際、遺物を含む黒色土が帯状に残る部分を認めたため当初は溝と考えたが、SB01の調査結果から建物址の残存部とした。**埋土**：3分層したが、砂壤土が山側から流れ込んだものである。**規模・形態**：石垣の直下にあり、中央部は暗渠で攪乱されている。北壁付近が残るのみで、東西10.4mを測り、南北は不明である。**床・壁**：掘り込んだIV層を床面とし、平坦面は幅1mほどが残る。北壁下に幅30cm・深さ5cm前後の周溝が沿う。**諸施設**：西端に2.05×0.7mの長楕円形で深さ20cmの土坑がある。検出面は斜面であるが、本来の位置は本址の範囲内となろう。遺物はなく、切り合いか付属施設か不明である。**遺物分布**：東半分の周溝内から内耳鍋1個体の5分の1程度の破片（第107図10）がやや浮いた状態で出土した。

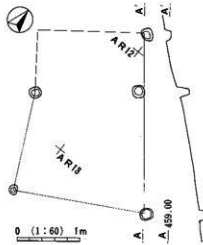


第72図 SB02実測図



- 1：にじい黄褐色砂、角礫混、M m沈着
- 2：黄褐色粗粒砂
- 3：にじい黄褐色砂

第73図 SB04実測図



第74図 ST01実測図

(2) 掘立柱建物址

ST01 (第74図)

位置：西区E15・20にある。検出：IV層上面で土色の違いから検出できた。埋土：褐色土の単層である。規模・形態：北西隅は検出できず、やや不規則な配列であるが、5個のピットを結んで南北棟の2×1間の掘立柱建物址と考えた。南北4.5m・東西2.7mとなる。かなり急斜面にあり、P₁とP₂の比高差は90cmを測る。遺物を伴わず時期決定の根拠に欠けるが、ピットの埋土はST02などと同じ。

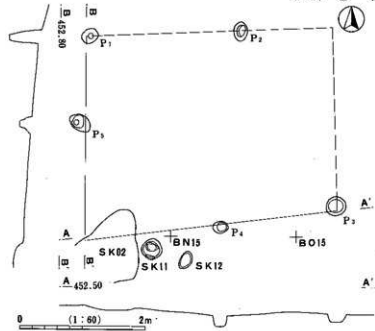
ST02 (第75図、PL23)

位置：西区F19にあり、SB02の東側に隣接している。検出：IV層上面で土色の違いから検出できた。埋土：SB02のピットと同じ褐色土である。南西隅でSK02と切り合う可能性がある。規模・形態：北東・南西隅からは検出できず、やや不規則な配列であるが、5個のピットを結んで東西棟の2×2間の掘立柱建物址と考えた。東西4.0m・南北3.0mとなり、軸線はほぼ方位に合う。柱穴：ピットは口径25cm程度、深さはP₁が50cmに達するが、他は12~22cmの範囲である。柱痕を認めたものはない。

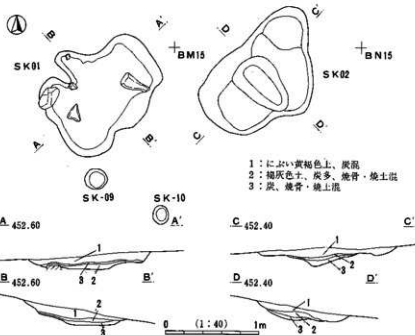
(3) 土坑

SK01・02 (第76図、P

L23)：西区F18・19にあり、IV層上面で検出した。SB02・ST02の南側に隣接する。2基は接近し、北東—南西に長軸をとる長方形である。SK01は1.28×1.05mで、深さ約15cmであ



第75図 ST02実測図



第76図 SK01・02実測図

る。山側に小さな張り出し部がある。壁は緩く立ち上がり、底面はやや傾斜している。壁際は所どころ赤化するが、底面には炭層があり赤化していない。SK02は1.52×1.0mで、深さ20cmである。南東壁が外湾し、底面の中央部分に炭層がある。埋土は底面に骨片混じりの炭化物（3層）、その上に炭・焼土・骨片を交える砂壤土（2層）があり、これを褐色土（1層）が被覆している。

SK01の骨片は細片も含めて100点ほどで、さほど高齢ではない成人男性1個体分のごく少量に当たり、軟部がついたまま火葬されたものである。SK02の骨片は細片も含めて20点ほどで、年齢・性別は判明しないが乳幼児ではなく、普通の火葬の状態である（付章第1節参照）。また、SK01出土の炭化材の樹種はエノキあるいはエゾエノキであった（付章第2節参照）。

SK01・02は上部を削平された中世の火葬施設である。西区の中世遺構はSB01周辺に集中しており、同時存在は証明できないが一連の遺構群となる可能性がある。

第4節 遺物

1 縄文時代の遺物

(1) 土器

① 土器分類の概要

今回の調査で出土した縄文土器は縄文早期・前期・中期・晩期にわたり、次のように分類した。

第I群 早期の土器

- 第1類 押型文系土器
- 第2類 貝殻沈線文系土器
- 第3類 条痕文系土器

第II群 前期の土器

- 第1類 初頭の土器
- 第2類 前葉の土器
- 第3類 後半の土器

第III群 中期の土器

第IV群 晩期の土器

- 第1類 初頭の土器
- 第2類 後葉の土器
- 第3類 末葉の土器

以上のうち、第II群土器の第2類と、第IV群土器の第3類は比較的まとまっているため、本文中では必要に応じて系統・型式などに分類して説明する。

② 土器の分布と出土量

出土土器は平テンバコ30箱程度である。全般に遺存状態が悪く、器面の摩滅した小破片のため分類不能の資料がかなりの量に上る。このため破片数の正確な集計作業は行わなかった。出土量の概略は、前期前半の第II群第1・2類と、晩期後半の第IV群第3類がそれぞれ3分の1前後を占め、その他が残りを占めている。第I群は第1類が10点前後、第2類が30点前後、第3類は50片程度の破片数ながら同一個体が半数程度である。第II群第3類は10点足らず、第III群は1点のみ、第IV群第1類は1個体の数片、同第2

類は数十片の1個体分のほかに数点である。

土器の分布状態は次のようである。第I群は東区中・下段に分布し、第3類はSB12・13付近に多い。第II群は西・東区ともに出土した。第1・2類は東区では第I群第3類と混在して出土した。第3類は東区中段から出土した。第III群は東区下段、第IV群第1類は中段、第2類は上段に集中し(SQ02)、下段から1点出土した。第3類は西・東区とも出土し、特に東区下段に集中していた(SQ01)。遺物包含層の分布については第2節で述べたが、通常の集落遺跡の立地としてはかなり急斜面のため侵食されているうえ、後世の地形改変のため遺物包含層は薄く、土器分類と層位的な上下関係の対応は認められない。

③ 遺構出土の土器

SK04 (第77図1~7、PL28)

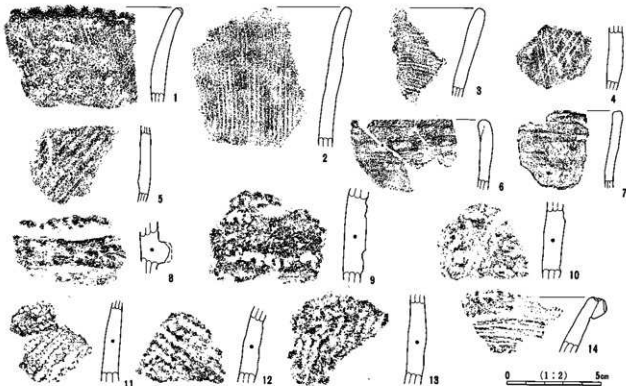
西区下段の遺構である。いずれも第IV群第3類に属す。1~4は在地的な条痕文系の甕である。1・2は同一個体で、口唇部に押圧があり、無文部を残さずに条痕を縦位に施す。3は口縁部で斜位の条痕、4は胴部で交差する条痕である。6・7は同一個体の可能性がある。口唇部は面取りされ、口縁部は内外面とも粗雑な横ヘラミガキを施す。浮線文系の甕と思われる。5は粗大な条痕文の甕の胴部で、胎土には粗粒の長石を含み、水神平式と思われる。

SB11 (第78図15・16、PL29)

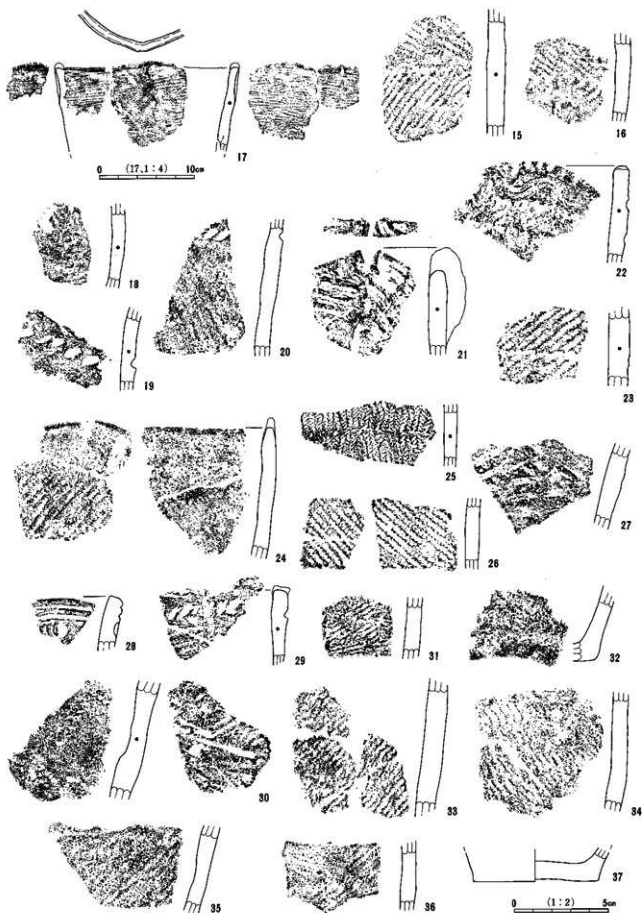
東区下段の用地界にかかり、調査できた部分が少ないため、遺物も少量である。15・16とも第II群第1類または第2類である。15は胎土に繊維を含み、0段多条の縄文Lによる幅広のループ文、16は結束の羽状縄文を施す。

SB12 (第78図17~27・31・32、PL28・29)

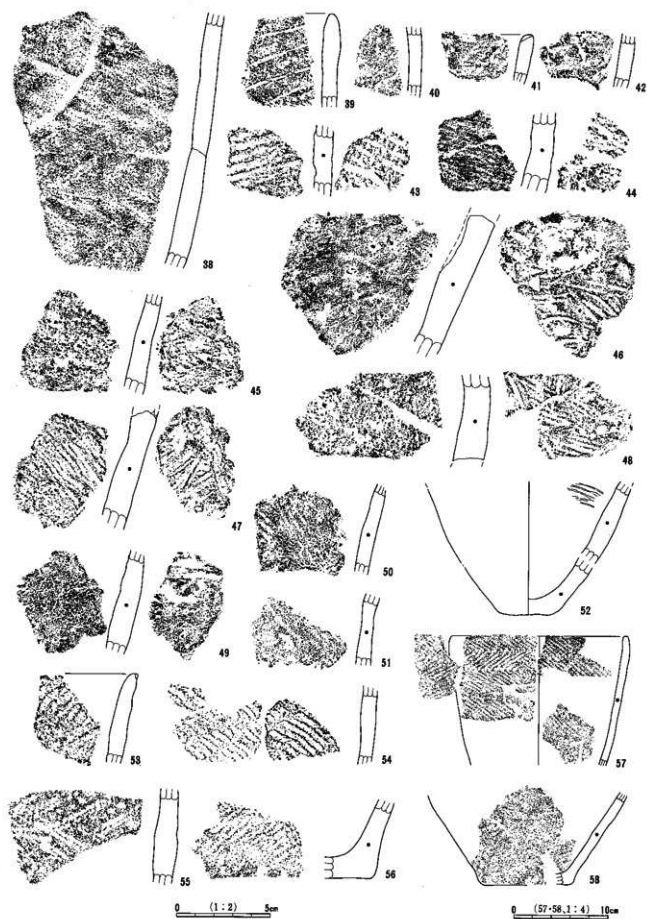
東区下段にあり、SB12Bに切られて約半分が遺存した。17~20は第I群である。18は胎土に微量の織



第77図 縄文土器拓本図(1) (1~7: SK04, 8~14: 西区遺構外)



第78図 縄文土器拓本図(2) (15・16：S B11、17～27・31・32：S B12、28～30・33～37：S B12B)



第79圖 縄文土器拓本圖(3) (38: S B12B, 39-58: S B13)

維を含み、貝殻腹縁文を施される第2類である。17は口縁部の4分の1程度の破片で、内面からの押圧で外面にわずかな隆起を作る。口縁下に低い段をもち、内外面にやや粗い横位条痕を施す。19・20は胎土に白色粒が目立ち、黒褐色を呈する。深い刺突文を施され、19は斜位または波状に巡るらしい。20は外面に縦位の条痕を施す。21～27・31・32は第II群である。21は波頂部に縦位の突起があり、2本のLの捲糸文を施す。22は刻みを施した波頂部に波状沈線が沿い、この下に足の短いループ文が見られる。24は小波状の口縁部で、0段多条の縄文Lを施す。23は同種の原体によるループ文である。25は束の縄文である。27は2本のLの捲糸文で崩れた菱形を構成するらしい。26は固く撚った縄文LR、31はRL、32は底部でRLを施す。21・23・25は繊維を含み、その他は繊維が見られない。21が第1類、26が第3類のほか、第2類と思われる。第I・II群が混在するが、第I群第3類が住居址に伴う可能性が高い。

SB12B (第78図28～30・33～第79図38、PL29)

SB12を切り、全体を調査できたため遺物量も多い。28は第I群第1類、29・30は胎土に多量の繊維を含み、第2類である。28は半截竹管による沈線文と刺突文に貝殻腹縁文を施す。29は胎土に長石が目立ち、黒褐色を呈する。口唇部に小突起が付き、刺突文が巡る。30は厚手で外面は摩滅し、内面に粗大な条痕文が見られる。33以下は器面の摩滅が著しいが、第II群第2類と思われる。繊維は観察されない。33・35は縄文LR、34はRLである。36は菱形構成の羽状縄文である。38は無筋L2本の付加条で羽状構成するらしい。37は上げ底気味の底部である。住居址に伴うのは第II群である。

SB13 (第79図39～58、PL28・29)

SB12Bの西側に隣接し、住居址と断定できない黒色土の大きな落ち込みで、遺物量も多い。39～42は第I群第2類、43～51は第3類である。39は口縁部で、斜位の沈線間に貝殻腹縁文を充填する。41は口唇部を丸棒で押圧し、斜位に貝殻腹縁文を施す。40・42は摩滅し、わずかに貝殻腹縁文が見える。43～49は15mmに達する厚い器壁で、多量の繊維を含み砂粒は目立たない。同一個体らしい破片がかなりある。摩滅したものが多いが、内外面に横位または斜位の粗大な条痕文を施す。原体は明らかではないが、43など貝殻条痕と思われるものがある。50・51は器壁がやや薄く、長石粒が目立ち繊維は観察されない。外面に貝殻らしい条痕文を斜位に施す。52～58は第II群で、53～55は繊維を含まない。52は小平底の底部で内面にわずかな条痕が見られ、第1類と思われる。その他は第2類である。53は口唇部を刻み、縄文LRを施す。54は束の縄文である。55は正反の合、57は結束によって羽状縄文を構成する。56・58は平底の底部で、縄文LRを施す。

④ 遺構外出土の土器

遺物集申のSQ01・02出土土器も含めて、地点にかかわらず分類の順序に従って説明していく。また、遺構出土土器についても適宜ふれる。

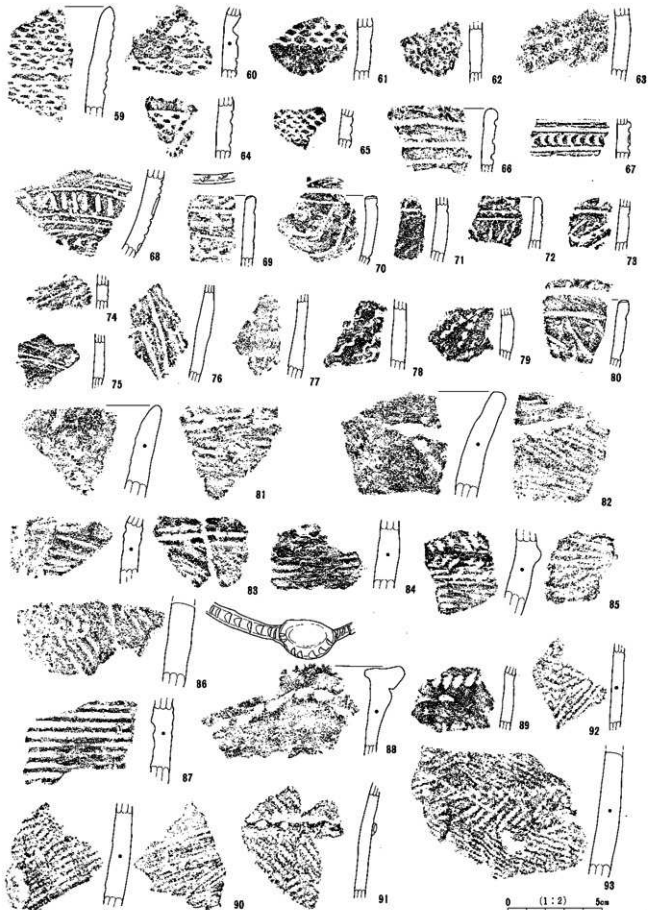
第1群 (第80図59～90、PL30)

第1類 (第80図59～65、PL30)

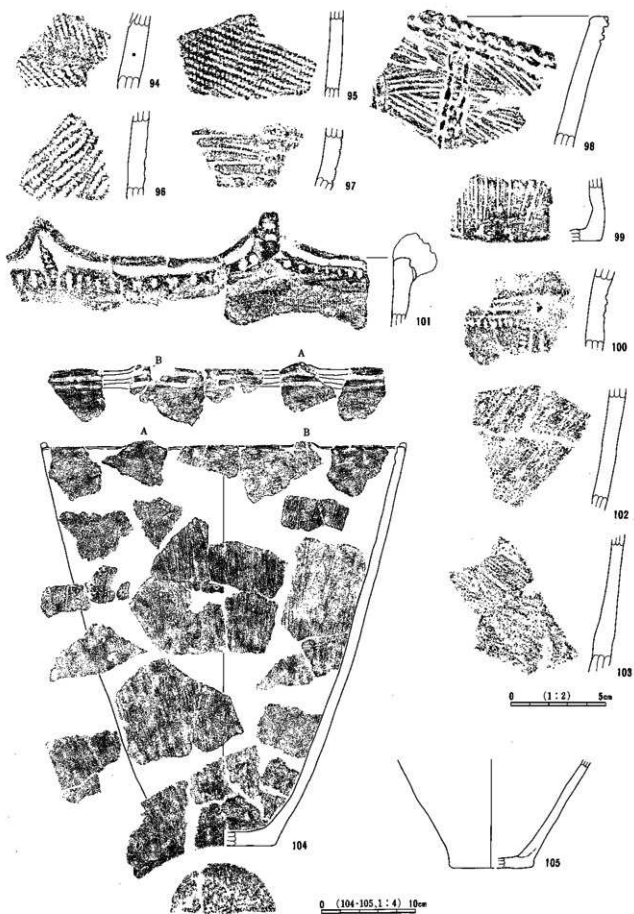
すべて楕円押型文で、胎土に細かい白色粒子や石英を含み、色調はさまざまである。器壁は7・8mm程度である。62以外は横位施文で61・64には無文部が見える。59・60は微量の繊維を含み、丸みのある口唇部で、60には刺突文が見られる。63は楕円の粒が大きい。おおむね細久保式に比定される。

第2類 (第80図66～80、PL30)

胎土・色調は第1類と似るが、器壁は6・7mmとやや薄い。66は口縁部に太い平行沈線が巡る。67・68は平行沈線間に爪形文や刺突文を施す。28も同様である。内面は丁寧にヘラミガキされ、67は特に焼成が良い。69～76は沈線文と貝殻腹縁文が組み合わさる。69・70は口唇部を貝殻で刻む。69・71～73は平行沈



第80図 縄文土器拓本図(4) (東区 60・62・63・65・66・68・70：中段、その他：下段)



第81図 縄文土器拓本図(5) (東区 102~104:上段、96~99・101:中段、その他:下段)

線間に貝殻腹縁文を斜位に充填する。70は曲線的な意匠が描かれる。74・75は斜位、76は縦位の細い沈線間に貝殻腹縁文を施す。39も同じ。77~79は貝殻腹縁文のみで、78は大ぶりな貝殻による。80は口唇部に刻みを施し、角棒を器面に斜めに当てて、乱れた鋸歯状文を描く。28・39・66~68・70は田戸下層式、41・77は田戸上層式に比定できる。80の口唇部は41と類似する。

第3類 (第80図81~88, PL30)

胎土に多量の繊維を含みきわめて厚手で、内外面に粗大な条痕文を施す。SB13と出土地点が近く、43~49と同じ特徴をもつ。81・82は緩く外反する口縁部で、外面は摩滅している。85は段の部分で、低隆帯の両わきを太い絡条帯で押圧する。条痕文は86が斜位のほかは横位で、87などは明らかに貝殻条痕であろう。これらは器形のわかる17や85の特徴から、茅山上層式に比定できる。

88は波頂部に円形の突起が付き、口唇端部と口縁部に沿って深い刺突文が巡る。胎土に繊維を含み、黄褐色を呈してやや脆弱である。89は薄手で少量の繊維を含み、黒褐色を呈する。浅い刺突文が巡る。19・20・29はこの類で、刺突文が見られない50・51も含まれるだろう。これらは粕畑式に比定できるが、89は石山式の特徴とも通ずる。胎土には斜長石が目立つ29と、88のような二者がある。

第II群 (第80図90~93, 第81図94~99, PL30)

本群については縄文のみの破片が類に識別できないものが多いことと、遺構出土土器の項でかなり図示したため、一括して説明する。90は縄文LRを施し、内面に斜位の条痕が見られる。91は薄手で押圧された隆帯が巡り、2種の原体で羽状縄文を構成する。最近、この種の土器に塚田式の型式名が冠せられ、21・27などの中道式の前段階に位置付けられた。8は太い隆帯が巡り、斜位の沈線を施す。花積下層式の可能性がある。これらは第1類である。

92・93は結束した原体で羽状縄文を構成する。94・12は縄文RL、11・13LRを施し、胎土に繊維を含む。9・10は同一個体で、ある種の縄文を横位・斜位に押圧していると思われるが、原体は不明である。これらは第2類に属するものであろう。なお、第2類としたもののうち、ある程度特徴が確認できて型式比定できる土器としては、15・16・22・23・97などが関山式、25・54が神ノ木式、24・36・38・55などは黒浜式または有尾式である。

95・96は固く撚った縄文RLで、26と共に諸磯a式の縄文と思われる。98は波状口縁を呈し、半截竹管による地文に結節浮線文を施す。97・99は竹管文のみで、98と同じ諸磯c式新段階の土器である。これらは第3類である。

第III群 (第81図100, PL30)

胎土に石英・雲母を多く含み、縦・横の平行沈線に連続刺突文が沿う。五嶺ヶ台II式に比定され、縄文地文をもたない。

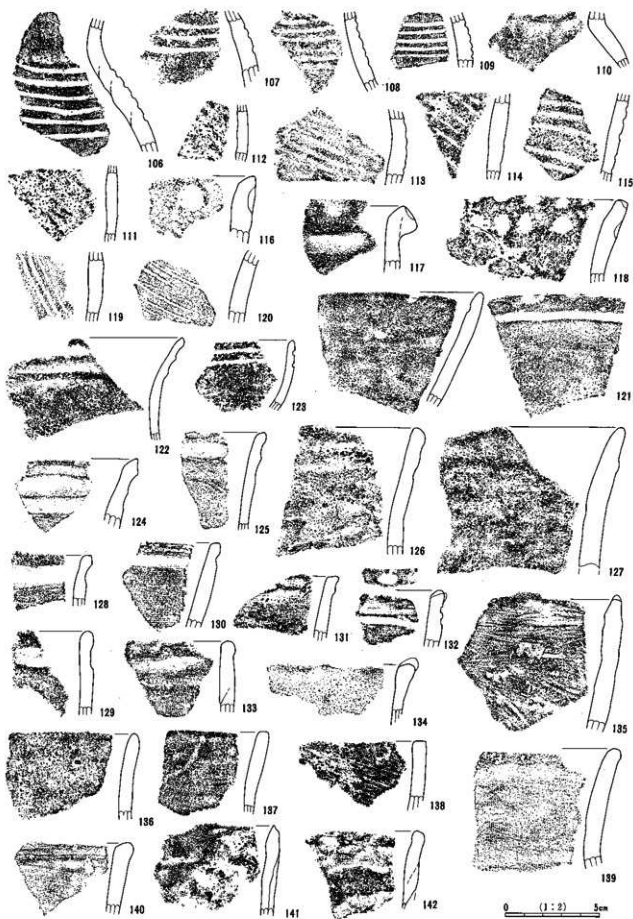
第IV群 (第81図101~第84図192, PL30)

第1類 (第81図101, PL30)

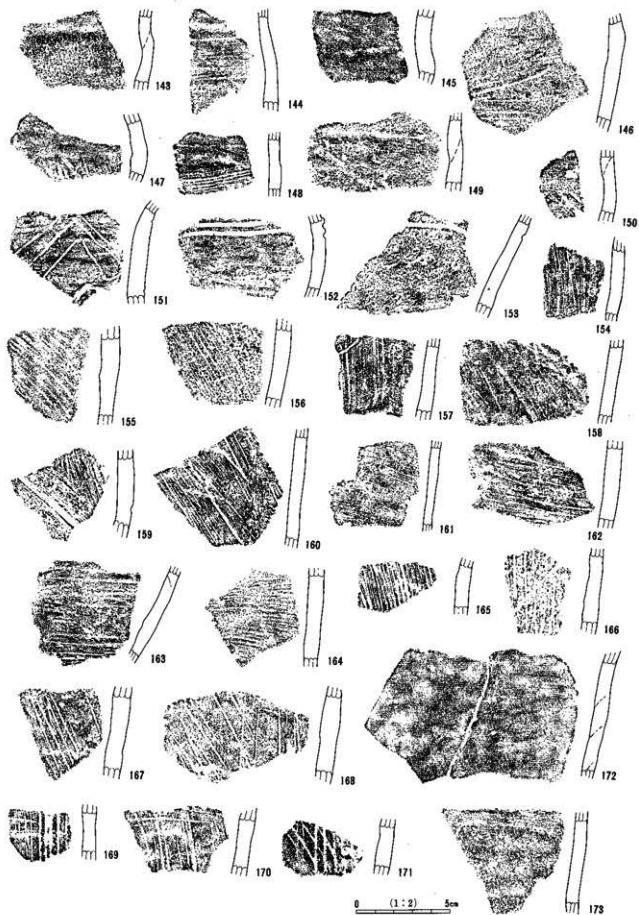
波状口縁に沿って太い沈線と刻みを施した隆帯が巡り、波頂部に高い突起と沈線端部が向き合う三叉文の2種を配する。晩期初頭段階の隆帯文土器である。

第2類 (第81図102~104, 第82図121, PL28・30・31)

102は数十片の破片の状態で出土し、部分的に接合できた。石英・長石の粗粒を含み、内面は器面が剥落しやすい。直線的に開く深鉢で、口径・高さとも40cm程度と推定される。口縁部には山形の小突起があり、内面に2条の太い沈線が巡る。外面は口縁部が横へラミガキ、それ以下は縦へラミガキ、内面は底部まで横へラミガキを施す。底面には木葉痕に網代痕が重なり、編み方は1本越え1本潜り1本送りである。晩期後葉の女鳥川段階の土器である。103・104は102と同じ地点から出土したため、共伴する可能性が高



第82図 縄文土器拓本図(6) (東区 下段)



第83圖 縄文土器拓本図(7) (東区 下段)

い。同一個体で、I02と似た粗い胎土に雲母が目立つ。外面は斜位の細密条痕、内面は粗いナデを施す。121は肩のない外面無文の浅鉢で、口縁部内面に1条の沈線が巡る。

第3類 (第77図14、第81図105～第82図120・122～第84図192、PL28・30～32)

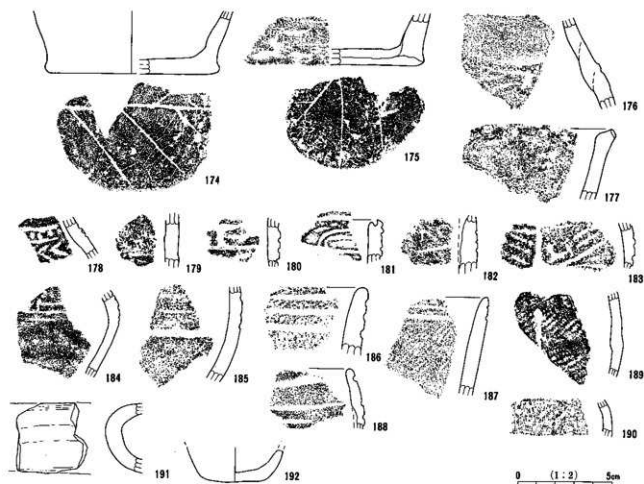
106～110は壺で、110以外は肩部に3～6条の沈線帯をもつ。

111～116は条痕文系の甕または壺である。111～113は長石の粗粒が目立つ胎土で、搬入品の可能性がある。斜位の粗い条痕を施し、椀玉式に比定されそうである。

14・116～119は在地的な条痕文系土器である。14は口縁部に刻みを施す突帯が巡る壺で、横位の条痕を施す。116・118は甕で、口縁部に指頭の押圧痕が1列巡り、118は口唇部を刻む。117は口縁部に粗大な貼り付け突帯をもつ広口壺である。119・120は半載竹管によるらしい斜位の条痕を施す甕である。

105・122～183は浮線網状文系に属す。123は小形の浅鉢で、口縁部外面に2条の沈線が巡る。紫がかった褐灰色を呈し、飛騨型といわれる胎土に近い。105・122・124～175は甕である。胎土は砂を含んでやや粗く、石英の粗粒が目立つものが多い。122・124～139・151は口縁部で、口外帯は認められない。124・128～132・138は口唇部を面取りされ、その他は丸みをもつ。122・124・125～127には痕跡的な1・2条の隆線帯、128～130・132には沈線帯がある。151は山形に屈折する3条の沈線を施す。132は口唇部に押圧を施し、134・135は小突起がある。143～150は肩部で、いずれも稜が不明瞭である。144・146・148は横位、147・150は縦位の細密条痕を施す。152～173は胴部である。152は3条以上の沈線が巡り、横位に条痕を施す。153には1条の沈線が見られる。154～165は細密条痕を施す。154・157・165～171は縦位、161～164は横位、その他は斜位の施文である。166～171は条痕の間隔があき、施文が深く、半載竹管を原体とするらしい。172・173はナデ・ミガキが施され、無文である。105・174・175はこれらの底部で、いずれも木葉痕がある。176～179は壺である。176は頸部の文様帯がわずかに隆起し、沈線で菱形に近い意匠を描く。177は口唇部外面に円形の刻みを施す。178は頸部に列点帯と矢羽状の沈線文が巡る。179も同じ文様をもつが、摩滅が著しい。

180～190は東北系および系統の不明なものである。180～185・188は沈線文を描く。180・181は工字文の系統である。180は楕円文が接し、赤彩痕が残る。東北系の壺または高杯の可能性はある。181は口唇上に沈線を施し、楕円文が腫れる。182は三角形を描く。183は横帯区画内に3本単位の斜行沈線を配し、短沈線で区切る。184は最大径10cm程度の壺で、張り出した肩部に沈線帯をもつ。東北系統の小型壺であろう。185は平行沈線文が巡る壺のようである。188は鉢かと思われ、器壁が薄く口縁部に沈線が巡る。185・188は系統が不明である。186・187は甕と思われ、口縁部に平行沈線をもち、縄文LRを施す。189は縄文LR、190は縦位の撫糸文を施す。これらは東北系の可能性がある。191は幅4cm程度の舟形土器と推定される。内面の調整は粗雑で、凹凸を残す。192は小形土器の底部であろう。



第84図 縄文土器拓本図⑧(東区 下段)

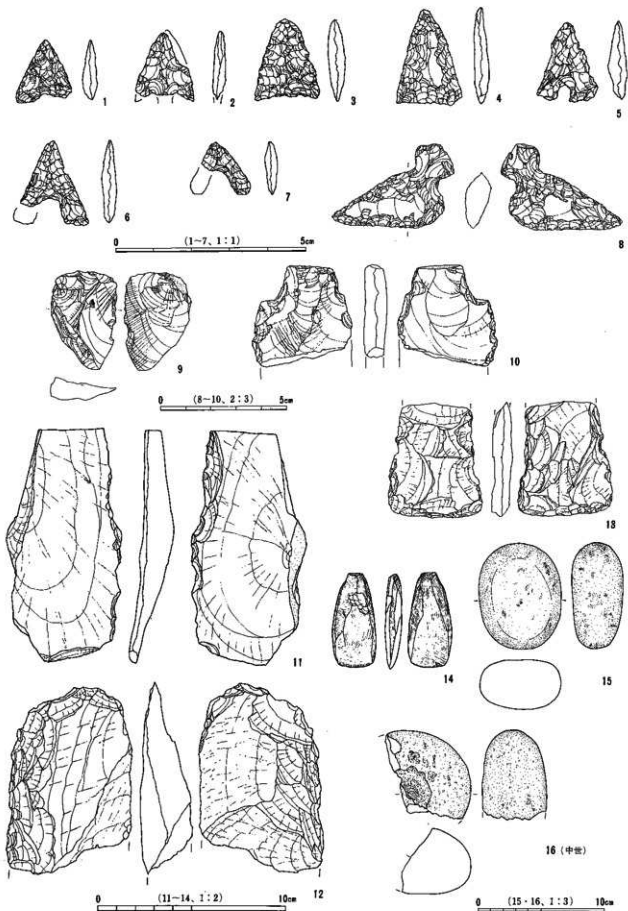
(2) 石 器

① 概 観 (第18表)

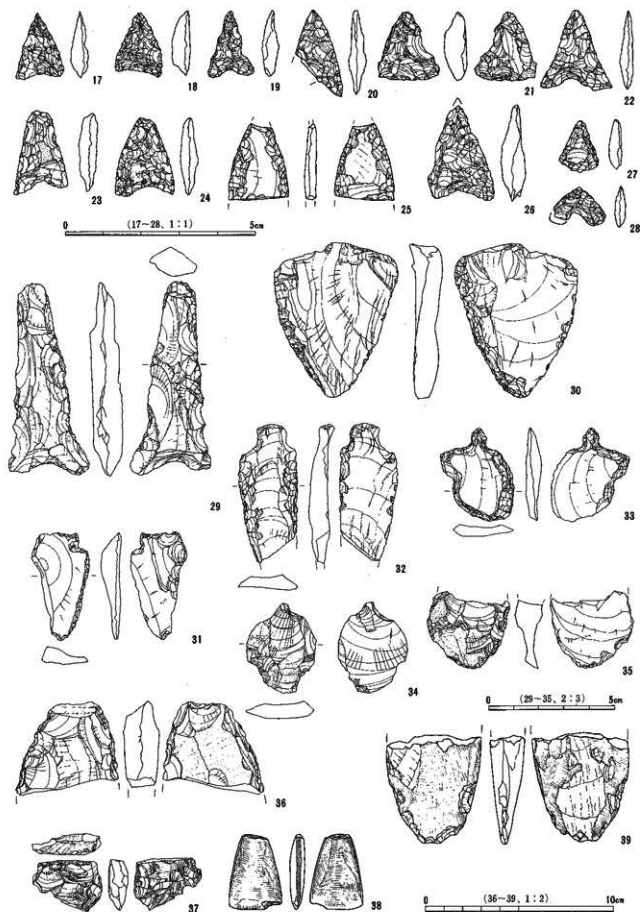
調査で出土した石器は、合計2,781点におよぶ。このうち2,388点は石器製作に伴って石屑としてはじき出された資料、393点が道具と認定できた石器である。道具としての石器の内訳(第18表)は、137点(34.9%)が狩猟活動を担う石鏃と石槍、調理加工具のうち動物質食料に係わると思われる刃器・石匙・大型刃器・礫器が128点(32.6%)で、これらを合わせると67.5%を占める。一方、植物質食料の採集および調理・加工に係わるであろう打製石斧・磨石類・特殊磨石・スタンプ形石器の合計は107点(27.2%)で、そのほかに漁撈具といわれる石錐が2点(0.5%)、材木の伐採、道具の加工具の磨製石斧・石錐・砥石が合計19点(4.8%)となる。総数の24.2%を占める刃器は必ずしも動物質食料の加工のみに用いられたものではなく、万能の道具であろうが、この点を考慮しても狩猟による食糧生産活動に重きをおいた組成を示している。

第18表 石器組成表

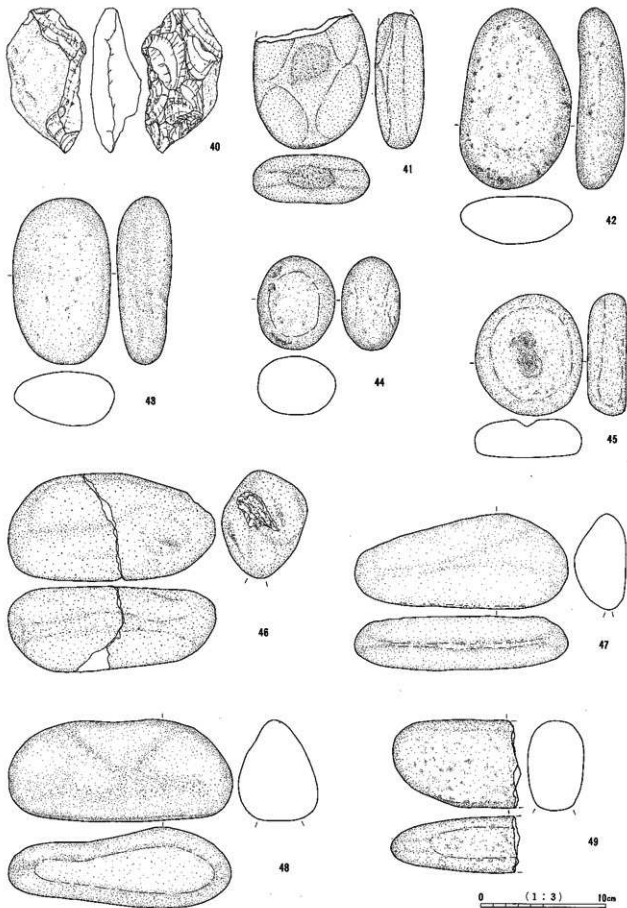
種別 (%)	狩 猟 具 34.9%		漁撈具 0.5%	採集具 8.0%	調 理 ・ 加 工 具 51.8%							加 工 具 4.8%			
	石 鏃	石 槍	石 錐	打製石斧	台 石	磨石類	特殊磨石	スタンプ	礫 器	大形刃器	石 匙	刃 器	磨製石斧	石 錐	砥 石
点 数 計393	134	3	2	32	0	46	26	3	3	14	16	95	6	7	6
(%)	34.1%	0.8%	0.5%	8.1	0	11.7%	6.6%	0.8%	0.8%	3.6%	4.1%	24.2%	1.5%	1.8%	1.5%



第85図 西区出土石器実測図 (9・14: SK04, 13: SK07, その他: 西区遺構外)



第86図 遺構出土石器実測図(1) (29・30・32・36・39: S B12, 33: S B12B, 17~21・31・34・37・38: S B13, 22~28・35: S B14)



第97図 遺構出土石器実測図(2) (41・46: SB12, 40・42~45・48・49: SB13, 47: SB14)

前項で述べたとおり、出土した縄文土器の時期は継続的に長期間にわたり、地点・層位によって時期区分できる部分はほとんどない。したがって土器との伴関係から石器群の帰属する時期を限定することはできない。多少の時期幅のなかで石器の時期を把握できるのは遺構出土資料である。東区下段のSB11・12・12B・13・14(第86・87図)が第I群第3類土器から第II群第1・2類土器の時期、すなわち縄文早期末葉から前期前半と考えられる。また西区のSK04(第85図9・14)は第IV群第3類の晩期末葉である。東区上段は第IV群第2類土器のみであるが、石器は出土しなかった。出土土器で量が多いのはここでふれた群・類であるが、特殊磨石・石匙・刃器が相当量含まれることから、石器群の主体は第IV群よりSB11～14の時期に属するものと推定される。

以下に出土資料を報告するが、記述は第3章鳥林遺跡の第4節1(2)に準じ、器種分類および器種内の分類もそれに従う。ただし鳥林遺跡で出土しなかったか、少数のため分類を行わなかった器種については本項で独自に分類した。なお、これまでふれたとおり大部分の石器の時期が不明のため、特に原石・石核・剥片・砕片などの石屑については定量的な検討はあまり意味がないと思われるため、記述も省略した。

② 原石・石核(第86図37、第88図50～54、第19表、PL34)

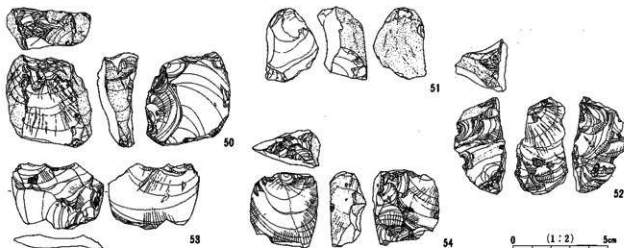
総数217点が出土し、石質は黒曜石が127点(58.5%)、その他のチャート・ホルンフェルスなどが90点(41.5%)である。剥片剥離作業を一度も行わない原石はほとんど見られない。原石または石核から厚手の剥片を剥離してこれを石核とする第2種が多い(37・50～52・54)。50は黒曜石の石核として最大で、40.6gを測る。52以外は自然面を打面としている。調査範囲周辺からは準大程度までの鉄石英の角礫が採集されるが、これを用いた石器はきわめて少ないため(78)、原石として扱わなかった。

③ 剥片・砕片(第88図53、第89図55～60、第19表、PL34)

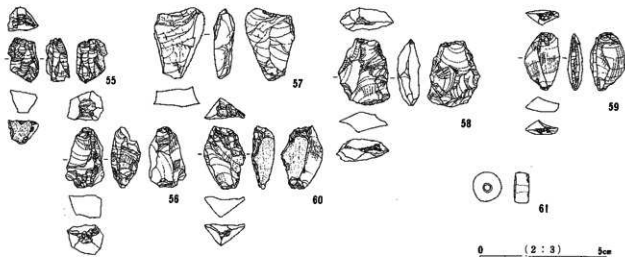
総数2,171点が出土し、石質は黒曜石1,632点(75.2%)、その他539点(24.8%)である。このうち両極剥離痕を有する剥片A類は66点含まれ、黒曜石57点、その他9点である。上下両端部の形態には、III類一面と点(55)、IV類一線と線(57)、V類一線と点(58・60)、VI類一点と点(56・59)の各種がある。

第19表 石屑集計表

種別	石質	母岩		石屑		合計
		原石・石核	剥片ほか	両極剥片		
点	黒曜石	127	1575	57	1759	
	(%)	58.5%	74.8%	86.4%	73.6%	
	その他	90	530	9	629	
数	(%)	41.5%	25.2%	13.6%	26.4%	
	小計	217	2105	66	2388	
	(%)	9.1%	88.1%	2.8%	100%	



第88図 石核・剥片(1)実測図(東区 51:中段、その他:下段)



第89図 剥片(2)・玉実測図 (東区 59: 中段, その他: 下段)

④ 石 鏃 (第85図1~7、第86図17~28、第90図62~87、第20表、PL34)

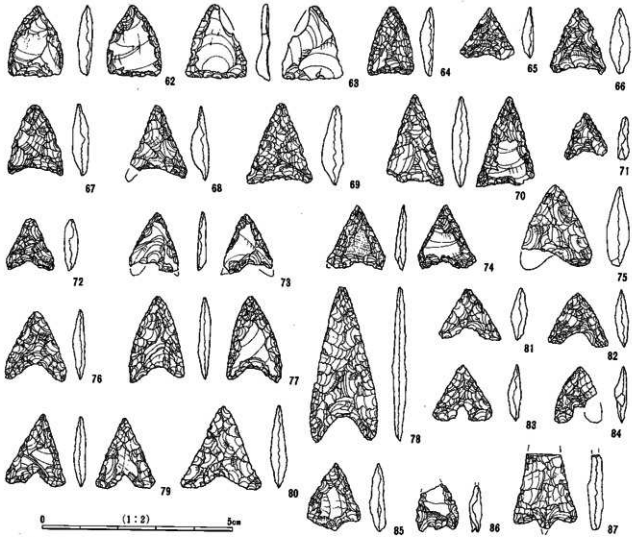
製品108点・失敗品25点で、総数133点を数える。石質は黒曜石86点(65%)、チャート24点(18%)、ホルンフェルス20点(15%)、その他3点(2%)である。石質の利用状況については、I B 2類のみ黒曜石がやや少数のほか、各種形態・不明品・失敗品の間に差異がない。

製品について形態分類できたのは78点で、有茎のII類3点(2・86・87)以外は無茎のI類である。基部の形態から大別すると、平基のI A類が16点(3・4・21・62~64)、凹基でえぐりの浅いI B 1類が37点(1・17~19・22~24・26・28・65~75)、えぐりの深いI B 2類が20点(5~7・20・28・76~84)、凸基のI C類が2点(27・85)である。完形品のないII類を除くこれらの4類36点の法量の平均値は第20表のとおりで、黒曜石を用いるものが比較的小形で軽い傾向があるものの、形態別ではほとんど差異が指摘できない(第91図)。

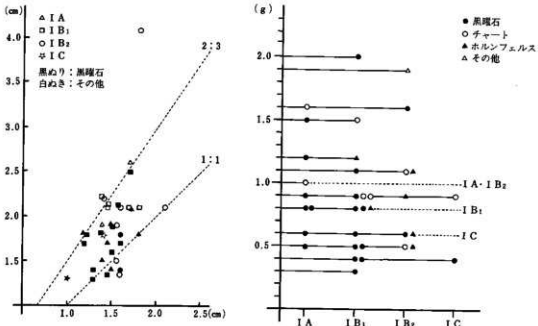
I A・B 1・2類の部分的特徴については、脚部の形態は先端が尖るX(3・4・17・18・20・21・24・62~64・67~70・72・74・77・78)、丸みをもつY(1・7・19・23・26・65・66・71・75・76・80)、角ばるZ(5・6・22・28・73・79・81~84)の3種に大別できる。側縁部の形態には、外湾するa(7・18・20・21・24・26・28・62~64・67・72・73・75~78・82・84)、直線的なb(1・3~6・17・23・65・66・68~71・74・79

第20表 石鏃属性表

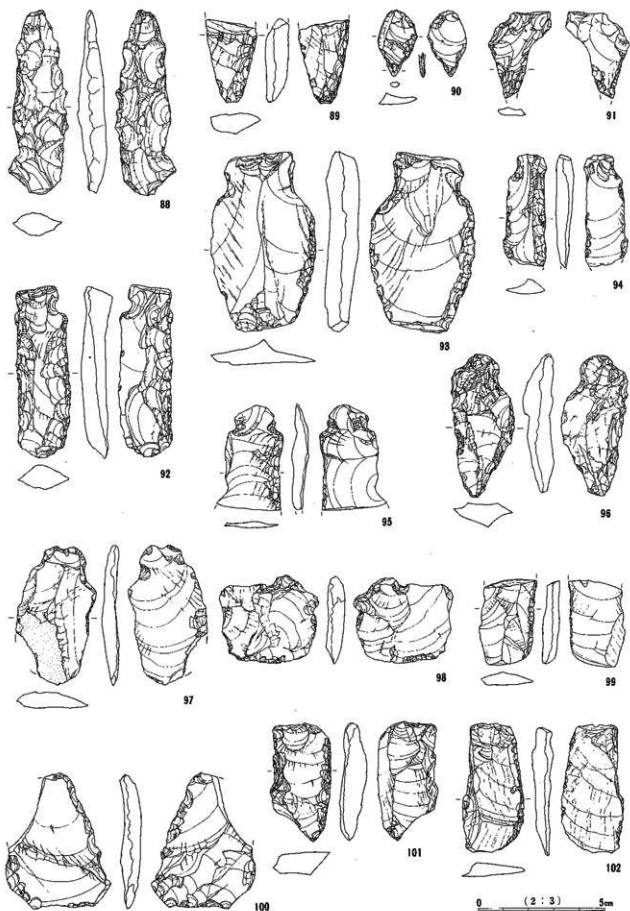
類別	法量(平均値)				計 上 数	脚部形			側辺形			欠損状態						石 質				総 数
	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		X	Y	Z	a	b	c	A	B	C	D	E	F	黒 曜 石	チャ ート	ホル ンフェ ルス	其 他	
I A	18.6	15.2	4.5	1.0	9	12	4	—	6	10	—	3	3	1	—	—	11	4	1	—	16	
I B ₁	18.6	14.7	4.3	0.8	16	23	10	4	17	18	2	5	16	—	—	1	1	25	6	6	—	37
I B ₂	20.5	16.5	3.8	1.0	9	4	4	11	9	10	1	2	8	—	2	1	—	8	6	5	1	20
I C	15.5	12.0	4.0	0.6	2	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	1	1	1	—	—	2
II	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	1	1	—	—	2	—	—	1	1	1	—	3
不明	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	5	3	4	8	4	7	24	3	2	1	30
失敗品①	20.8	17.2	4.7	1.5	14	—	1	—	1	—	—	—	—	—	—	—	7	2	4	1	14	
失敗品②	19.5	15.4	4.9	1.1	11	4	3	—	3	4	—	—	—	—	—	—	9	1	1	—	11	
合 計																	86	24	20	3	133	



第90図 石鏃実測図 (東区 63・65・68・72~75・78~81・83・84：中段、その他：下段)



第91図 石鏃鉄量相関図



第92図 石槍・石錐・石匙・刃器(1)実測図 (東区 89-93・95・99・101:中段、その他:下段)

~81・83)、内湾するC(22)の3種がある。各類とも長幅比は3:2から1:1の範囲に集まり(第91図)、IA類は比較的等三角形に近い形態が多い。以上の諸特徴の組み合わせを見ると、いずれの類も側縁部形態はa・b種がほぼ半数ずつを占める。脚部形態ではIA・B1類がX・Y種の順なのに対して、IB2類はZ種がもっとも多く、5・6・79・81~84やY種の7・28など特徴的な形態が見られる。このような形態は鳥林遺跡でも多数出土し、早期の石鏃と思われる。78はもっとも長大で唯一鉄石英を用いている。

IC・II類は少数で、晩期の可能性がある。2は欠損品ながら飛行機鏃に類似する。

欠損状態は、どの類も脚の一部を欠損するBが多く、先端を欠損するAが同数かこれに次ぐ。

⑤ 石 槍 (第86図29、第92図88・89、PL35)

3点出土し、ホルンフェルスを用いている。88は完形品で長さ7.4cm、幅2.1cmを測る。縦長剥片を素材とし、大まかな両面加工によって成形する。89は半分程度欠損し、厚みのある縦長剥片の側縁に急角度の剝離を施す。この2点は柳葉形を呈する。29は長さ7.6cm、凹基の脚部幅3.2cmで、横長剥片を大まかに両面加工する。先端の鋭利さに欠けるため、刃器の可能性もある。

⑥ 石 鏃 (第92図90・91、PL35)

7点出土し、石質はホルンフェルスを主体に、チャート、黒曜石がある。いずれも素材剥片の形態をとどめるタイプである。90は小形の剥片の側縁に細かい剝離を施し、三角形の短い錐部を作る。側縁には回転運動による線条痕が見られる。91は石鏃加工と同じ剝離で薄身の長い錐部を作り、基部は無加工である。第94図103は側縁の剝離を重視して刃器に含めたが、石鏃の可能性もある。

⑦ 石 匙 (第85図8・10、第86図31~33、第92図92~98、PL35)

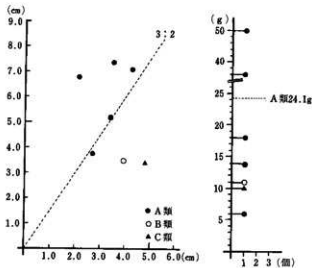
16点を数え、石質はホルンフェルスとチャートがほぼ半数ずつである。素材は31・33・98以外縦長剥片を用い、打面側につまみ部を作るもの(8・10・92~94・97・98)、逆のもの(37・95・96)、横長剥片の一端に作るもの(31・33)がある。33以外つまみ部は大きく、次のように形態分類する。

A類—基部が刃縁の長軸と平行する位置にあるいわゆる縦形で、11点ある(10・31~33・92~97)。

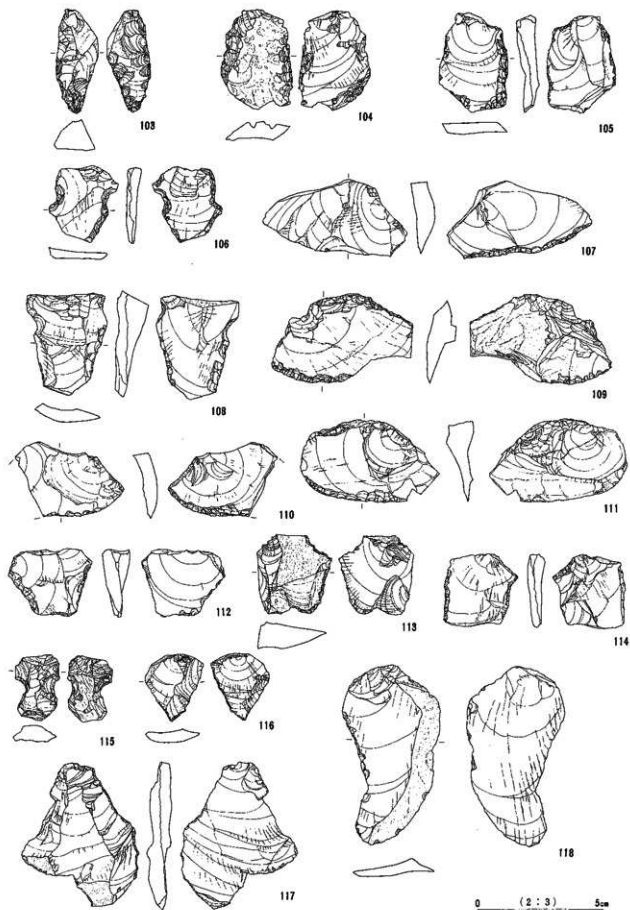
B類—基部が刃縁の長軸と45度前後に斜交する位置にある斜め形で、2点ある(8・98)。

C類—基部が刃縁の長軸と直交する位置にある横形で、3点ある。

少数のため、質量平均値の比較はあまり意味がないかもしれないが、A類は長身で大形である。刃部はA類では複刃が一般的であるが、単刃と見られる例もある(31・95)。刃部平面形は、外湾刃(10・33・93・96)、直刃(31・32・92・94・95・97)で、内湾刃は見られない。刃部断面形は片刃(31・32・93~95)・両刃(8・10)があり、両者を備えるものもある(33・92・96)。刃器第2種と同じ剝離調整で刃付けする刃部が主体であるが、刃器第1種と同じ使用による刃こぼれ状の刃部もある(97・98)。



第93図 石匙質量相關図



第94図 刃器(2)実測図 (東区 104・112・114・115・118:中段, その他:下段)

⑧ 刃器 (第85図9、第86図30・34・35、第92図99~102、第94図103~118、第95図、第21表、PL35)

総数95点に上る。石質はホルンフェルスがもっとも多く、チャート・黒曜石がこれに次ぎ、凝灰岩・安山岩なども少量見られる。東区中段の資料はホルンフェルスが圧倒的に多い。

調整剝離を施して刃部を作り出す第2種は56点を数える。素材の長辺に平行する、緩斜度の刃部をもつA類が主体で(30・99~111)、幅が狭い縦長刺片を用いる99~105・108は茎部を作り出せば石匙A類となる。複刃が多い。103は断面三角形で先端は細く、石鏟の可能性ある。106は石匙の欠損品かもしれない。30・107・109~111は横長刺片の長辺に刃部を作り、石匙B・C類に共通する。単刃が多い。刃部の平面形は直刃と外湾刃が主流で、刃のつけ方は片刃が多い。35・112~114は縦横の長さかほぼ等しい刺片に急角度の刃部を作るB類であるが、エンド・スクレイパーとはやや趣が異なる。115は小形の黒曜石刺片の両側縁に抉入状の刃部をもつC類である。

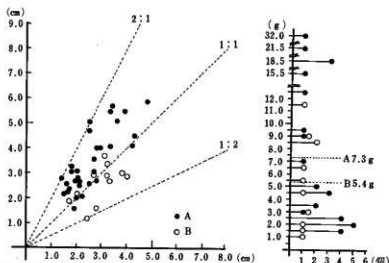
9・34・116~118は微細剝離痕が見られる第1種で、小形のものは黒曜石(9・34・116)、大形ではホルンフェルス・凝灰岩(117・118)などが比較的多い。形態には規格性がない。

⑨ 大形刃器 (第85図11、第97図119~126、PL36)

14点を数え、石質は凝灰岩・砂岩・頁岩・ホルンフェルスなどである。鋭利なホルンフェルスを用いた120・122は刃部加工を施す。11・121は横長刺片、123は縦長刺片の薄い側縁に剝離痕がある。124は半程度欠損するらしいが180gを測り、大形の刺片の側縁に粗雑な加工を行う。125・126はやや横長の刺片で、特に加工は見られない。119は両側縁を直線的に成形し、石匙のようにも見える。119・120・122以外は素材刺片の可能性もあるが、打製石斧を作るには小さすぎるであろう。欠損部のない11・125で130g前後、121・126で40g前後のため、加撃力には乏しい。

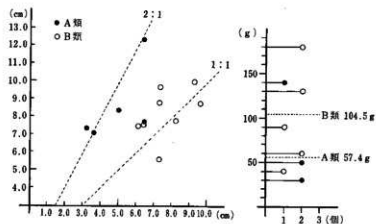
第21表 刃器属性表

種類	平均値	法 量 (金体値)				計上数	刃 部						総数		
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		刃角 (度)	刃長 (cm)	刃幅 (cm)	平面形		断面形			
2種	A	3.5	2.6	0.7	7.3	31	42	2.7	0.4	15	25	9	39	10	40
	B	2.7	2.9	0.7	5.4	11	51	2.1	0.3	6	11	5	18	4	16
1種	C	4.2	3.1	0.7	8.3	7	—	—	—	3	3	1	7	0	7
	D	3.2	3.0	1.1	8.5	1	—	—	—	0	0	1	1	0	1

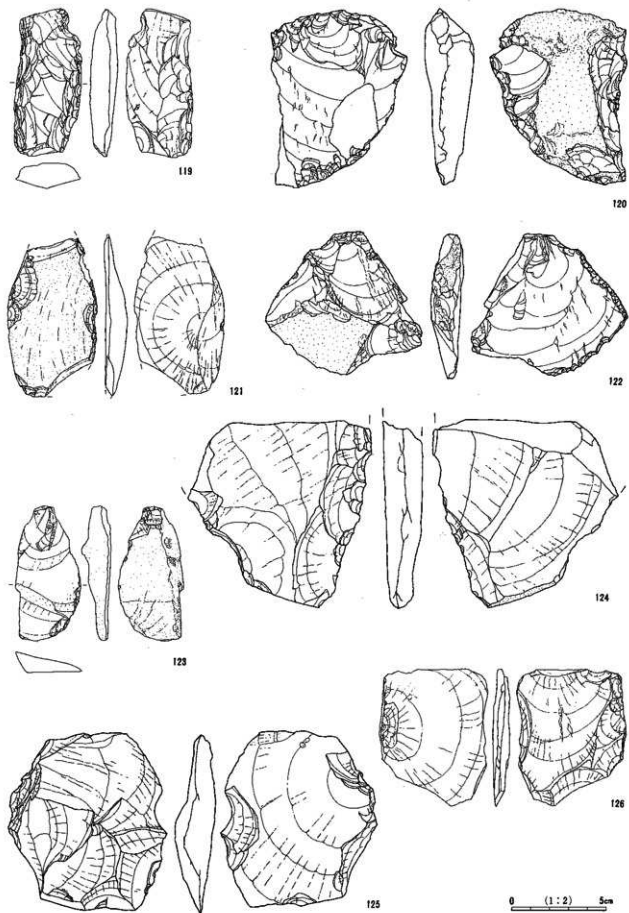


第95図 刃器法量相関図

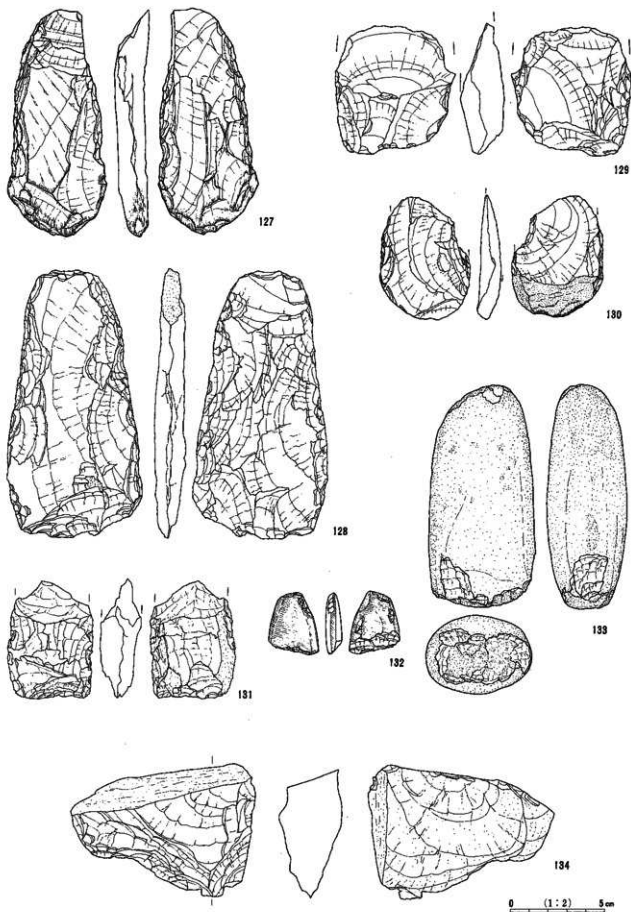
9・34・116~118は微細剝離痕が見られる第1種で、小形のものは黒曜石(9・34・116)、大形ではホルンフェルス・凝灰岩(117・118)などが比較的多い。形態には規格性がない。



第96図 大形刃器法量相関図



第97図 大形刃器実測図 (東区 120-123・126:中段、その他:下段)



第98図 打製石斧・磨製石斧・石器実測図 (東区 132・134:中段, その他:下段)

⑩ 礮 器 (第98図134、PL36)

3点出土し、凝灰岩・玄武岩を用いる。40・134ともに分厚い横長剥片の側縁に急角度の刃部を作る。40は両刃で245g、134は片刃で240gを測る。

⑪ 打製石斧 (第85図12・13、第98図127～131、PL36)

32点を数えるが、ほとんどが残欠のため、法量は不明である。凝灰岩・頁岩・砂岩などを用いる。図示したものはいずれも横長剥片を素材とするらしい。完形の127は短冊形で121.2g、128は撥形で薄く、157.5gを測る。127は刃部が摩滅し、縦方向の線状痕が見える。12は大形で分厚い基部破片である。13・129～131は刃部破片で、130・131にはわずかに線状痕がある。

⑫ 磨製石斧 (第85図14、第86図38・39、第98図132・133、PL36)

6点出土し、石質には蛇紋岩・緑色凝灰岩・閃緑岩などがある。14・38・132は小形で、38は定角式に属す。39は薄身の円刃と思われ、剝離成形痕が残る。133は乳棒状で、刃部は平坦につぶれており、敲石などに転用された可能性がある。500gを測る。

⑬ 磨石類 (第85図15、第87図41～45、第99図135～第100図158、第101図、第22表、PL37)

46点を数え、石質は安山岩を主体に花崗岩・砂岩の転石を用いる。形態は平面形か円形に近いA類が16点(45・136・141・143・144・147・148)、楕円形のB類が24点(A・C類以外)、棒状のC類が2点(150・151)で、その他4点がある。A・B類の区分は漸移的で、法量平均値に大差はないが、重量はA類477g、B類428gとA類がやや重い。

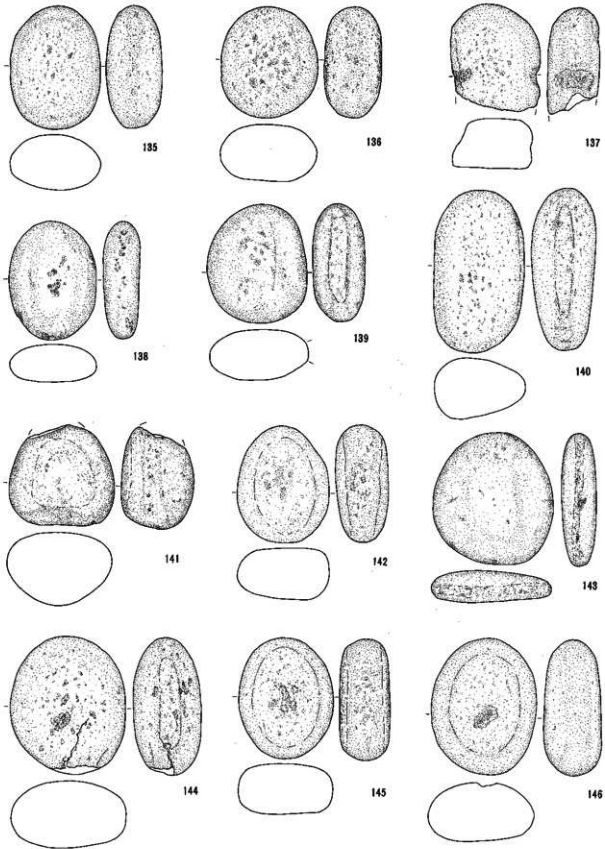
使用痕は摩耗面が一般的で、摩耗が面全体に広がるII類を表裏両面にもつものもつものも多い(15・41・43・45・135・138・139・143・145・147・153・157)。41は1面の4カ所が特に摩滅している。44・135は摩耗が表裏面の中央部のみにあるI類で、136・138・142・155・156はI・II類を表裏面にもつ。摩耗面が1面のみの例は少ない(144・146)。側面に摩耗面をあわせもつ例も多く、2側面(45・135・139)、1側面(140・144・155)がある。

表裏面の敲打痕は、くぼみを形成する1類(45・146・147・157)よりも、アバタ状を呈する2類(136・138・139・142・144・145・156)が多い。側面に2類の敲打痕をもつ例も多い(138・142・145・147・148・156)。143は薄身の円板状で、全周が敲打に用いられる。137は兩個縁の中央に1類の敲打痕があり、一種の石筵のように見える。上下端部の敲打痕は剝離痕を伴う4類が多く、1端(148・151・153～155・157)、両端(149・152・156)がある。148は礮器のように用いられる。149・151・152・154は敲打痕のみである。

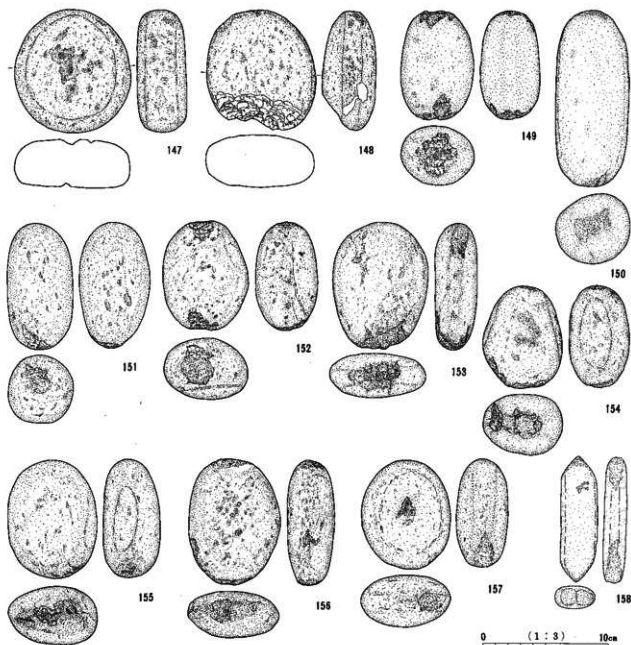
158は細長い硬砂岩の両端が左右からの敲打によって尖る特異な敲石である。関東地方の縄文晩期前半に見られ、長野県内では例が知られない。

第22表 磨石類属性表

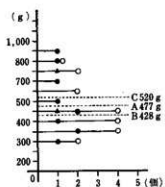
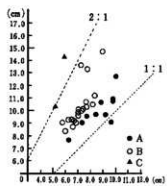
類	法量(全体値)				計 数	摩耗面・表		摩耗面・裏		同側面		両側面		欠損状態				総 数											
	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		I	II	I	II	1	2	1a	1b	1c	2	1	2		1	2	完 形	片 欠	半 欠	欠 片					
A	10.0	8.7	4.2	477	10	2	11	2	9	5	2	1	1	1	5	1	0	1	5	0	1	0	1	10	3	3	0	0	16
B	10.4	7.1	4.2	428	19	4	15	2	12	2	8	2	0	0	8	1	0	0	6	1	0	3	3	19	0	3	2	0	24
C	12.3	5.6	5.4	520	2	—	—	—	—	1	—	—	—	1	—	—	—	1	—	—	—	—	1	1	2	—	—	2	
不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	3	4
合計					31	6	26	4	22	7	11	3	1	1	14	3	0	1	12	1	1	4	5	31	4	6	2	3	46



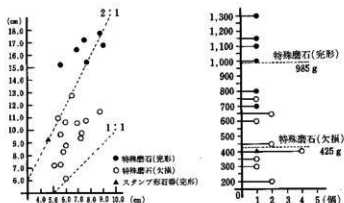
第99図 塵石類実測図(1) (東区 136・137・139-141・143・144・中段、その他:下段)



第100図 磨石類実測図(2) (東区 148・151～153・155・157：中段、その他：下段)



第101図 磨石類量量相関図



第102図 特殊磨石・スタンプ形石器量相関図

第23表 特殊磨石・スタンプ形石器属性表

器種	完・欠	法量(全体値)				計上数	平面形		断面形			磨面		端部		欠損状態			総数
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		1	2	A	B	C	1	2	敲打	欠	折	完		
特殊磨石	完	16.5	7.6	5.5	985	6	12	10	15	10	1	20	4	9	10	2	8	6	26
	欠	9.6	6.4	5.2	425	14													
スタンプ形石器		9.3	4.6	4.7	360	1	2	1	3			1	1		2			1	3

⑭ 特殊磨石・スタンプ形石器 (第87図46~49、第102図、第103図159~162、第23表、PL37)

特殊磨石26点、スタンプ形石器3点を数える。安山岩を主体に砂岩・閃緑岩少数を用いる。すべて東区の出土で、西区に縄文早期土器が見られないことと関連するのであろうか。

特殊磨石は平面形態が半円形あるいは二等辺三角形の1類と楕円形に近い2類がほぼ半数である。断面形は三角形あるいは菱形のA類がやや多く、卵形のB類がこれに次ぎ、楕円形のC類は少ない。完形品6点の平均重量は985gを測る。

稜線の磨耗面は大部分が1稜(46~49・159~161)で、2稜(162)は少ない。48は断面形がA類であるが稜線を用いず、広い平坦面が磨耗している。49・161・162は磨耗面が幅広く、46・47・159は狭い。162は磨耗面の両側に小剥離痕が見られる。46・159・161・162は端部に敲打痕をもつ。欠損品が多く、なかほどで折れるもの(46・49)とやや端部に近い部分で折れるもの(162)がある。

スタンプ形石器は図示しなかったが、稜線に磨面を伴う特殊磨石の欠損品である。

⑮ 石 錘 (第103図163、PL37)

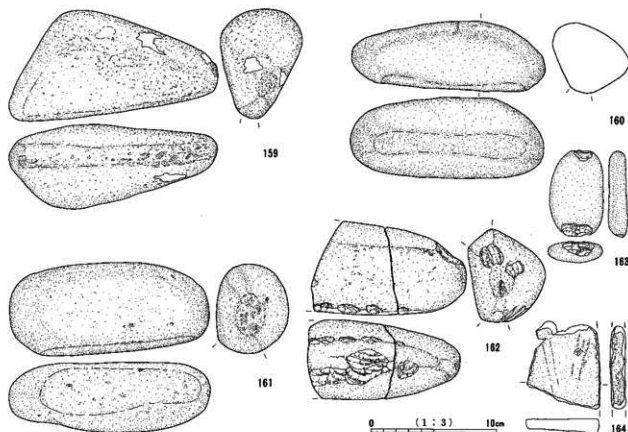
2点出土した。安山岩の楕円形小礫を用いた打ち欠き石錘である。

⑯ 砥 石 (第103図164、PL37)

6点出土した。いずれも扁平な砂岩を用い、残欠である。164は平坦な砥面にわずかに筋状の痕跡が残る。

⑰ 玉 (第89図61、PL35)

滑石製の玉が1点、東区下段から出土した。縄文晩期末業土器が集中したSQ02の範囲で、この時期の所産の可能性がある。形態は白玉と同じく、直径1.1cm・厚さ0.6cmで、中心に小孔が通ずる。



第103図 特殊磨石・石錘・砥石実測図(東区 159~161:中段, その他:下段)

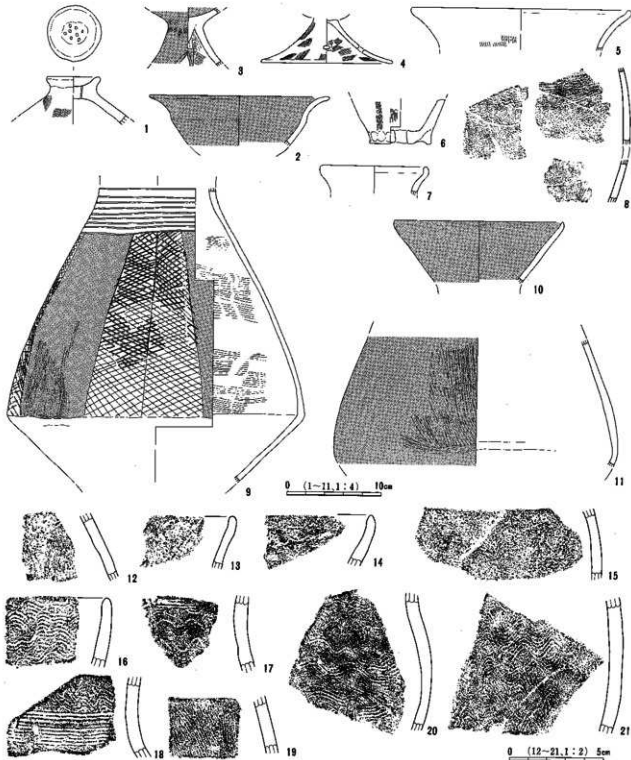
2 弥生時代の遺物

(1) 土器 (第104図1~3・5・7~19, PL38)

弥生時代の遺構としては、SK34・60・61の3基の土坑があり、いずれも後期の土器を伴った。その他は東区下段から散発的に出土した。

SK61からは9~15が出土した。9~12は赤彩の壺である。9は口縁部・底部を除いて4分の1程度が残る。胎土に粗粒砂を含み、黄褐色を呈する。器壁は厚さ5mmほどで、全体に均一である。胴部は稜からふくらみをもって頸部にいたるいちじく形に近く、最大径は推定31cmを測る。文様は、胴部に斜格子文、頸部に横位沈線文を配する。施文順序は、最初に胴部を縦ヘラミガキし、3条の縦位沈線で4単位に割り付け、区画内にまず右下がり、次いで左下がりのヘラ描沈線で斜格子文を充填した後、頸部に9条以上の平行沈線を描く。稜以下には粗いミガキを施す。内面は胴部に横ハケメを施すほかは、摩滅のため観察できない。11は胴部中位のみの大形破片である。胎土・色調・器形は9と似ており、稜はややゆるい。外面に縦ヘラミガキを施す。10は推定口径18cmの口縁部で、頸部から直線的に開き、口唇端部は受け口状である。12は斜格子文を充填した鋸歯文が見られる。13~15は横描文を施した甕である。13・14は口唇部が受け口状で、13は波状文のピッチが短く、14はやや乱雑である。

SK60からは1・2が出土した。1は類例が少ないが蓋と思われ、天井部には8個の小孔が貫通する。外面に横ハケメ、内面にナデを施し、わずかに煤状の付着物が残る。2は赤彩の高杯杯部で、弱い稜線をもつ。



第104図 弥生・古墳時代土器実測・拓本図 (4:SB06, 3:SK34, 1・2:SK60, 9~15:SK61, その他:東区下段)

SK34からは3が出土した。赤彩の高杯で、杯部は椀状を呈し、脚部には3または4単位の三角形の透かしがある。外面はハケメ調整の後ヘラミガキを施し、内面のハケメ調整部分にも赤彩痕が見られる。

5・7・8・16~19は遺構外の出土で、すべて甕である。5・6は受け口状の口縁部で、5は外面に縦ハケメがわずかに見られ、7は小形である。8・16~18は櫛描波状文を施す。8はタテハケメの後に胴部上半に間隔をあけて波状文を描く。内面には横ハケメを施す。16は口縁部が短く、内湾さみである。17・

18は簾状文が見られ、波状文の後に施文されている。20・21は波状文を上から下へ施文する。19は斜めハケメを施す甕である。

これらの土器は、弥生後期の前半と後半に大別できる。SK61出土土器はいちじく形の胴部にへら描沈線文を施す壺、受け口状の口縁部の甕などの特徴から、吉田式に比定される。5・7も同じで、8の波状文の施文部位と間隔施文の特徴も吉田式に見られる。この中で9の壺の胴部文様は類例に乏しいものである。この、頸部文様帯より胴部文様帯を重視する構成には、縦位割り付けを意識した栗林式の影響が認められ、斜格子文の系譜は樽式につながる可能性がある。また内面の横ハケメの緻密さも中期の壺の調整に似ている。1～3・16～19は後期後半の土器である。簾状文を波状文の後に施文する甕17・18、稜線が弱い高杯2などの特徴から、箱清水式に比定される。3は後期も終末段階に近く、19は古墳時代に下る可能性がある。

3 古墳時代の遺物

(1) 土 器 (第104図4・6、PL38)

古墳時代の遺構としては、SB06・10の2軒の住居址があるが、遺物量は少なく、図化に耐える土器も乏しい。4はSB06の床面から出土した小型高杯の脚部である。器壁は4mm程度で、裾部は内湾ぎみに広がる。内外面にハケメを施し、小孔3個を配する。4世紀初頭に位置付く。6は植木鉢のような形態の有孔鉢で、厚い上げ底の周囲をユビオサエシ、外面に縦ハケメ、内面に横ナデを施す。遺構外出土で、4世紀ころの所産と思われる。

4 奈良・平安時代の遺物

(1) 土器・陶磁器

4軒の竪穴住居址と土坑、土器の集中地点からの出土が多い。時期的には、8世紀前半と9世紀後半に分けることが可能で、遺物からみて空白の時期が生じる。

SB03 (第105図、PL38)

遺物の出土量は少ない。1は底部へらキリの須恵器杯AⅡ、2は杯Bと思われる。時期的には1がへらキリで丸底に近く8世紀前半と思われる。このほか、土師器長胴甕と須恵器甕破片が出土している。

SB05 (第105図、PL38)

遺物の出土量が比較的多い。1は土師器杯AⅡ、2・3は黒色土器杯AⅡ、4は須恵器杯AⅡであり、杯AⅡに3種類の焼物が存在することから、時期的には9世紀後半と思われる。5は黒色土器Aの鉢で片口がつくと思われる。6・7はいわゆる武蔵甕の口縁部で、7の頸部は「コ」の字状に屈曲する。8はロクロ調整の小型甕、9は須恵器の甕の口縁部である。

SB08 (第105図、PL38)

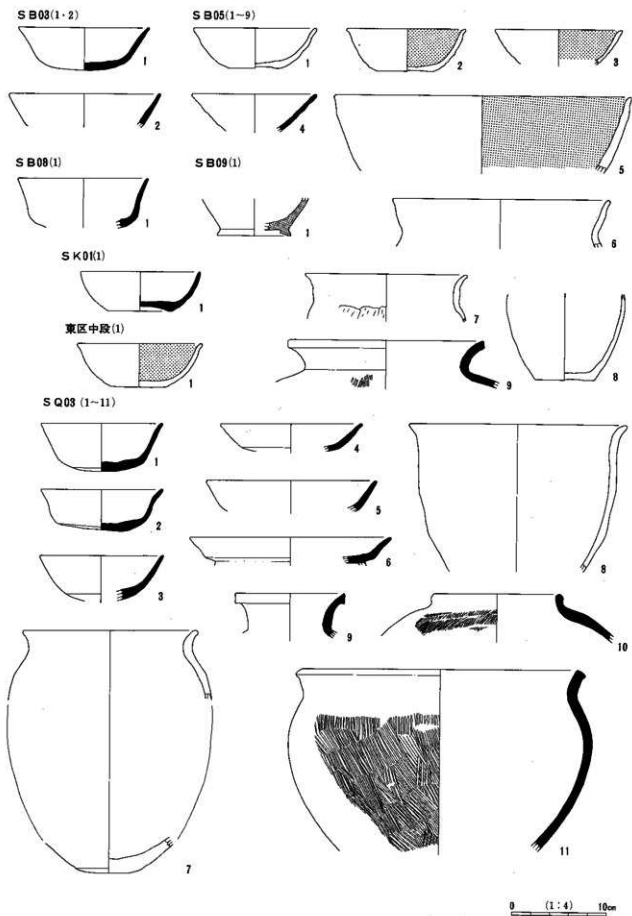
遺物の出土量は少ない。1は底部へらキリの須恵器杯AⅡであり、8世紀前半と思われる。このほか土師器長胴甕、須恵器甕破片が出土している。

SB09 (第105図)

1は東濃産灰釉陶器長頸瓶の底部である。しかし他の遺物は時期的に中世が多く、混入の可能性が高い。

SK01 (第105図)

1は須恵器杯AⅡで、底部に糸切痕が残る。焼成は軟質で黒斑も見られ、底部周囲に明確な押えが見ら



第105図 古代土器実測図

れないことから、9世紀後半と思われる。

SQ03 (第105図、PL38)

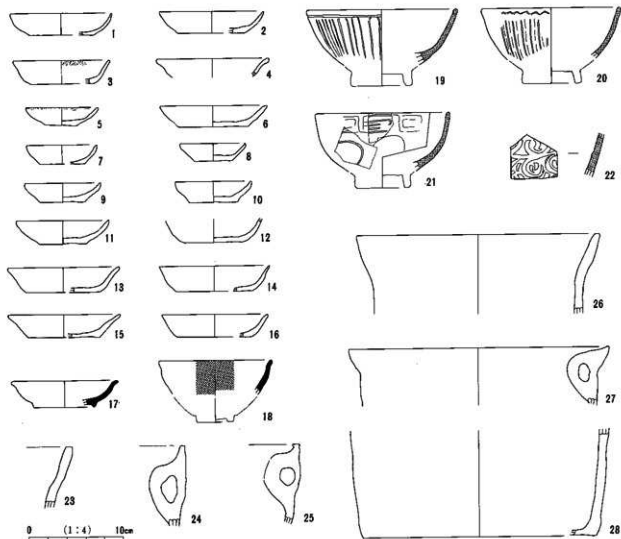
多数の遺物が集中して見られる。1～3は須恵器杯AⅡで、いずれもヘラキリで丸底を呈する。3は蓋の可能性もある。4は須恵器高杯あるいは盤になる可能性があり、5・6は杯Bである。9は須恵器の壺の頸部、10は短頸壺、11は鉢状の甕で胴回りの最大部分でタタキの方向が変えられている。7・8は土師器長胴甕で、体部外面は縦方向の粗いナデが施される。これらの遺物は時期的に見て、ほぼ8世紀前半に収まり、SB03・08と同時期である。

遺構外 (第105図、PL38)

1は黒色土器A杯Ⅱで、東中段から出土している。

(2) 鉄製品 (第108図、PL39)

1はSB05出土で鋸と思われるが、大形であり、切先と柄部を欠損した刀子の可能性も高い。



第106図 中世土器・陶磁器実測図(1) (1～4: S B07, 7・19: S K26, 8～10: S K73, 23・24: S K75, 11・12: S K95, その他: 東区遺構外)

5 中世の遺物

(1) 土器・陶磁器

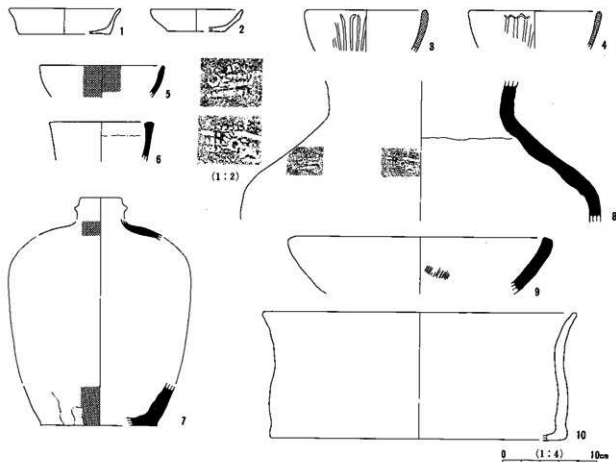
① 東 区

遺構内 (第106図、PL39)

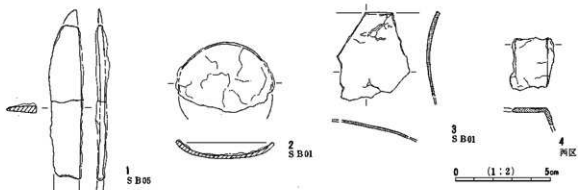
竪穴状遺構のSB07からは土器皿が出土しており、手法上からみるとロクロ調整(1~3)と手づくね(4)の二者がある。3は口縁に煤が付着しており、灯明皿として使用されたと思われる。平安時代のSB05の煙道部より、大(6)小(5)二種の法量のロクロ調整土器皿が出土しており、やはり灯明皿としての使用が推定される。SK26からは、ロクロ調整土器皿(7)と、口縁に一条の沈線をいれ縦方向に線で蓮弁文を描く龍泉窯系青磁碗(19)が出土している。時期的には15・16世紀代と思われる。SK73からは、完形で法量は異なるがほぼ同じ形態をしたロクロ調整土器皿が3点(8~10)出土している。同じSK95より、ロクロ調整土器皿が2点(11・12)が出土している。SK75よりは内耳鍋(23・24)、SK106からは瀬戸・美濃系陶器の大隆期前半の灰釉丸皿(17)が出土している。

遺構外 (第106図、PL39)

比較的多くのロクロ調整土器皿(13~16)、瀬戸・美濃系陶器の大隆期前半の天目茶碗(18)、雷文帯をもつ龍泉窯系青磁碗(21)、口縁に山形、その下部に縦方向の沈線を入れる龍泉窯系青磁碗(20)、青白磁梅瓶(22)、内耳鍋(25~28)が出土している。



第107図 中世土器・陶磁器実測図(2) (1・2・4・5・7・8 : SB01, 10 : SB04, その他 : 西区遺構外)



第108図 古代・中世鉄・銅製品実測図

② 西 区

遺構内

SB01 (第107図、PL39)

比較的まとまった資料が出土している。1・2はロクロ調整の土器皿で、4は口縁部に山形、その下部に縦方向の線描きの沈線を入れる龍泉窯系青磁碗、5は口縁の稜が明瞭でない、鉄釉が施される古瀬戸後期様式の天目茶碗、7は同じく鉄釉が施される古瀬戸後期様式の瓶子、8は常滑の甕の肩部でスタンプが押される。時期的には、陶磁器から15世紀代と考えられる。

SB05 (第107図、PL39)

口縁内部に2段のヨコナデが強く入れられる内耳鍋(10)が出土している。

遺構外 (第107図、PL39)

3は細線で蓮弁文を描く龍泉窯系青磁碗、6は貫入の入る灰釉が施される古瀬戸後期様式の香炉、9はいわゆる珠洲系の摺鉢である。

以上、個別に見てきたが、土器皿は一部を除きロクロ調整であり、伴った陶磁器より、全体的には15世紀から16世紀の前半に取まると考えられる。

(2) 金属製品 (第108図、PL39)

2・3はSB01の床面からの出土である。2は直径5cmを測る鍛造の皿に近い形態をした鉄製品である。3は比較的口径の大きい銅製の容器になると思われるが、用途は不明である。4は西区中段から出土した板状の銅製品で、強く折り曲げられる。

(3) 銭 貨 (第109図、第25表、PL39)

渡来銭がほとんどであり、時期的には唐代の開元通寶(初鑄621年)から明代の永樂通寶(初鑄1408年)まで見られ、新しい段階の陶磁器の時期と一致する。

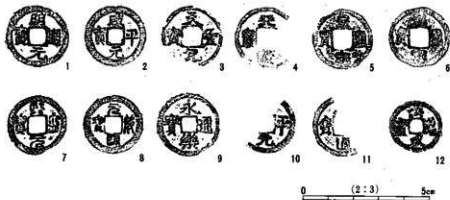
(4) 石 製 品 (第85図16)

西区から凹石が1点出土した。約半分を欠損し、180

第24表 銭貨一覧表

番号	貨幣名	書体	国号	初鑄年	出土位置
1	開元通寶		唐	621	SB07
2	咸平通寶		北宋	998	SB07
3	元聖元寶	(真)	北宋	1023	SK01
4	天聖元寶	(篆)	北宋	1023	SB01
5	皇宋通寶	(真)	北宋	1039	東区下段
6	皇宋通寶	(真)	北宋	1039	東区下段
7	熙寧元寶	(篆)	北宋	1068	東区下段
8	元符通寶	(篆)	北宋	1098	SB07
9	永樂通寶		明	1408	西区中段
10	□平元□		?	?	西区中段
11	□□通寶		?	?	東区下段
12	□□□寶		?	?	東区下段

8を測る。多孔質の安山岩円礫の1面に、素材の中心より深くまで達する大きなくぼみがある。ほかに石臼の小破片があるが、図化できなかった。



第109図 銭貨拓本図

第5節 小 結

今回の調査では、東西2地点の合計4,000㎡の調査面積ながら、縄文早期から中世に至る住居址15軒をはじめとする多数の遺構・遺物を検出した。遺跡範囲上限に当たる山麓の比較的急な斜面が、このような長期間におよぶ多彩な内容の集落址であったことは、意外な結果であった。以下に時代をおいて注目される成果に一言ふれておきたい。

縄文時代早期末と思われる住居址SB12は第I群第3類の茅山上層式・粕畑式を出土した。現在長野県内で検出された条痕文期以降の早期後葉の住居址は30例を上回るが、楕円形プランで柱穴・炉が見られない本例も一般的な形である。付近の遺物包含層から内外面に粗大な条痕文をもつ厚手土器がまとまって出土し、絡条体圧痕文1点を伴った。茅野市高風呂遺跡39・43号住居址を参考にすれば、これらが1時期をなすと考えられる。粕畑式は10片程度出土したが、北信地方では初見である。早期末の東海系土器のうち粕畑式は、それ以後天神山式までの諸型式の出土量・分布範囲を上回って中南信地方に多く分布し、大町市内にも出土例がある。千曲川流域では東信地方に散見され、川上村三沢遺跡・佐久市栗木坂遺跡群A地区・和田村男女倉遺跡C地点などが知られる。出土資料には確実に搬入品とみなせるものはなく、一部は石山式の疑いもあるが、分布範囲の北限を拡大する例となる。第2類は少数の出土ながら、おおむね田戸下層式に比定される。前章でふれたように、県内では沈線文段階の様相は不明であり、押型文系土器との並行関係などが課題となる。

前期前葉の住居址SB12Bは方形プランで壁柱穴・地床炉を備え、該期に一般的な形態である。近隣の同時期の例としては、長野市鶴前遺跡SB13が不整楕円形で柱穴・炉は不明瞭、半礼バイパス遺跡A地点3号住居址・浅川端遺跡18号住居址が隅丸の不整方形で、いずれも柱穴・炉は見られない。

晩期末葉の第IV群第3類土器は調査区の広い範囲から出土したが、東区下段のSQ01はよくまとまっている。土器の系統は浮線網状文系を主体に条痕文系・東北系(?)などを少数伴う。小破片のため器種組成は不確定であるが、小形品の123以外に浅鉢は識別できず、甕あるいは深鉢と少数の壺が見られる。甕の特徴としては、口外帯が形骸的か、あるいは認められず肩部の張りが弱く、細密条痕のほかには半軟竹管によるらしい間隔のあいた条痕が見られる。これらの特徴や組成は、小諸市永遺跡第1群土器などを基準とする「氷I式」土器より、その後半段階に位置付く松本市石行遺跡土器集中区7、あるいは「氷II式」土器に通ずる。したがって第3類土器は新旧2時期に細分可能かもしれないが、前後の時期を交えないきわめて限定された時間幅にあると考えられ、編年資料として看過できない。該期の遺構は土坑と廃棄場と思われる土器集中のみのため、遺跡の種類としては「集落」というより「住居地」とみなされる。諏訪・

松本盆地では浮線文期を中心とする遺跡群の動向が明らかになってきたが、長野盆地では晩期後半に遺跡の増加がうかがえるものの、なお資料不足のため山麓から低地への進出過程は明らかでない。

出土した土器が押型文期から晩期末葉におよぶため、石器組成は明らかにならない。大半は早期末から前期前葉の所産と思われるが、特殊磨石や石匙、石鏝の一部以外に時期決定はできない。石材について、ホルンフェルスを刃器製作に多用する点は本遺跡の目だった特徴である。

弥生・古墳時代の遺構・遺物は多くはないが、山麓部とはいえ千曲川氾濫原からかなり離れた位置にあり、同様な立地の調査例は少ない。吉田式とされる第104図9の壺は類例がなく、編年の位置付けや系統はさらに検討が必要である。

奈良・平安時代は8世紀前半(SB03・08)と9世紀後半の住居址(SB05)、遺物集中(SQ03)を検出した。SB05は一般的な規模・形態の住居址であるが、屋外に長く延びる周溝は珍しい。山側の壁際をめぐり、壁外では等高線に沿って延びており、斜面で雨水の流勢を弱めて排水する工夫と思われる。

中世の遺構には竪穴建物址5棟がある。地山を掘削しない掘立柱建物址と区別して便宜的に呼んだが、斜面で平坦な土間を確保して柱穴を備え、SB01では日常生活に用いる土器・陶磁器を伴ったことから、家屋址と見られる。SB01・04・09は山側の壁際に周溝がめぐり、SB05と共通する。これらが山側を比較的深く半円状に掘削するのに対し、ST03は壁高が低く、柱穴のほかにも多数のピットを伴い、趣が異なる。またSB07は方形竪穴状で四壁に石積みを行う。長野市小滝遺跡や、佐久市金井城跡に類例がある。SB01に隣接して火葬施設SK01・02があるが、掘り込みが浅くかなり削平されているらしい。このような火葬施設は中世後半の遺跡にしばしば見られるが、北信地方でも戦前まで類似の施設で火葬を行っていた地域があるというから、使用方法など参考になろう。なお、本遺跡の北東に小坂城がある。

余談ではあるが、調査の2年後に遺跡を訪れる機会があった。雑草が生い茂り、住居址には水がたまって壁は崩れ、二冬を経た礫までが風化しているありさまは、廃絶後の集落が遺跡と化していく過程を思わせて印象的であった。また、痕跡をとどめずに消滅した遺構・遺物がいかに多いか実感した。それとともに、本遺跡ほどの斜面立地の集落では、想像以上に雨水対策に気を配ったであろうことがしのげられた。

参考文献

- 中沢道彦 1991 「中部高地の動向」『東日本における稲作の受容』第1回東日本歴史文化財研究会
 宮本長二郎 1985 「縄文時代の竪穴住居—長野県」『信濃』III・37-5)
 百瀬長秀 近刊 「浮線文期遺跡分布論」『中部高地の考古学IV』
 綿田弘実ほか 1994 「向六工遺跡ほか」『中央自動車道長野線歴史文化財発掘調査報告書12—東筑摩郡坂北村・麻績村内』



小坂西遺跡の現況